
明後日の花嫁

日ノ瀬 亜樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明後日の花嫁

【Nコード】

N88220

【作者名】

日ノ瀬 亜樹

【あらすじ】

結婚って出会って明後日にするものですか？

主人公は黒い謎の影に追われて、神社に逃げ込み身を守るために御神体の刀を引き抜くと突然光り出し、目が覚めたら異世界だった。保護したのは美形の公爵。かなりテンションの高い公爵の姉により公爵と結婚するしかないかも？

第一話 現実ではない世界

斎鹿は、山々に囲まれた小さな村で育った。家は村を見下ろす小高い丘の上の日本家で、小学校や中学校、高校の通学には毎日山を越えなければならなかった。脚力には自信が付き、学生時代は運動部にひっきりなしに誘われた。しかし、斎鹿は家が遠いことを理由にそれらをことごとく退け、家にまっすぐ帰り祖母の手伝いをして過ごした。

両親は、幼いころに事故で亡くなってしまい、それ以来村の全員が斎鹿にとつての家族だと思ってきた。祖母は優しく何でも教えてくれたし、村の住人は近くに斎鹿以外に幼子がいなかったから厳しくも自然の遊びや農作業、川に釣りに連れて行ってくれた。おかげで斎鹿は、女の子でありながら並の男よりも立派な野性児に育った。腰まである長い黒髪をポニーテールにして、灰色のパーカーに濃紺のジーンズの斎鹿が出かけようと靴を履き、玄関口に立つと祖母が声を掛けた。

「今日は、由知名山にはいつちやいけんよ。なあんか、よわからんもんが来とるで。」

斎鹿の祖母は不思議な人物だった。

白髪のお団子頭に布を巻いて、もんぺをはいて畑仕事をしていたが、祖母の言うことには何か力があるようで、その言葉の通りになることがあった。村の東側にある井戸が枯れた時も祖母が「東の水神さんの大切な大楠を切ったから、悔いて大楠を祀りなさい」と言うど枯れた井戸が戻ったりとこの村では祖母は巫女的存在で大切にされている。

「……うん。」

「またか」と呆れたようにため息をつく。生返事をした斎鹿は、駆け足で丘を下って行った。

あぜ道を走っていると、周りには田んぼや畑で農作業をしている人達に声を掛けられたり、手を振られ振り返したりしながらだんだんと由知名山が近づいてきた。村は過疎化が続き、若者たちがほとんど出払って斎鹿が走っていて出会う人達もみんな年老いている。自分はずっとこの村に残り恩返ししようと考えた斎鹿だったが、祖母に話してもそのことを認めようとはしてくれなかった。そんな事を考えながら歩いていると、斎鹿は周囲の気配がいつもと違うことに気がついた。天気は良いし風もゆるやかだが、鳥たちが静かだ。森の木々たちも何かに警戒するようにその葉を尖らせているように感じた。

斎鹿は立ち止まり、辺りを見回した。

すると、急に足首を掴まれた。驚いた斎鹿は、足首に纏わりついたドロリとしたものを振りほどいて、由知名山に向かって走り出した。全力で走りながら後ろを振り返ると、黒い人型でどろどろとその周りを液体が流れているものが何体も地面から湧き上がっていた。

「・・・・・・・・っ！」

斎鹿は声にもならない声を出し、由知名山にある神社に逃げ込もうと長い石段を登り始めた。後から追ってくる黒い影は、だんだんと斎鹿との距離を縮めてくる。斎鹿が神社の本殿に着いた時、すっかり息が上がっていたが本殿の扉を開け、御神体の刀を持って鞘から引き抜き、扉を閉めた。刀は、長い間使われていないことから刃の部分はぼろぼろになってはいたが、柄の下に通っていた紐の先端にある青い宝石だけが輝いていた。

しばらく扉の近くの壁に背を預け、片膝をついて息を潜めたいだが、黒い影が追いついたようで扉の隙間からそっと覗き見ると、本

殿の周りには先ほどの倍の黒い影が斎鹿を探しているようだった。そして、ついに斎鹿の隠れている本殿に手が伸びた。だんだんと扉が開いていく。

すると、刀の青い宝石が光り、眩い光りに黒い影が醜い叫び声をあげ、斎鹿も手で目を覆ったが余り効果はなく、斎鹿はそのまま気を失ってしまった。

斎鹿が目を覚ますと、青々とした澄んだ空が見えた。

ゆっくりと身体を起こすと、斎鹿は手に刀を持っていることに気付いた。しかし、それは本殿で見た古びた刀とは違い、水晶のように透き通った刃に斎鹿の目は釘付けになった。その刀をゆっくりと鞘にしまい、斎鹿は辺りをゆっくりと歩き出した。

木々の間からはあたたかな光が差し込み、近くには湖があり魚も泳いでいた。色とりどりの花畑もあり、蝶が空を舞っていた。まるで現実ではないような世界で斎鹿は花畑に腰を下ろした。

「誰です？」

シルクのような艶やかな腰まで届く銀髪に黒い上下のスーツのように胸には金の刺繍、さらにその上から黒いローブを纏っている180センチの長身の男が現れた。

斎鹿は、何が起こっているかわからず、男の美形ともいえる顔に釘付けになっていた。

「聞いているのですか。あなたはどこからきたのです？」

男がきつめに問いかけると斎鹿の頬には、涙がポロッと流れた。

自分でもどうしたら良いかわからない。知らない男には問い詰められる。変な黒い影には追いかけられる。今日一日の自分の現実ではない一日に戸惑いしか考えられなかった。斎鹿の涙に男はしばらく戸惑っていたが、深くため息をつくときと斎鹿に手を伸ばした。

「何か事情があるようですね。我が家へ来なさい。」

斎鹿は、綺麗に整った男のライトグリーンの瞳をじっと見つめると、差し伸べられた手に自分の手を乗せた。

第一話 現実ではない世界（後書き）

ありがとうございました。

第二話 お嫁になります？

斎鹿を保護した長い銀髪の男は、サリルト・アルファイオス。

森の中を男に手を引かれるまま歩いていると、サリルトが自分の名と公爵家のことなど色んなことを斎鹿に話してくれた。けして怪しいものではないということも。

斎鹿は、自分を安心させるためだろうと止めどなく流れる涙を拭いながら聞いていた。

サリルトは、フルーレ王国の公爵家の長男で国王を補佐する仕事についているということ、もし斎鹿が移民なら偉そうに自分の家で働いてもいいとも言ってくれた。

しばらく歩いて行くと中世ヨーロッパのような城が現れた。あまりの事にびっくりしている斎鹿をよそにサリルトはどんどんと城へと近づいていく。手を引かれるままの斎鹿は、そのままついていく。大きな入口の前まで来ると、扉をノックした。

「どちら様でございましょうか？」

中から老紳士と思われる人物の声が聞こえた。

サリルトが老紳士に声を掛けると、重厚な扉がゆっくりと開き、閉ざされていた城内の様子が見えた。

豪華絢爛の一言しかでないような天井のシャンデリア、床には金の模様が彩られた赤い絨毯が全面に使われ、そこかしこに置かれている陶器や彫刻、絵画は斎鹿が見ただけでも高級品とわかる。

中に入り、しばらく呆けていた斎鹿は突然柔らかいものに顔を包まれた。

「ようこそ！アルファイオス公爵家へ。あなたみたいな可愛らしいお嬢さんが妹になると思うと嬉しいわ。サリルトは、顔は良いけど

無愛想で冷たいし、本当に殴りたくなるくらい正論ばかりだから正直お嫁さんになりたいなんて奇特なお嬢さんはいないと思っただけ、これで私も安心わ。」

「・・・・・・・・むがつ」

サリルトと同じ銀髪の巻き毛で、真つ赤な胸元が大胆に開いているAラインワンピースが妖艶さと可愛らしさを醸し出している。サリルトと同じ瞳を潤ませて、斎鹿をさらにきつく抱きしめた。

158センチの斎鹿が170センチほどの差がある2人では斎鹿にとっては苦しい事以外考えられない。

「姉上、彼女を離してさしあげて下さい。」

冷静な声と共にサリルトは姉に手を伸ばし、斎鹿を助け出した。頬をふくらました女性は、両手を腰に当てた。

「まあ、サリーちゃんたら。ふふ、花嫁ちゃんを盗られるのが悔しいのね。」

「違います。」

「まあ、早速ダーリンにもサリーちゃんの結婚を知らせてあげなくっちゃ。」

「違います。」

「披露宴や結婚式は盛大にしないわね。セバスチャン、予約してあげて。まあ、これからが忙しいわね。急がなくっちゃ、それじゃあね。」

呆れてものも言えないというように大きなため息をサリルトは吐き、姉と姉の後ろに控えていた執事セバスチャンを送り出した後、玄関に控えていた老紳士に扉に鍵をかけるように伝えたと再び斎鹿の手を引いて城の奥へと歩き出した。

歩き出してすぐの左側の扉を開けると、応接室のようで扉の正面に暖炉があり、家具は茶色を基調とした落ち着いた色ですべて整えられていた。

応接室の中央に机と机の両側に長椅子が置かれていた。

サリルトは、斎鹿を片側の椅子に座るように声を掛けた。斎鹿が座ると、一度部屋を出て先ほどの老紳士にお茶を用意するように声を掛けてるのが聞こえた。

サリルトが戻ってくると斎鹿はいつの間にか驚きすぎて涙が止まっていることに気がついた。

「それでは、なぜあそこにいたのか答えてもらおうか。」

斎鹿とは反対の長椅子にゆっくりと座ったサリルトは、座ったまま斎鹿を見下ろした。

斎鹿は今までの経緯を話した。

「・・・わからない。道を歩いていたら変な黒いのが出て、追っかけてきて、神社の御神体の刀をかまえて、そしたらピカッて光って気が付いたら・・・」

涙を流しながら必死に話そうとする斎鹿に、ため息を吐いたサリルトはその場を立ち上がり、ゆっくりと斎鹿の隣へと腰かけた。斎鹿の肩に手を置き、斎鹿にハンカチを差し出した。

その時、閉めたはずの扉がボタンという大きな音をたてて開き、先ほど嵐のように去って行ったはずの『姉上』と呼ばれていた人物が再び現れたのである。

そして、2人を見つけると満面の笑みで、引きとめようとしていたであろう老紳士執事を押し退けて室内にヒールの音を響かせて入ってくる。サリルトが手をかざし、引きとめようとしている執事に下がるように合図すると執事はサリルトに一礼し部屋を退出した。

「こんな昼間から女の子を手籠にしてるなんて、なかなか結婚しないと思ったらちゃんど相手がいたのね。日取りを決める前に両親に挨拶とか色々あるでしょ？」

だから、お父様とお母様にこの屋敷に来ていただけるように頼んだら、明後日にもこちらに来て頂けるそうよ。私ってなんて弟思いなのかしら。」

あまりのことの発展の凄さに、斎鹿とサリルトは何も言えずに固まってしまった。

咄嗟にサリルトが姉に反論をする。

「姉上、私と彼女はそのような関係ではないと先程も否定いたしました。」

「でも、サリーちゃんがこの家に女の子を連れてくるのは初めてですよ？」

つまり・・・結婚するってことでしょ???」

「・・・・・・・・・・違います。」

どつやら齋鹿は、明後日にもお嫁になるかもしれないらしい？

第三話 戸籍の小悪魔

突然の姉上と呼ばれる人物の襲来に戸惑う斎鹿は、自分の隣に腰かけていたサリルトの服の袖を引いた。

姉と言いついていたサリルトはそれに気づき、斎鹿を安心させるように斎賀の肩に手を置いた。

それを見た姉上は、ふふふと口の前に手をあてて悪戯っ子のように微笑んでいた。その顔は、女神のように美しいが、斎鹿とサリルトには小悪魔のように翼が生えているのが見えた気がした。

サリエルが深く長椅子に腰かけたため息を吐く。斎鹿は、呆然と反対側の長椅子に優雅に座る姉上を見ているしかなかった。

「私としたことが、まだお名前を聞いていなかったわ。」

改めて聞いてみる鈴を転がしたような可愛い声に斎鹿はだんだんと自分が状況に慣れてきているのを感じた。斎鹿は一人っ子なので、姉弟の関係というものはこういうものなのかと唖然としたが、姉上と呼ばれる人物の天真爛漫発言のおかげで落ち着きを取り戻してきた。

斎鹿はサリルトから姉上に視線を移し、話し始めた。

「斎鹿です。」

自分でも何でここに来てしまったのかわからなくて・・・」

「・・・まあ。」

姉上は、再び口の前に手をあてると、サリルトと同じライトグリーンの瞳で弟を鋭い眼光で睨んだ。

そして、机の上を白く滑らかな手が斎鹿の膝に置かれていた方の

手を掴むと、優しく握りました。その行動に、斎鹿は自分の手と姉上の手を見て戸惑うしかなかったが、ふっと姉上の顔をみると瞳には涙が溜まっていた。

サリルトもその様子をみて、驚いたように斎鹿の肩に置いていた手を姉に伸ばすと、パンつと音がしたと同時に自分の手が斎鹿の手を握っていた手に叩かれていた。

「・・・サリルト、あなたに失望しました。」

「・・・・・・・・・・は？」

サリルトは何を言い始めたのかと耳を疑った。

「それが・・・お嬢さんを同意もなしに攫ってくるなんて！」

お父様やお母様がこれをお聞きになったらどんなに悲しむか。あなたが考えていないなんて！」

涙をためた両眼で睨まれ、可愛らしい声でまくし立てられたサリルトは、姉上がかなりの勘違いをしていることに気付き、冷静にため息を吐く。

「姉上・・・彼女はどうかやらこちらではない世界の方です。青い苑で保護したのです。」

姉上は、あらつと小首を傾げて目を瞬かせた。

そして、先程まで斎鹿が話していたことをサリルトは姉上に話した。話をしてもまだ大まかにしか斎鹿から話を聞いておらず、サリルトも斎鹿に所々尋ねながら話を進めていった。

黒い影のこと、ご神体の刀のこと、自分のこと、今までのことを斎鹿はサリルトに尋ねられるままに答えていった。

「では、君は黒い影に追われ、神殿に行きご神体といわれる剣に触ったところ青の苑にいたんだね。」

斎鹿は、首をゆっくりと縦に振った。そして、はっと目を見開き慌てはじめた。

サリルトは、突然ソワソワし始めた斎鹿に何かあるのか問い掛けた。

「ご神体の刀、さっきのところに置いてきちゃった！」

立ち上がり扉に向かって歩きはじめようとした斎鹿の手首をサリエルが長椅子に座ったまま掴むと、落ち着くように声を掛けた。

「あとで家の者に調べに行かせよう。
それよりも、黒い影に追われていたというのなら君が1人になるのは危険だ。

君が本当の事を言っているのならの話だが。」

斎鹿の手首をきつく握り、まるで犯罪者のように疑いの眼差しを向けられた。

よくわからない世界で、よくわからない顔の良い男に問い詰められ、よくわからない彼の姉には顔の良い男の嫁だと思われ両親に紹介されそうになり、よくわからないことに今度は犯罪者か何かと思われているらしい。

斎鹿は握られている手首を振りほども、そのままサリエルの方へ向き直ると抑えていたものが溢れだしてきた。

「ちょっと、あんた！！顔がちよつと良いからっていい気になってんじゃないわよ！そりゃ、困ってる　ところを助けてもらったこと

は感謝はしてるけど、私は何にもしてない善良な一般市民なのに、なん　でそんな目で見られなきゃなんないのよ！！そりゃ、権じいの家の柿の木に登って勝手に柿食べた　り、学校サボって山で遊んだりしてたけど、私は立派な小市民よ！！」

突然勢いよく怒りはじめた斎鹿にサリルトは呆然と振り払われた手を見つめた。

「だいたいね、あんた、いい歳した大人のくせに姉ちゃんに結婚の心配してもらってんじゃないわよ！　あんたのその顔なら隠し子５人くらいいいそうなんだから、早く結婚して安心させてあげなさいよ！　まさかその歳まで結婚してないってことは・・・男が好きなの？」

「違う！！私は女が好きだ！」

斎鹿の突拍子のない発言にサリルトは間髪をいれずに立ち上がり怒声を上げ否定した。

その様子を見ていた姉上は笑いを抑えられない様子でクスクスと笑いはじめ、２人に長椅子に座るように促した。

姉上の笑い声に気付いたサリルトと斎鹿はお互いに気まずそうに再び長椅子に腰かけた。

「斎鹿ちゃんはこちらのことは何も知らないでしょ？今、外に出るのも危険だと思っし、戸籍もないで　しょう。一時の感情で行動するのは後々後悔する原因になってよ。」

姉上が斎鹿を諭すように言うと、サリルトは斎鹿に勝ち誇ったような顔をしてふんつと鼻を鳴らした。斎鹿は悔しそうにサリルトを睨む。

「それに、サリーちゃん、あなたは人に対して過敏になり過ぎよ。警戒することも大切だけど、信用することも学ばなければいけない。」

すると、今度は斎鹿が勝ち誇ったような顔をしたが、サリルトは眉をしかめ真剣な面持ちで膝に置いて手を見つめていた。

「でも、斎鹿ちゃん、戸籍がこちらにないなら作るいい方法があるわよ。」

麗しい女神のように微笑んだその顔は、斎鹿とサリルトには再び小悪魔のしっぽと黒い翼が見えたような気がした。2人は嫌な予感にごくりと息を飲んだ。

「私の弟サリルト・アルファイオス公爵と結婚すれば戸籍も自動的につくられるわよ。」

やっぱり・・・と2人は深くため息をついた。

第三話 戸籍の小悪魔（後書き）

ありがとうございました。

第四話 姉萌えの弟？

静かな沈黙が訪れた部屋に扉を叩く音が響いた。

サリルトが入るように促すと、静かに扉が開き、先程玄関で会った老紳士が真っ白なティーポットと鮮やかな模様が彩られたソーサーとティーカップを乗せたカートの横に立っていた。老紳士は、扉の前で一礼するとカートを押しながら斎鹿達がいる部屋に入り、開いた扉がまた静かに閉められた。

彼は、まさしく執事というような皺一つない黒の燕尾服に白無地のウイングカラーのシャツ、白のベストに白の蝶タイ、袖には白蝶貝のカフスが輝いていた。髪はロマンスグレーのオールバック、顔は切れ長の瞳に穏やかな顔に銀縁眼鏡、手には白の手袋をし、ゆっくりと机まで来ると再びカートの横に立つと長椅子の面々に一礼した。

「お茶のご用意をさせて頂きにまいりました。」

本物の執事だと斎鹿が驚いている間にも執事は流れるような作業でお茶の用意を整えていく。

「どうぞ。」

斎鹿の前にも執事の言葉と共に優雅にカップが置かれた。

「わたくし、アルファイオス家筆頭執事マゼンタ・リッジと申します。よろしくお願い致します。」

「あ、斎鹿です。よろしく願います。」

斎鹿は座ったまま軽く頭を下げた。

サリルトと姉上は、ダージリンのような香りのお茶を挨拶を交わしている2人を他所に味わっていた。マゼンタは、お茶の用意をし終えると公爵家当主であるサリルトに問いかけた。

「旦那様、斎鹿様のお部屋のご用意ですが、西側の白鹿の間でよろしかったでしょうか？」

マゼンタがにこやかにサリルトに問いかけると、サリルトは飲んでいたお茶をグツと詰まらせ咳を数回し、姉上は「あら」と意味深の笑みを浮かべて斎鹿を見つめた。斎鹿には何のことかわからずキョトンしていると姉上が嬉しそうに話し始めた。

「西側は妻の住まう場所よ。白鹿の間はその中でも一番の寵愛を受ける者だけが住まうことが出来る部屋なの。昔は西側は何人もの妻を住まわせることからそれぞれの部屋に名前をつけて区別してたんだ。けど、今は、妻は一人だけと決まっているから他の部屋は妻の図書室やお茶室、音楽室なんかになつてゐるわね。だから、心配しなくても大丈夫よ。」

斎鹿は、「心配してないです」と言いたかったが、せっかく飲んでいた美味しいお茶を吐き出しそうだったのでグツと我慢した。

「マゼンタ、彼女の部屋は東の客間を用意してくれ。」

「私、ここを出てく。あんたも迷惑そうだし、疑ってんならないないほうがいいでしょ。」

サリルトがマゼンタに指示していると、斎鹿はそれを遮るように強気に言った。

「疑ってはいるが年端のいかない子を放り出すようなことはしない。それに、疑っているからこそこの屋敷にいてもらった方がこちらも監視体制が整えられる。」

齒を食い縛り、サリルトの言葉を聞いていた斎鹿は、この端麗な顔を殴ってやろうと立ち上がった。

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたけど、本物のお馬鹿さんね。」

姉上が鋭い眼光でサリルトを見つめる。

「斎鹿ちゃん、ごめんなさいね。このお馬鹿な弟が、失礼なことばかり言つて。」

殴りたかったら殴っちゃつて。だから結婚出来ないのよね。私、さっきの斎鹿ちゃんの言葉でサリーちゃんにはバシツと言つてくれる人じゃないとダメだと思つたの。それに、さっき玄関先であなたに抱きついた時には、斎鹿ちゃんの記憶からは今までに言つてゐること以外嘘はなかったもの。斎鹿ちゃんは良い子よ。」

「姉上、私は結婚出来ないのではなくしないのです。」

「お黙り、サリルト」

姉上が斎鹿に穏やかに語りかける傍ら、実の弟サリルトには冷たく言い放つ。

そのまま暫し姉上とサリルトが見つめ合い、サリルトは今日何度目かになる深いため息をはいた。

「姉上がおっしゃっている以上、嘘偽りはないと言えるだろう。」

「ちょ、ちよつと待ってよ。なんで急に・・・」

突然、打って変ったように発言を変えるサリルトに、斎鹿は戸惑った。

先程まで自分を疑っていたような発言をしていたにもかかわらず、今は姉上の言葉とやらを完全に信じているのだ。

「ちょ、あんた、私の言葉は信じないで姉ちゃんの言葉は信じるって・・・まさかシスコン？」

身体をサリルトから少し離し、非難したような目で見る。

「っ違う!!!」

サリルトは今日ほど声を張り上げた日はないほど怒声を上げていた。

「シアン様には記憶を視るお力があるのですよ。」

姉上のティーカップに新しくお茶を注ぎながらマゼンタが穏やかに言った。

「シアン様？」

「私のことよ。」

見ないようにすればちゃんと記憶は視ないように出来るし、プライバシーはきちんと守るわよ。」

斎鹿の問いかけに新しく注がれた紅茶の香りを味わっていた姉上

が答えた。

「どうやら姉上の名はシアンというらしい。」

「姉上のお力は本物だ。本当のことを言っているのなら、保護する必要がある。」

「では、西側のお部屋を」

「東側の客間を用意してくれ。それと、青の苑に剣が落ちていないか搜索するよう親衛隊のツナギに伝えてくれ。」

サリルトの言葉にマゼンタが穏やかに部屋を勧めたが、それを強く否定し、剣の搜索を頼むと右手を軽く振りマゼンタに退出するよう促した。

マゼンタは笑顔のまま一礼し、部屋を退出した。

第四話 姉萌えの弟？（後書き）

ありがとうございました。

第五話 謎のチモシー

マゼンタが部屋を退出した後、楽しそうに笑っていたシアンが立ち上がり、斎鹿を東の客間へ案内しましょうと言って両手を胸の前で合わせた。

金の細やかな細工を施した手すりに手を置き大理石の階段を上り、ふかふかの赤い絨毯の上をサリルトとシアンが前を歩き、斎鹿がその後を辺りを見回しながらついていく。

時々すれ違う使用人達は一様に2人を見つけると廊下の端により2人が通り過ぎるまで頭を下げていた。敬われることに慣れていない斎鹿はそれに違和感を感じ、ガラスで花を模ったブラケットがつけられた壁とは反対側の窓に視線を移した。

窓から見える庭園には様々な形の木や左右対称の花壇、バラやアサガオが這う白亜のアーチがある西洋式庭園であった。その奥には広大な森があり、森の入り口近くに咲く青い花や白い花と湖が見え、それが青の苑であることが見て取れた。さらにその奥に屋根の青い白亜の城を守る城壁と城門が見え、小さな家がいくつも見下ろせることからこの城は小高い丘に建てられていることがわかった。

「この部屋だ。」

サリルトの声に窓から目を前に移すと、そこは廊下の一番突き当たりの部屋で焦げ茶色で花や蔦の模様を施した高さ2メートルほどの扉があり、周りを見るとそれは他の扉よりも豪華につくられていることがわかった。斎鹿が扉を凝視していると、シアンが斎鹿の手を取った。

「このお部屋は豪華とは言えないけど、とっても景色が綺麗なのよ。」

「 齋鹿を急かせるように言うと、サリルトが右手で扉を引き無言のままもう片方の手で2人を部屋に入るように進めた。」

そこは30畳ほどのイタリアンブラウンの大理石の床でできた部屋で、出入り口である扉の向かい側はすべて天井まで届くほどの大きな窓がはめられ、窓の左右にはパロットグリーンのカーテンが金の結い紐で留められ、天井には蔦をイメージしたと思われる黒色の真鍮部分と9つの黄色い花型ガラスのシャンデリアが吊り下げられていた。

扉から見て右側にはダークブラウンのクラシックスタイルの天蓋付きのクイーンサイズ猫脚ベット、窓側のその側には優美な曲線と自然をモチーフにした精緻な装飾を施した白いナイトテーブルが置かれその上に花を模ったテーブルランプ、ベットの壁側には白いドレッサーとチェストが置かれていた。

シャンデリアのすぐ下にはベットと同じ猫脚の気品ある茶色のクイーンアン様式のテーブルと椅子が四方に配置され、床には白いふかふかの絨毯。ベットとは反対側には小さな窓があり、その側には白い椅子が一脚。

「・・・すこつ。」

齋鹿が感嘆の声を上げると、シアンがふふふつと笑い齋鹿の手を引き、窓際まで連れていく。

「そうでしょ、この景色だけはこの城一番なの。」

齋鹿は部屋の内装を言ったのだが、シアンは大きな窓から見える

景色に感嘆の声を上げたと思ったようだ。それまで豪華な部屋の内装に気を取られていたが、シアンに言われ窓からの景色を見てみる。

青く澄んだ空に波のような白い雲の間から太陽の光が雄大な緑の森と湖と青の苑を照らしている。

太陽によつてきらきらと光る水面は宝石のように輝いていた。

森を見下ろし、街を見下ろし、まるで自分が天界から下界を見下ろしているような気分になえる。

「……すっつ。」

「でしょでしょ。」

元当主部屋だから、きつと一等景色のいい部屋なのね。」

「当主部屋って……。」

部屋の持ち主が誰であるかを聞き、斎鹿はサリルトの顔を見て嫌そうに眉をひそめた。

「なんだその顔は。」

嫌な顔をされて嬉しいはずもなく、サリルトは不快そうに斎鹿を見ると、後ろ手で扉を閉め、そのまま斎鹿にギリギリまで近づき上から見下ろした。

「見下ろすなっ!!」

上から見下ろされた斎鹿は、シアンに握られていた手を離し、右手で拳を振り上げると勢いよく下ろした。

サリルトはそれを難なく受け止めると、そのまま受け止めた手を

強く握る。

斎鹿は体重をかけて何とか一撃を与えようとするがサリルトはビクともしない。

「相手の力量を見極めて挑むものだ。」

嘲笑するサリルトにますます怒りが収まらない斎鹿。

「2人共、手なんか握りあっちゃって。」

2人を見て微笑ましそうに言うと、シアンは後ろを向きゆっくりと中央に置かれた椅子まで歩き向き直るとそのまま腰かけた。そして左手の掌を上向きにし、ゆっくりと2人に向かって動かし座るように促した。サリルトが斎鹿の手を離すと、もう一度斎鹿を見下ろし椅子に向かう。

「サリーちゃんたら、好きな子はいじめ過ぎると逃げちゃうわよ。」

斎鹿ちゃんもこっちへいらっしやい。

明日からのことも話さないといけないし。」

穏やかな声色だが、けして逆らうことを許さない雰囲気は言葉にはあつた。

両手に握り拳をつくり苛立っていた斎鹿は、掌を緩めゆっくりと椅子に向かい斎鹿は大窓に背を向ける真ん中に座り、その左側にシアン、右側にはサリルトが腰かけていた。

「明後日にはお父様とお母様がいらっしやるわ。」

明日はドレスを選んで、少しお勉強も必要ね。それから・・・」

「ちょ、ちょっと待って」

「なあに、齋鹿ちゃん？」

齋鹿は、なぜかサリルトとまだ結婚するということで話が進んでいるシアンの口ぶりに慌てて待ったをかけた。

「結婚しないしっ！！」

齋鹿がサリルトの腕を叩く。

「あんたも何とか言いなさいよ！」

叩かれた腕を見た後、サリルトは齋鹿をもう一度見て深くため息を吐いた。

「姉上、このチモシーと私が結婚するということはありえません。」

「チモシー？牧草？？」

齋鹿が怪訝そうな顔をして首を傾けると、それをみていたシアンが右手を口元に当てクスクスと笑いだした。何のことを言っているのかわからない齋鹿と笑い続けるシアン、それに齋鹿を一瞥したサリルトのため息がやけに大きく聞こえた。

「チモシーって何？？」

第五話 謎のチモシー（後書き）

ありがとうございました。

第六話 出しちゃったの？

「現サリルト・アルファイオス公爵。

年齢28歳、身長187？と長身に剣術で鍛えられた無駄のない絞られた身体。

流れる銀系のような美しい髪、唯一無二の宝石のようなライドグリーンの切れ長の瞳、男らしくも整った顔立ち、現フルーレ国王ロハス様にも覚えがめでたく、国王補佐として会議事項の整理、情報収集などを行い、それを統轄する役職に就き将来性あり。

斎鹿ちゃんは、うちのサリーちゃんでは何かご不満？

家柄、地位、財産、容姿、性格、こんなに整ってる殿方も珍しくてよ。」

シアンが猫脚のテーブルの上に置かれた小さな呼び鈴に手を伸ばし、軽く振るとチリンチリンと高い可愛らしい音が鳴る。

斎鹿は心の中で「性格は問題ありだ」と思ったが、お世話になっている手前黙っていると、突然4回扉をノックする音が部屋に響いた。

「セバスチャンでございます。」

シアンが入るように指示するとそこには初めてシアンに窒息させられるほど抱きしめられた時に側に控えていた男性だ。まだ30代前半というところだろうか、豊かな黒髪は右側の前髪が左よりも長く右目は窺えない。左側の目は黒く、穏やかな顔は安心感を抱かせる。服装はマゼンタと同じ黒の燕尾服に白無地のウィングカラーのシャツ、白いベストだったが、マゼンタの白の蝶タイとは違い黒いネクタイが結ばれていた。靴は汚れ一つなく磨かれ、清潔感もある。セバスチャンは、部屋に入ると一礼し、テーブルまで歩いてくる

とその穏やかな微笑みを斎鹿達に向けた。

「私の執事のセバスチャンよ。

まだ若いけど、マゼンタの次くらいに優秀なの。

セバスチャン、式の進行と式場について説明してさし上げて。」

セバスチャンは左の胸元から黒革の手帳を取り出し、琴紐が挿んであるところを開いた。

「式は明後日、午前8時大旦那様と奥様に御挨拶をして頂き、午前10時ビスコエル大聖堂へ移動して 頂き式の御準備、午後13時結婚式を開始、午後15時結婚式を終え再びアルファイオス家へ移動、 午後19時披露宴開始、午後22時披露宴終了。ドレスの採寸等は明日の午前に入れさせて頂きました。 その他御要望があれば何なりとお言いつけ下さい。」

「・・・結婚式中止して下さい。」

「何か御不満な点でもお有りでしょうか？」

「お言いつけ頂ければ何なりといたしますが？」

「・・・（すべてが不満だよ）」

穏やかな顔と口調で随分と強烈なインパクト発言をしたセバスチャンに一瞬時が止まったように辺りが静まっていたが、斎鹿はすぐに自分を取り戻し結婚式中止を訴えた。

しかし、セバスチャンにきょとした顔で聞き返され、斎鹿は心の中で不満を訴えたが開いた口が塞がらない。

「セバスチャン、そもそも私はそなたに結婚するとは告げていなは

ずだが？」

話を黙って聞いていたサリルトは長い脚を組み、腕組みをしたまま問いただすようにセバスチャンに尋ねる。

「私の主人はシアン様でございますので、シアン様のご命令あればそれを叶えるのが執事でございます。」

悪びれもなく主人のためを思い行動するのはまさに執事の鏡ではあるが、迷惑この上ない。

「さすが私の執事だわ。」

セバスチャンは主人からの褒め言葉に口元を緩める。

「お姉さん、私と弟さんはまだ会って1日も経ってないし、そもそもお互い恋愛感情なんてまったくこれっぽっちもないんです。」

「あら？」

じゃあ、斎鹿ちゃんはどうするの？

斎鹿ちゃんが思ってるほどこの国は甘くないわよ。

戸籍のないものは雇ってもらえなし、そもそも異世界人である斎鹿ちゃんはこっちの常識も知識もないのにどうやって働くつもりなの？

私はサリーちゃんが結婚して跡継ぎが必要、斎鹿ちゃんはいつ帰れるかもわからないし戸籍が必要」結婚して両方手に入れましよう！何かおかしいこと言ってる？？」

「でも、結婚はお互いを尊敬し合って相思相愛の末するものですよ。」

ここで引き下がるものかと前のめりになった斎鹿がシアンの言葉に喰い付く。

「姉上、ここは今一度考え直す時ではありませんか？

落ち着いて考えれば他にいくらでも戸籍を作る方法も跡継ぎをつくる方法もあります。」

サリルトもこのまま話を進められたのではかなわないと、他の案をシアンに提案しようとするが、シアンはそんな弟の話を頬を膨らませ左手で右肘を支え、右手を顎にあてて不満そうに聞いている。サリルトの思わぬ反撃に斎鹿も続けとばかりに勢いよく話す。

「初めていいこと言っただよ、あんた！！

そうです、お姉さん、跡継ぎなんてのは弟さんの家柄、地位、財産、容姿、性格をもつてすればどんな美人でもイチコロです。私なんか足元にも及ばない可愛いお嫁さんを貰ってくださいよ。」

勝ったっ！と斎鹿は心の中でガッツポーズをした。

「でも、招待状送っちゃったし、今さら取り消して訳にはいかなと思うのよね。」

笑顔で爆弾発言を言い放ったシアンに斎鹿は肩の力が抜け垂れ下がった。

「……えっ？出しちゃったの？」

「そう、出しちゃったの。」

満面の笑みのシアンは小悪魔を通り越し、悪魔になった。

第六話 出しちゃったの？（後書き）

ありがとうございました。

第七話 謎のチモシー、再び

ダークブラウンのクラシックスタイルの天蓋付きのクイーンサイズ猫脚ベットに斎鹿は仰向けに押し倒され、その上に足を広げて両足で斎鹿を挟むようにして乗るサリルト。

長いサリルトの銀髪が斎鹿の顔にかかる。

「・・・なんで、あんたに組み敷かれてんの？」

2時間前。

真上にあつた太陽はその姿を段々と傾け、地平線にその姿を寄り添わせていた。

「出しちゃったって・・・。」

サリルトもさすがにそこまで姉が行動しているとは思わなかったのか、その端正な顔を歪めている。

シアンは、啞然としている2人を見て嬉しそうに笑うと、椅子から立ち上がる。

「それと、今日はこのまま2人で過ごしてもらっわ。」

「それはさすがに不味いでしょ！？私達、つまりは・・・その・・・男と女なんですから・・・。」

「私としては何か有ってもらった方がいいんだけど。」

抵抗する斎鹿にシアンは斎鹿とサリルトに聞き取れない小さな声で願望を言い放つと、そのまま視線を扉がある前方に定め軽くアゴを引き背筋を伸ばして、その足に履く赤い高いヒールの音を響かせながら歩き出す。

セバスチャンは主人の行動を推測し、左手で扉を押し開ける。

「姉上!!」

「お姉さん!!」

斎鹿とサリルトの怒りを含んだ声に扉を通ったシアンが斎鹿とサリエルへと向き直る。

そして、左手を腰に当て右手の人差し指を立ててそのまま2人へと伸ばす。

「お黙り。」

お姉さまの言うことは絶対よ。
セバスチャン、扉をお閉め。」

「かしこまりました。」

「ちよっ!!?待ってよ!!」

椅子が倒れるのも気にせず、斎鹿が咄嗟に扉に駆け寄るがその前にセバスチャンの穏やかな顔を最後に閉められてしまった。扉の取っ手を力の限り斎鹿が引っ張るが、その時ガチャっという嫌な音が聞こえた。どうやら鍵を閉められたようだ。

「明日になったら開けてあげるわ。
その時までゆっくりしていてね。」

その言葉を最後に悪魔シアンのヒールの音が遠ざかっていくのが聞こえた。

シアンを留めようと叫びながら斎鹿が諦めずに開けようと押し引き引いたりを繰り返している。

「落ち着け、無駄だ。」

姉上が言っていただろう。この部屋は元当主部屋。簡単に密偵が侵入出来ぬよう頑丈に設計してある。鍵をかければ侵入出来ないと同時に出ることも叶わん。」

冷静に目を閉じて腕組みをし、そのまま椅子を立ち上がり大窓へと歩いていく。

「窓は開けられテラスに出られるが、ここは2階。飛び降りるのは危険極まりない。」

もうひとつの窓の近くには高木があるが、近くに伸びる枝は細く一人を支える力がない為不可能。つまりこの部屋からの脱出は不可能ということだ。」

「やけに冷静じゃない。」

さっきまでの結婚話だってあんまり口挿まなかったし。」

あまりの冷静な状況判断に斎鹿は取っ手を持っていた手を離し、

サリルトに向き直ると力強い大股で窓際間で歩いていく。

「初めてではないからだ。」

「・・・は？」

斎鹿がサリルトの真後ろに来た時、サリルトが唐突に振り向く。

「姉上に謀られること数十回、結婚話もこれが最初ではない。

女性と同じ部屋に入れられたことも幾度となくあるが、やましいことは一度もない。」

「それもそれで凄いわね。」

斎鹿が呆れたように腰に手をあてため息を深く吐く。

「だが・・・」

サリルトが右手を顎に当て悩んだように言い淀んだ。
すかさず斎鹿がサリルト詰め寄る。

「だが、何よ？」

「招待状までは出されたことがない。」

「・・・それ重要じゃない？」

「・・・やはりそう思うか。」

気が抜けた斎鹿は肩を落とし、目線の先にあったサリルトの黒い

靴を思い切り踏み付けようと自身の右足に力を込め振り下ろしたが、直前に靴が後ろに避けられ斎鹿は自身の安物のスニーカーを硬い床で打ち付け、その上からサリルトが斎鹿の靴を思い切り踏む。

「くっ！なんで踏むのよ！」

「踏もうとしたから踏んだ。」

サリルトは痛がつてその場で飛び跳ねている斎鹿の手を掴むと、無表情のままベットまで引つ張って行く。斎鹿は右足を引きずり素直に着いていく。予想外に痛かったらしい。

そして、サリルトの座れと指示するままベットに腰かける。

「靴を脱がせるぞ。」

サリルトは、床に膝をつき斎鹿の靴を脱がせるとそのまま剥き出しになった右足を診た。

「しばらくは痛いだろうが、どこにも異常はない。それにしても・・・小さい足だな。」

「ほっというてよ！」

斎鹿がベットに後ろ手をつき、足を振りこれ以上触られないよう抵抗する。

すると、サリルトは立ち上がり斎鹿の両肩を包み込むような大きな両手でベットへと押し押し掛かってきた。

そして、話は冒頭に戻る。

「・・・で、何で組み敷かれてんの？」

サリルトを冷めた目で見つめ、自身の両手でサリルトの胸を押し返そうと力を込める。

しかし、そんな抵抗はサリルトには無駄なようでそのまま斎鹿の顔に自身の顔を近づけてくる。

「ちょっと、何考えてんの！？やましいことないんでしょう！」

こら、変態、ロリコン、シスコン！この人、痴漢です！痴漢です！！！」

「誰が変態の上、ロリコンでシスコンで痴漢だ。」

サリルトの息が斎鹿の頬にかかり、互いの鼻と触れ合いサリルトは近づくのをとめた。

「やはり、この愛嬌のある顔に低い鼻、陽射しに焼けた麦色の肌、黒い瞳、長い黒い髪、どこからどう見てもチモシーにしか見えん。」

「またチモシーかつ！！！」

そうしているうちにアルファイオス家に赤い夕陽が差し込んだ。

第七話 謎のチモシー、再び（後書き）

ありがとうございました。

第八話 今日はため息記念日？

日は落ち、東の客間にも暗闇は訪れた。

サリルトは自身を睨みつける斎鹿の上から退き、そのまま出入り口の扉まで歩いて行くと扉の左側に埋め込まれている董色のパネルに手をかざす。

すると、天井のヤンデリアに灯りがともり、黄色の花型ガラスが部屋を明るく照らす。

「・・・何であんなことした訳？」

斎鹿はベットから起き上がり、むっとして口を尖らせた顔を大窓に映しベットの端に座る。

斎鹿の言葉に一度斎鹿に視線を向けると、中央に置かれた椅子に向かい、先程座っていた場所にもう一度腰かける。

「顔がぼやけて見えた。」

「すみませんね、はつきりしない顔で！」

口をさらに尖らせた斎鹿は、サリルトの代わりとばかりにベットに右手の拳を撃ちこんだ。

「そついう意味ではない。

視力が悪いという意味で言ったのだ。」

「・・・目が悪いの？」

「政務では眼鏡を使っているが、普段は来客中以外はかけていない。

ここにいる間はマゼンタと他の使用人の気配がわかれば用は済む。だから、青の苑で見知らぬ気配を見つけた時また姉上が婚約者候補を連れてきて迷ったのかと思い、丁重に扱ったが姉上も知らぬ様子だったので繕う必要もなくなった。」

サリルトは話ながらも眉根を寄せ、ぼやけた視界を少しでもはっきりさせようとするがどうにもならない様子で額を右手で押さえた。サリルトの言葉に斎鹿は納得したように頷いた。

「それで最初とは態度が急変したのか。」

「姉上が記憶を視るまでは密偵かと怪しんではいたが、それにしては気配が漏れ過ぎている。発言も怪しかった。」

それに……。」

サリルトが額にあてていた手で前髪を梳くとそのまま後ろに流した。

「それに？」

「自分こそ最初のしおらしい態度はどうした。涙を見せていたではないか。」

サリルトが自分が原因であるという自覚のないまま真剣な顔で斎鹿に問いかけるので、斎鹿はさらに苛々を募らせベツトにもう一撃あたえた。

「あんたの腹立つ態度でそれどころじゃなかったのよっ！」

「最早しおらしいという言葉に失礼な態度だな。」

斎鹿は齒を食い縛り座っていたベットに身体を捻って俯けに倒れ込むと唸りながら手をばたつかせ、ベットにさらなる攻撃を仕掛けたが、弾力のあるベットは斎鹿の攻撃をすべて受け止めてしまう。斎鹿がベットを攻撃していると、そこへノックの音が4回部屋に響いた。

「助けが来た！」

「馬鹿な。姉上がそのようなことを許すはずがない。」

「あんたの姉上信仰はどうでもいいわ！」

斎鹿は横になっていたベットから勢いよく起き上がるとベットを四つ這いに乗り越え、一目散に扉へと右足を引きずり走る。踏まれた右足はまだ痛いらしい。

「セバスチャンでございます。」

その声が聞こえると期待しただけに斎鹿は扉の前にがつくり膝が抜け、サリルトはやはりとため息を吐いた。

「お食事をお持ち致しました。」

その言葉にこれはチャンスと、急いで立ち上がり開くであろう左側とは逆の右側にその背をつけ開くのを待つ。しかし、開く気配はない。

カチャっという可愛らしい音に斎鹿が視線を下げると、そこには横幅約25？縦約15？の小さな扉が開いていた。そこから2人分のサンドイッチと飲み物が入っているであろうティーポット、ソー

サーの上に乗ったカップ、透明なガラスの容器に入った赤い葡萄のような粒の果物、紙ナプキンが銀のトレーに乗せられて部屋に入られる。

斎鹿はあまりの出来事に言葉を失い、再びがつくり膝が抜け項垂れる。

「何か進展はありましたでしょうか？」

「有るわけないでしょっ！」

「それは残念でございました。

まだまだ明日までは時間がございますので、お励みください。」

そう言つと再び小さな扉は閉められた。

「あっ、こらー！」

急いで斎鹿が閉められた扉を押すが、どうやら内側からは開けられない仕組みらしい。

斎鹿がそうしているとセバスチャンの足音がどんどん離れていき、その内何も聞こえなくなつた。

やはり悪魔シアンの執事はその命に忠実な使い魔らしい。

「やはりな。

姉上がそのように穴がある策を企てるものか。」

いつの間にか座っていた椅子を離れ、斎鹿の近くにやってきていたサリルトが膝をつき銀のトレーを持ち上げる。

「・・・あなたの姉ちゃん、恐ろしいわ。」

斎鹿が扉を開けるのを諦め、扉にもたれ掛かりサリルトを見上げると大きなため息を吐いた。

「今さら気付いたのか。」

トレーを持ち立ち上がったサリルトはそのまま部屋の中央のテーブルにトレーを置くと、元の席に腰かけた。

「まず腹を満たさねば出来ることも出来ん。」

サリルトが真っ直ぐなライトグリーンの瞳で斎鹿を見つめる。
見つめ合う2人。

「やっぱり変態か!」

「違っつ!!」

この状況を打開する良い案が考えられんということだっ!」

斎鹿が後ろ手を着いていた両手でファイティングポーズをすると、サリルトが机を叩いてすぐさま否定した。

その際、綺麗に並べられていたサンドイッチは倒れ、ポットとカップは大きな音をたて、赤い葡萄のような果物の数粒がガラスの器より飛び出すという被害を出した。

「はいはい、すみませんね。」

斎鹿が謝る気もなさそうに言う。と扉に？　まり立ち上がり、テーブルに向って歩き出す。

「はいはい、ではなく、はい。すみませんね、ではなく、申し訳ありません。」

テーブルに向かってくる斎鹿に言葉を注意し、カップにティーポットからお茶を注ぐ。

柑橘系の爽やかな香りから察するに、どうやらサリエルお気に入りのトウイートティーらしい。

「……（結婚出来ない理由わかったかも）。」

斎鹿もサリエルの隣の先程まで座っていた椅子に腰かけ、胸の前で手を合わせたため息を吐く。

「……今日はため息ばかり吐いてる気がする。いただきます。」

「ため息ばかり吐いているのは私も同じだ。」

今日は、2人のため息記念日。

2人は全然嬉しくない初めての記念日。

第八話 今日はため息記念日？（後書き）

ありがとうございました。

第九話 弟の甘い囁き

硬く密度が高く食べごたえがありそうな真つ黒な楕円のパンに塗られた緑のソース、肉汁が溢れ出しそうな牛肉を薄くスライスしたものとシャキシャキとした青いレタスもどき、輪切りにされた紫の薄い皮の内側にシヨッキングピンクのゼリー状物質が満たされたトマトもどきに挟まれたサンドイッチ。

その見た目に気後れした斎鹿だったが、半分に分かれた楕円のパンの片方を両手で持ち、思い切って一口齧ると派手な見かけによらず、緑のソースはなめらかな食感にコクのあるクリーミーな味で野菜そのものの味と相まって懐かしい素朴な味がした。

「見た目によらず、味はサンドイッチなのね。」

斎鹿が目丸くしていると、サリルトは右手でカップの取っ手を優雅に持ちそのまま自分の口まで運ぶ。温かいトウイートティーのコクもありながら、なおかつすっきりとした味わいがサリルトの口内に広がる。

「それはジァだ。」

「ジァ？」

サリルトが口をつけていたカップをソーサーの上に置くと長く細い指を互い違いに組む。

「手が汚れにくく食べやすい。」

忙しく食事のとれない時には重宝している。」

「利点としてはサンドイッチと変わらないのね。」

サリルトの言葉に斎鹿は食べる手を一時止め、もう一度サンドイッチ改めジアを見詰めるが、それはどう見ても配色を間違えたサンドイッチ。

だが、味は美味しいので問題なしと早くも斎鹿はこの世界の食文化に適応しジアを食べ進めた。

緑のソースを口元につけ美味しそうに大口を開けてジアを頬張る斎鹿に、サリルトは今日何度目かも知れない大きなため息を吐き、自分もジアへと手を伸ばした。

「・・・で？」

満足いくまでジアを食した斎鹿が紙ナプキンで口元を優雅とは言えない拭き方で拭くと、温くなったトウイートティーの入ったカップの取っ手に指を入れ口元まで持ち上げ、くんと香りを嗅ぐと首を傾けトウイートティーを口に運んだ。それはアールグレイに似た味がしたが、温くなってしまったからかそれよりも渋みがあり、あまり美味しいとはいえない難い味だった。

「で、とは？」

「だから、これからどうするかってことよ。」

元の世界に帰るまでどうするかとか、結婚しなくて済む方法とか。

「

サリルトはティーポットに手を伸ばし、自分のカップに白い湯気を上げながら注ぎ込む。

「異世界から来たのが本当だとわかった今、城を出て働くべきなのだから放り出すことはしない。帰れるまでここで過ごせばいい。」

斎鹿はサリルトの斎鹿の意思を無視する言葉に口を尖らせる。

「別にいいよ。」

働いてれば何とかなるもんだし、帰れる方法だって自分で調べろを考える。」

「・・・姉上も言っていたと思うが、常識も知識もないのに働くのは無理だと思うが。」

それに、元の世界に戻る方法もここに居れば色んな手立てが出来る。

街で働き、合間を見て調べるのでは碌に情報も集まらない。帰るのが遠退くだけだ。」

サリルトは当を得ている。

だが、実利のみを追求する言葉に斎鹿はさらに口を尖らせ、怒気を帯びた顔付きになる。

「それに・・・。」

「それに、何よ！」

サリエルはますます真剣な顔でその緑の宝石のような瞳を真っ直ぐ斎鹿に向ける。

斎鹿はその真摯な眼差しに不覚にも胸が高鳴った。

「・・・斎鹿。」

サリルトは斎鹿へと向き直り、その口から初めて斎鹿の名前が呼ばれる。

それは、魔法のように斎鹿の荒れていた心へと届き、心の中を優しい風のように吹き抜ける。

「な、なによ。」

斎鹿は、サリルトの瞳を直視出来ず視線を下にそらし、頬を赤く染めながらも素直な言葉は出てこない。

「ここにいて欲しい。」

突然のサリルトの告白に斎鹿はそらしていた視線をあげその緑の瞳を見上げる。

「ここまで結婚の話が進んでしまったからにはここにいて協力して欲しい。」

招待状が出されてしまったからには、私ひとりの力で姉上を説得するのは困難だ。」

身も蓋もない、その実利のみを追求する言葉。

サリルトに一瞬でも胸の高鳴りを感じてしまった斎鹿は顔を引き攣らせた。

右手の拳を胸元で握りしめ、そして、感情の赴くがままサリルトの顔めがけてその拳を放つ。

「何をする。」

難なくサリルトの左手に捕えられた斎鹿の渾身の右手。

椅子から立ち上がりながら斎鹿は前のめりになりさらに力を込め押す。

「自分に嫌気が差した！！

その澄ました顔、殴らせろっ！！」

「自分に嫌気が差してなぜ私が殴られなければならない。」

「それは、私があんたのせいで自分に嫌気が差したからだっ！！」

サリルトは斎鹿がなぜ怒っているのか理解し難いという表情で、斎鹿が懸命に押している右手を難なく押し返すと、斎鹿は次に左手の拳をサリエルの顔めがけて振り下ろす。

パシッという音と共に斎鹿の左手もサリエルに捕えられた。

両手を捕らわれ、尚も身体を斜めにし両手に自身の全体重をかける斎鹿とそれを何とも思わず顔の前で平然と受け止めているサリルト。

戦いはしばらく続き、サリルトが突然捕えていた両手を後ろにひく。

「わっ！」

ひかれた手に引っ張られるように斎鹿の身体はサリルトの胸へと倒れ込んでしまう。

鼻をサリルトの肩で打ってしまい痛んだが、それでもサリルトの胸に飛び込んでしまったことの方が斎鹿にとっては重大なことだっ

た。

「斎鹿、協力してくれるな。」

それは、悪魔の甘い囁きのように斎鹿の耳をくすぐる。

「・・・斎鹿。」

今日、三度目の名前の囁きは、最早斎鹿に抵抗する気さえ起こさせなかった。

「・・・はい。」

斎鹿はがつくりと肩を落とし、サリルトの胸の中で今日一番の大きなため息を吐いた。

姉が悪魔なら弟も悪魔。

第九話 弟の甘い囁き（後書き）

ありがとうございました。

第十話 突然の求婚？

斎鹿は幼少期に両親を亡くし父親の記憶もなく、村にはもう高齢の住人しかいなかったため、膝の上に座ったり背負ってもらったことはあるが、それも幼少期のことで高校を卒業して間もない斎鹿は自分と年の近い男性に今まで恋愛感情を持ったことはないし、男性と付き合ったこともなかった。

幼少期から精神的にも肉体的にも成熟し過ぎた男性と過ごす時間の長かった斎鹿にとって年の近い男性は精神的にも肉体的にも成熟していない彼等は「子ども」と同じで遊び仲間でしかなかった。

そもそも彼等が短くした制服のスカートの下に学校指定の長ジャージを履き、通学の際に木の枝から枝に飛び移ったり、突然草むらを抜け山から下りてくる斎鹿を「野性児」として男友達と同様な扱いをしていたことは周知の事実だった。

先程注いだトウイートティーはすっかり冷めてしまった。

思いも寄らずサリルトの胸に飛び込んでしまった斎鹿は、剣術で鍛えられたといってもきつと年中書類の作成・処理などに追われる机の上でする仕事ばかりで運動なんてからっきしで典型的なもやしっ子なんだろう、と決め込んでいたサリルトの思いの外広く筋肉質で逞しい胸が斎鹿の頬に強くあたる。

サリルトは後ろに引つ張り捕まえていた斎鹿の両手を離すと、そのまま斎鹿の両肩にそつと手を置く。

「・・・重い。」

いちいち頭にくる発言をする男、サリルト。

この男に空気を読むという言葉はないのだろうか。

斎鹿は頭をサリルトの胸に預けたまま椅子とサリルトの背中との間に手を這わせ、その背中に爪を立てて思いつきり力を入れて引っ掻く。服やローブに邪魔はされたが、サリルトが短く呻いたことからその効果は発揮されたらしい。

「痛い。」

「痛くしてるんですっ！」

背中から手を離しサリルトの両肩に手を掛けて体勢を立て直す。

「人を支えにするな。」

「あんたが結婚出来ない理由がわかってきた……。」

体勢を立て直した斎鹿がサリルトから離れ、首を傾け肩を落としてふらふらとしながら、そのままベットとは反対側にある小さな窓の近くにある白い椅子まで歩いていく。

そして、両手を上にあげて手同士を組むとそのまま「うあゝ」と大きく伸びをする。

斎鹿が伸びをするのを呆れたようにみていたサリルトは、その灰色のパーカーから覗く白い背中に思わず視線をそらした。

「はしたない。」

「ふあいはい。」

サリルトの文句に斎鹿は「またか……」とばかりに欠伸をしながらも返事をする、ドカツと音がたつような座り方で白い椅子に腰かけ、肘掛けにその腕をもたせ掛けた。

その窓辺の椅子は、腰をかける部分が窓の外を向いているのでサリルトの腹の立つ整った顔を見なくて済んだ。そのかわり、そこからは枝を伸ばした高木が見え、その葉の隙間から外灯によって照らされた整えられた庭を見ることが出来た。

そこから見る限り確かにその高木が窓に伸ばす枝は少し細いようだった。

「それと、私は結婚出来ないのではなく結婚しないのだ。」

「あんたはね、まず口うるさい、半端なく口うるさい、ずっと口うるさい。」

「口うるさいしか言っていないではないか。」

「現に口うるさい。」

「・・・・・・。」

サリルトは冷めてしまったカップを持ち上げ、そのまま中味を一口气に飲み乾した。

「その女を誑かし慣れたその顔、態度、発言、そっちのがよっぽどはしたないわっ！」

「やましいことは一度もしてないのだからはしたなくない。」

「はいはい。」

勝手にその気になる女の方が悪うございますからね。」

斎鹿は首と動かしながらおどけてみせる。

「わかった。」

そう思いたいならそのまま思っていればいい。

それよりも、今は結婚について考えた方が得策だ。」

「はいはい。」

「はい、は一回。」

「はいはい、はい。」

斎鹿はわざわざ顔だけを後ろに向け、サリルトに嫌がらせともいえる態度をとる。

サリルトはお手上げといった感じて肩を上げと再びポットに手を伸ばすと、斎鹿とサリルトのカップに視線を落としてお茶を注ぐ。

「姉上がその気になっていいる以上、下手に2人で反抗すれば余計に向きになる可能性が高い。」

それよりも父上に直接お話した方がいいだろう。それまで姉上には上手くいっているように見せ、この監禁状態を打破し、明日1日で私が招待状については何とか出来るようにする。」

「それで、私は何するの？」

「姉上を惹きつけておいてほしい。」

サリルトは席から立ち上がり、ふたつのカップをソーサーに乗せたまま持ち上げると斎鹿のもとへゆつくりと近付いていく。椅子に完全に身を任せて話を呑み込んでいた斎鹿のすぐ横にサリルトが着くと、サリルトは斎鹿のカップを身を屈めて渡すとそのまま窓の方

を向いた。

斎鹿はそれを両手で受け取りそつと膝の上に置く。

「・・・ありがとう。」

「明日1日は互いに協力し合おう。」

サリルトは立ったままソーサーを左手で持ち右手で取っ手を持って、鼻先に近づけるとカップを回して香りを確かめる。

「この家の事情もわかんないし、あの姉ちゃんを相手にするのは大変そうだけど・・・。」

これも向こうに帰るためだと思って頑張る。

だから、あんたも頑張つてよね！」

斎鹿は「安心して」というような穏やかな笑みをサリルトに向ける。

サリルトもわずかながらもその口角は上がっているように見えた。2人の間に穏やかな空気が流れ、そのまま笑みを浮かべあった。

サリルトは持っていたソーサーを窓の縁に置き、その上にカップを置くとそのまま斎鹿の方へと向き直り、片膝を折って斎鹿の右手を自身の右手でそつと優しく掴む。

「斎鹿、結婚しよう。」

それは、突然の求婚だった。

第十話 突然の求婚？（後書き）

ありがとうございました。

第十一話 勝負はこれから

「と、姉上に求婚の言葉が何か聞かれたら答える。」

・・・やっぱりね。

斎鹿は求婚の言葉に先程の穏やかな笑みとは違い、般若のような形相でサリルトのように窓の縁にソーサーとカップを置くと、掴まれている手を乱暴に振り払い立ち上がるとそのままベットへと足を進めた。残されたサリルトは斎鹿の振る舞いに怒ることもなくその場で立ち上るとそのまま斎鹿の後を追った。先に壁側のベット横に着いた斎鹿は履いていたスニーカーの後ろの部分を片方ずつ踏み合い、足を振って乱暴に履き捨てた。哀れな靴の1足は裏を向いて少し離れたドレッサーの前へ、もう1足はベット脇の壁に一度ぶつかり横を向いている。それを気にすることなく、そのまま斎鹿はベットに入り込む。

後を追ってきたサリルトは、斎鹿の靴をそれぞれ拾いに行くとベットの横に綺麗に揃えて置いた。

そして、中央に置かれた椅子に黒いローブとスーツのような上着をその背に掛け、扉まで戻り董色のパネルに手をかざして灯りを消すと、窓側のベット横まで行きベットの縁に腰をかける。やはり良いベットは違うのか、ギシリとも言わずにサリルトを受けとめる。そのまま靴を脱ぎ綺麗に揃えると、上から2番目までの釦を開けた白いカッターシャツと黒いスーツのズボンのような格好でサリルトもベットに入った。

「ちょっと何であんたまでベットに入ってくんのよっ！」

「この部屋にベットは1つしかない。一緒に寝るほかあるまい。」

「ここは女性にベツトを譲るところでしょうがっ!!」

斎鹿が思わず飛び起きるがサリルトはそのまま仰向けに横になったまま目を閉じている。

「嫌だ。」

斎鹿はベツトの上にサリルトに向かい直して座ると、下から持ち上げるようにサリルトを押す。

しかし、抵抗もせずに押されていたサリルトだったが、斎鹿に187?もある男を多少揺らせたとしても到底ベツトから落とすことは出来そうにない。

懸命な頑張りも疲れるだけという結果が出てしまった。

「どいてよ。」

「嫌だ。」

「どいて。」

「嫌だ。」

「……………」

「んじゃあ、私が床で寝る。」

この押し問答に終止符を打ったのは斎鹿だった。

サリルトに言っても聞かないのはここに来てからの今日1日で良く分かっていたからだ。

斎鹿がサリルトに背を向けベツトから降りようとする。

すると、突然右腕を引かれそのまま重力に従って後ろに倒れ込ん

でしまい、そのままサリルトの胸に頭から飛び込んでしまった。

そして、サリルトが斎鹿の腹に両手をまわし抱き込むと、仰向けから横向きにかえた。当然斎鹿はサリルトの胸から頭が滑り落ち、上半身と下半身が直角になってしまう。

「ちよつー！」

斎鹿は足をジタバタさせたり、腹に巻かれた手を自身の手で解こうとしたがしっかりと抱き込まれていて外せそうになかった。

「夜は冷える。

心配しなくとも手は出さん。」

目を閉じたまま斎鹿に告げるサリルトは明日まで開放する気はなさそうだ。

サリルトは言ったことに嘘はない、それも今日1日で斎鹿が知ったことだった。

斎鹿も無駄な抵抗は早々に諦め、手を伸ばして横になったままふわふわの掛け布団を取ると首元まで引っぱり上げた。

「・・・おやすみ。」

「おやすみ。」

互いに眠りの挨拶を交わし、目をつぶるが斎鹿は耳元に聞こえるサリルトの呼吸音と背中から伝わる体温でなかなか眠りにつくことが出来なかった。しばらくするとサリルトの規則正しい寝息が聞こえてきた。その様子からサリルトは斎鹿を気にせず安眠出来たらしい。

「・・・ばあか。」

そして、斎鹿もゆっくりと眠りに落ちていった。

やがて穏やかな朝の光が部屋を照らした。

「・・・むう。」

先に目を覚ましたのは斎鹿だった。

あまり眠れた気はしなかったが、それでも少し体力は回復しているようだった。

そのままぼーっと寝ころんだままいると、昨夜腹に巻きつかれていたサリルトの手が外れていた。

ゆっくりとその腕から抜け出し、サリルトに向き直る。

「おーい、朝になったぞー。」

サリルトの横腹を右手で揺り動かし起こそうとするがまったく起きる気配がない。

再び、今度は両手で思い切り揺り動かすがそれでも起きる気配がない。

ここで斎鹿の悪戯心に蠟燭1本ほどの火がついてしまった。

サリルトの顔に少し近付き耳元に口を寄せるとフーッと息を吹きかける。

すると、サリルトが身体をわずかにビクッと震わせる。

「・・・何だ。」

まだ覚醒していないサリルトは横になったまま斎鹿を見上げる。

「おはよう。」

「・・・朝か！」

突然覚醒したサリルトは、勢いよく起き上がり焦ったように裸足のまま大窓に駆け寄ると空の様子をみる。その空は明るく澄んだ青空で横に並んだ白い月が3つ浮かんでいた。

「まだ早天だな。」

サリルトは肩の力を抜き、ゆっくりと首を回した。

「まだお姉さん来てないみたいだし、朝はゆっくり出来るかもね。」

斎鹿がベットの上で「うーっ」と両手の指を互い違いに組んで前に突き出し伸びをした。

「・・・いや、勝負は朝から始まるらしい。」

外を眺めていたサリルトが遠くを凝視していた。

サリルトの言葉に嫌な予感を感じた斎鹿は急いでベットから降りサリルトの横に駆け寄る。

予想は的中した。

遠くの方から2頭の馬が馬車を引いて駆けてくるのが見えた。

「姉上だ。」

斎鹿がサリルトの言葉に頷く。

さあ、戦闘開始だ。

第十一話 勝負はこれから（後書き）

ありがとうございました。

第十二話 勝負始まり早々に危機？

悪魔は召喚も行われていないのに朝早くからやってきた。

「サリーちゃん、斎鹿ちゃん、素晴らしい夜は過ごせたかしら？」

今日の悪魔改めシ안의格好はレイヤードフリル半袖ボレロを着に、その下に肩紐と胸元にサテン生地を使われ、それが柔らかなシフォンに切り替えられた胸元から下からふらしとした程良いフレアーなスカートがシルエツトにメリハリをつけた紺のワンピース。胸元から覗く黒いレースと裾のレースが統一感を出し、胸元のサテン生地の大きなりボンがそのシアンの上品な華やかさを引き出していた。

その片手には大きめガマ口とカットガラスとパールのアクセントが光る気持の良さそうなシャンパン色のサテンが使われたクラッチバッグが持たれ、白い足にはサテン使いY字型の？はあるヒールのストラップシューズが履かれていた。両耳には小さなパールとライフのネックレスがその首元を飾っている。サリートと同じ腰まである銀色の長い巻き毛は深めに下ろした黒いスウィートバングとふんわりとしたポニーテール。

その緑色の瞳をキョロキョロと動かし部屋の中を見渡すと、そのままサリートと斎鹿の座っていた中央の椅子まで優雅に歩いてくる。サリートは、立ち上がり姉が座るであろう席の後ろに行くとその椅子を引いて姉を待つ。

「おはようございます、姉上。

とても満ち足りた夜でした。斎鹿とも深く色んな意味ですべてを知り尽くすことができました。」

「まあ！」

シアンは引かれて椅子に座りながら、嬉しそうにサリルトの言葉に笑みを浮かべる。サリルトもシアンを座らせると自分の席に戻り腰掛けた。そして、斎鹿の右手を取るとそつと両手で労わるようにシアンが握る。

「サリーちゃんにとっては十分に満ち足りたようね。
斎鹿ちゃんも素晴らしい夜だったかしら？」

「うえ！まあ、はい・・・まあ。」

「ふふ、可愛らしい。
照れているのね。」

シアンの問いに視線を彷徨わせながらしどろもどろに答える斎鹿がシアンにはサリルトとの夜の話を聞かれ照れている、と受け取られたらしく、変な誤解はされたがこの時ばかりはシアンに感謝したいぐらいだった。

どうやら斎鹿に嘘を吐く才能はないし、演技力もほとんどないらしい。

「姉上、斎鹿も私も昨日から湯にも入らず服もそのままなのですから、着替えに行ってもよろしいですか？」

サリルトは席から立ち上がると斎鹿の左手を掴み、引っ張り上げて立たせると、左手を掴んでいた手を離して斎鹿の肩を抱き寄せた。それを見たシアンは一瞬目を見張ったが、2人に向けて笑顔を見せそのまま右手を横に流すように動かす。シアンに握られていた手は

そのまま離れた。

「ありがとうございます。」

サリエルと斎鹿はそのまま扉を抜け広い廊下を歩いていく。
その様子を見ていたシアンは、1人残された部屋で大窓の外を見る。

その長く白い足を組み、左手で右の肘を支えるように持ち右手を顎に当てて悩んだように遠くを眺める。

「シアン様。」

そこに遅れてやってきたセバスチャンが昨日と変わらぬ正統派執事燕尾服で開けられたままの扉に現れた。

「ねえ、セバスチャン。」

私を騙そうなんて100年早いと思わない？」

「そうでございますね。」

窓に顔を向けているシアンの顔をセバスチャンは窺い知ることには出来ないが、きっと穏やかではなく悪魔が獲物を見つけた時のように楽しげにその口角を上げているのだらうと察していた。

「あなたはサリルトの方に行つてちょうだい？」

斎鹿ちゃんは、私がちょっとした罰を与えてくるから。」

「かしこまりました。」

シアンがサリルトを「サリーちゃん」ではなく「サリルト」と呼

ぶ時はご機嫌斜めの証拠。

アルファイオス公爵家に大型台風到来の危機。

そんなことを知らないサリルトと斎鹿はまだ長い廊下をサリルトが斎鹿の肩を抱いて歩いていた。

「姉上に手を握られただろう。
大丈夫だったのだろうな？」

サリルトの言葉に斎鹿がキョトンと見上げる。

「別にきつくは握られてないよ？」

サリルトは大きなため息を吐き、その場で立ち止まると周囲を確認し、斎鹿の肩から手を離れた。

「馬鹿か。」

「誰が馬鹿じゃない！」

「昨日のマゼンタの話を聞いていなかったのか。
姉上には人の記憶を視る力がある。」

そして、しばしの沈黙。

「・・・・・・・・あぁっ!!」

「その耳は飾りだったらしいな。」

首を左右に呆れてように振り歩きだすサリルト。

「馬鹿もほどほどにしないと呆れてものも言えなくなるな。
馬鹿だと思っていたが、これほどまで大馬鹿だとは思っていなかった。」

馬鹿は馬鹿なりに考えていると考えた私に非があるとしても、馬鹿は何も考えてもいなかったか。」

「すいませんねっ!!
馬鹿で馬鹿で大馬鹿でっ!」

追いつこうと少し先を歩くサリルトに向かい斎鹿は走りながら早口で怒声にも似た声を上げる。

そして、こけてしまえっ!、と両手を前に出しその背を思い切り押すが斎鹿の方が弾かれてしまった。

「何すんのよっ!」

「自分であたってきたんだろっ。
なぜ、私が責められなければならん。自己責任という言葉を知らないのか。」

「はーらーたーっー!!」

廊下を2人で横に並びながら口論を続けていると、それを周りの使用人達は礼も忘れ目を疑ったように見ている。唯一笑顔だったのは、その声を1階から聞いていた執事マゼンタだけだった。

どうやらサリルトと斎鹿の声は隠す気もないほど大きく響いているらしい。

そして、サリルトと斎鹿のわずか50m後ろにセバスチャンが穏やかな笑みを浮かべてついてきているのをまだ2人は恐ろしいことに知らない。

第十二話 勝負始まり早々に危機？（後書き）

ありがとうございました。

第十三話 執事は知らない

ロマンスグレーの紳士、アルファイオス家筆頭執事マゼンタ・リッジ。

彼は政務に忙しい主人に代わりアルファイオス家のすべての家政・事務を執りしきる。

そんな彼には心配事がある。

敬愛する主人、現サリルト・アルファイオス公爵の縁談についてだ。

公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の5爵の第1位であり、遅しい身体、流れる銀系のような美しい髪、唯一無二の宝石のようなライドグリーンの切れ長の瞳、男らしくも整った顔立ち、現フルーレ国王ロハス様にも覚えがめでたい。これで良家の子女が何のアプローチもしてこないはずはない。

しかし、良家の子息子女は齡16を過ぎれば結婚しているのが現状の貴族社会において、主人は齡28にもなつて噂もなく恋人もなく綺麗な女性も可愛い女性もまったく興味を示さない。

当然アプローチしてくる子女は玉碎。

それならばと何気なく身分のない平民の女性を近くに配置してみるも、外面の良い主人に女性の方は好意を抱くものの肝心の主人は興味なし。

まさか女性は好みではない？と怪訝に思いながらも今度は良家の子息を主人の側においてみる。

やはり主人は興味を示さなかったが、少年の方はすっかり主人を尊敬してそれ以来当家に居着いてしまったが、これで跡継ぎは何とかなりそうだとこれには安心した。

これまで主人の姉と共に見合いを仕組んだこと数十回、女性と同じ部屋に閉じこめたこと数回、主人は姉単独の企てだと思っているようだが、この家を知り尽くした執事もまた共犯であった。

それがここにきて主人に急接近する人物が現れた。

異世界からやってきた13、4歳であろう少女、斎鹿。

彼女は、何者かに追われアルファイオス家庭園内に突如として現れた少女で、主人と出会って1日だがどうやらこれまで主人が出会った女性の中で主人が唯一素をみせられる人物のようだ。

少女は当家に来た当初、自分に起こったことを受け入れられずに悲しんでいた様子だったが、それも主人との関わりによって早くも順応したようだ。

これならば、アルファイオス公爵夫人になったとしてもすぐにその若さと順応力で一人前の公爵夫人として当家を支えてくれるだろう。一人前になるまでは執事である自分が足りないところを補って支えていけばいい。

わずかな間で知った少女は、健康で元気、素直で言いたいことは言う。

年齢もまだ若そうだが、若いうちから教養を学べば18にもなれば立派な令嬢となるだろう。

主人の望むことを一番に考え、それを実行するのが執事の役目。

彼は少女が訪れた日のうちにお家存続のため力を奮うことを決意した。

執事は知らない。

主人は少女を妻に望んではないことを。

主人は執事にお家存続のために力を奮うよりその老いた身体を労わってほしいと思っていることを。

そして、少女が少女と呼ばれるような年齢ではなく女性として扱われる年齢だということを。

アルファイオス家筆頭執事マゼンタ・リッジはこの事実をまだ知らない。

マゼンタが2人の言い争う声を聞きながら物思いにふけつていた頃、言い争っていた斎鹿はやつと後ろを振り向くとセバスチャンがいることに気付いた。

その姿を確認した斎鹿は思わず身体がビクツと反応してしまい黙ってしまう。

「セバスチャンでございます。」

「いや、見ればわかります。」

斎鹿が答えるとセバスチャンは穏やかな笑みを浮かべ、そのまま斎鹿とサリルトに近付いてくる。

「シアン様よりサリルト様の御召し替えのお手伝いをするよう言い付かって参りました。」

「そのようなこと不要だ。」

「当家には使用人も数多くいる。」

「シアン様のご命令あればそれを叶えるのが執事でございます。」

「当家には当家の執事がいる。」

姉上であるうと当家のことは当主である私に任せて頂く。」

「シアン様のご命令あればそれを叶えるのが執事でございます。」

サリルトの冷たい視線を浴びながらも、セバスチャンは引く気もないように穏やかな笑みを変わらずに浮かべている。

恐るべき「ご命令あればそれを叶えるのが執事でございます」の力。

「羊は何がしたいのよ？」

「・・・・・・・・。」

「・・・斎鹿、羊ではなく執事だ。」

確かに『執事』と『羊』は似ている。

「だから、羊でしょ？」

「執事。」

「羊。」

「・・・・・・・・。」

セバスチャンは今まで執事として誇りを持って仕事をしてきた。

主人を敬愛し、主人の言葉には忠実に行動をしてきた。

それなのに『羊』と間違えられたとあっては、穏やかな笑みは浮かべてはいるが頭の中では『羊』の鳴き声が「めえ」と響いて言葉が失ってしまう。

「し・つ・じ。」

「ひ・つ・じ。」

斎鹿とサリルトの『執事』と『羊』の言い合いの応酬に我に返った『執事』セバスチャンはゆっくりとはつきりした声で斎鹿の目線に合わせるように背を丸める。

「斎鹿様、わたくしは『しつじ』でございます。」

サリルト様のお着替えをお手伝いするために来たのですよ。」

セバスチャンは、子どもに言うように難しい言葉を避けて説明をする。

どうやらセバスチャンも斎鹿をまだ年端もいかない少女と思っているらしい。

年端もいかない少女の無垢な間違えにむきになるような『執事』ではないのだ。

「あつそ。」

じゃあ、手伝ってもらえば？

ここにいても始まんないし、早く着替えてご飯食べたいし。」

そう言うつと斎鹿はそのまま廊下を歩き出した。

「・・・仕方がない。」

サリルトは今日ため息を吐くとその後を追う。

「ありがとうございます。」

セバスチャンも後を追ひ、目指す部屋に向けて足を進める。

執事は知らない。

年端もいかない少女が実は女性といえる年齢だということを。

無垢だと思っている少女が邪心によってわざと『羊』と呼んでいることを。

そして、その邪心によって呼ばれて『羊』が定着してしまい、これから『羊セバスチャン』と呼ばれ続けることを。

シアンの執事セバスチャンはこの事実をまだ知らない。

第十三話 執事は知らない（後書き）

ありがとうございました。

第十四話 悪魔のちよつとした罰？

その扉は東の客間から150m程歩いた突き当たりに現れた。

3m近い大きさの扉には均整の取れた5角形の桔梗を模した細工が施され、ロートアイアン調のつまみが2つ付けられている。

サリルトがつまみを回し、扉を開ける。

まず見えたのは、幅約180?の木材の天板と白大理石の床にアンバランスに三角形の形をつくりその天板を支えている黒い真鍮の脚の執務机と上品な高級そうな総革張りの椅子。

その約80畳の部屋には、朝には陽が燦燦と降りそそぐであろう天井まで届く大きな窓が西側全面におさめられ、天井には蔓と葉を模した真鍮部分と葡萄の模様が描かれた6灯シャンデリアが2つ、そのシャンデリアには電灯と電灯の隙間を縫うように幾つものクリスタルが銀の鎖で吊るされている。

部屋の北側にはクロームメッキ仕上げの脚部にクリアーガラス天板の長方形型ローテーブル、それを挟んで東と西には奥行きがあり軟らかそうなクッションの白い大型2人掛けソファがあり、テーブルの北側には同じく白いボリウムのある座面にシャープなラバーウッド脚の一人掛けソファ。

出入り口の扉の両側には真つ直ぐ壁面に沿って黒いブックシェルフが続いており、たくさんの色々な本が隙間なく詰め込まれている。

「・・・勉強部屋？」

斎鹿は部屋に入るなり腕組みをしてキョロキョロと部屋を観察し、すぐ近くにある本棚の前へ行くと青い表紙の一冊の本を取り出しパラパラとめくっている。

「執務室と言え。」

執務室の北側には隣り合うダリアを模した細工のものと笹百合を模した細工のものの2つの扉があり、サリルトは2つの扉のうち笹百合の扉の前に立ち取っ手に手を掛け、セバスチャンもサリルトの後を追いつその斜め後ろに控えている。

「私は着替えてくる。

斎鹿はそちらの部屋で着替えてくれ。」

取っ手に手を掛けていたサリルトが本をめくっている斎鹿に向き直ると、サリルトが入ろうとしている扉の南側にも扉がある。どうやらサリルトが指を指しているのはそちらのようだ。

「・・・はい？」

「そちらの部屋の机の上にはベルが用意してある。それを鳴らせば使用人が着替えを持ってくる。が・・・。」

サリルトが言い淀んだので嫌な予感ではしたが、この際戸惑っていても仕方ない、と斎鹿は扉の方へと歩き出した。すると、その扉には突貫忍冬が模された細工が施されている。

どうやらこのアルファイオス公爵家のすべての扉は花の細工が施されているようだ。

「まあ、何とかなるでしょ。

じゃあ、また後で。」

「また後で。」

何も起きませんように、と2人は内心同じことを願っていた。

「・・・・・・・・っ!!」

本当に想定出来ないような出来事が起きると人間は不思議なもので驚きの言葉さえも出ず身体が硬直して思考も止まってしまう。そして、物事に警戒していない者、警戒している者、限らず誰にでも起きうることなのだ、と気付いてしまった。

それが起こってしまったのは扉を入ってすぐ、何も起きませんように、と願ったにも関わらず扉を開けた瞬間目に映ったのは目と鼻の先に立っている悪魔シアンだった。

「遅かったわね、斎鹿ちゃん。」

「・・・・な、何でここに!？」

サリルトが言い淀んでいたのは、姉が居るかもということだったのかと斎鹿は今更ながら後悔した。

「もちろん大事な斎鹿ちゃんのお着替えをお手伝いするためよ。さあ、お着替えしましょ。」

優しい満面の笑みのシアンだが、なぜかその笑みが怖いと思える斎鹿だった。

斎鹿の入った約70畳の広い部屋はほとんど何もない部屋だった。

あるのは西側の大窓の近くにある優美な曲線と自然をモチーフにした精緻な装飾を施した白い楕円のテーブルとその周りに机と同じモチーフの椅子が4脚と机の上に銀の呼び鈴が1つと櫛と鏡、斎鹿が出てきた扉と廊下が続いているだろう東側の扉だけだった。

「着替えていつでも何もありませんけど……。」

「それは大丈夫よ。」

斎鹿ちゃん、両手を前に出して?」

斎鹿はシアンに記憶を視られると思いそれに戸惑っていたが、シアンがそれに気づき斎鹿の両手を持って胸の前あたりで掌が上を向くようにかるく重ねさせる。

「大丈夫よ、今は視ないようにしているから。」

はい、じゃあ、これ持つて?」

シアンが斎鹿の上に掌に収まるほどの白い四角くいい香りのするものを置いた。

斎鹿はそれに鼻を近づけるとクンクンと匂いを嗅ぐ。

「これって……石鹸?」

なんで石鹸?」

「着替える前に身体を綺麗にしてくないけなんでしょう?」

「いや、ここ普通の部屋だし、服脱いでないし。」

「さあ、斎鹿ちゃん。」

お姉さまにお任せよ。」

それじゃあ、行くわよ。」

「・・・お姉さん、話聞いて下さい。」

シアンがその右手に持っていた15?程の白い棒に先端に銀の星がついた杖を頭上に上げ、それを手首のスナップを使いながら2回回すと斎鹿にその銀の星を向ける。

すると、足元から目も開けられないほどの強烈な温風と温水の粒が上へと向けて勢いよく噴き出す。

「うぶっ！」

斎鹿の着ていたはずの服は下から上への強烈な強風により、スニーカーはそのままだったが服は脱げて裸にされてしまい、その間、かろうじて息は出来たが目も開けていられなかった斎鹿は自分の全身が石鹸の泡と温水の粒と強烈な温風が自身の身体を清めているのがわかった。

5分程そのまま下からの洗浄に耐えていると、石鹸の泡と温水の粒は次第に少なくなっていく、強烈な温風だけが斎鹿を包み込んでいた。

「綺麗になったわね。」

シアンは先程のように杖を頭上で回し斎鹿に向けると下からの温風も収まり、スニーカーを履いて裸のままの立ちつくしている荒い息をする斎鹿だけがその場に残された。

「どお？」

「・・・・・・・・。」

「大丈夫？」

「・・・大丈夫です。」

最早何も言うまい、と斎鹿が肩を落として下を見ると自分が裸であることを思い出し、咄嗟に手で隠すが隠れるはずもなく、何か身体を覆うものを探すが元々何も無い部屋に覆うものがあるはずもない。

「斎鹿ちゃんって身体は大人なのね。」

お胸はまだ小さいけど、サリーちゃんが何とかしてくれるから大丈夫よ。」

「お姉さん、服下さいっ！服っ！！」

じつと斎鹿の裸体を見ていたシアンに斎鹿が必死に身体を隠しながら訴える。

「はい。」

じゃあ、今度は両手を上げて？」

斎鹿が恥じらいながらも仕方ないと両手を上にあげ目をつぶると、シアンが先程のように杖を頭上で回し斎鹿に向ける。すると、今度は上から強烈な温風が数秒吹く。

斎鹿が目を開けると、灰色のパーカーに濃紺のジーンズだった斎鹿の服は、首の付け根からアームホールに向けて斜めにカットしたインナーワンピースが透けるほど薄い紺のアメリカンスリーブと露出した肩から見える紺のシヨルダーストラップ。インナーワンピースの下部分15？程は黒いサテン生地で、その首には同じサテン生

地の黒いチヨーカーがされている。

「あとは靴を換えて髪を整えたら完成よ。
靴はこの靴を履いてちょうだい。」

斎鹿のスニーカーは先程の石鹸と温水で綺麗に洗われ泥も汚れもなく温風によって乾いていたが今の服装には合っていなかった。髪も乾いてはいたが鳥の巣のようになっていた。

シアンが自身の足元に置いてあったサテン使いの銀のY字型ストラップシューズを斎鹿の前に置く。

斎鹿はスニーカーを脱ぎ、ストラップシューズに履き換えるが今までにヒールのある靴を履いたことがない斎鹿はバランスがとれずにふらついている。

「さあ、こつちに來て座つて。」

シアンが斎鹿の右手を取り部屋に置かれている白い椅子に向かい歩いていくが、まだ新しい靴に慣れていない斎鹿はふらつきながら必死についていく。

シアンは斎鹿を椅子に座らせると繋いでいた手を離し、斎鹿の後ろに回りこみその髪を机に置かれていた櫛で梳く。

「あの・・・お姉さん。」

「なあに、斎鹿ちゃん。」

優しく髪を梳き穏やかな声色のシアンに斎鹿は戸惑う。

「さっきのって何ですか？」

「あれはお風呂と一緒になんだけど、お風呂に入るのが難しい時に使うの。」

あれって荒っぱいし、やっぱりゆっくり入るお風呂が一番なもの。」

「じゃあ、私もお風呂で良かったんじゃ・・・。」

「さっきのはお仕置きも兼ねているのよ。」

お姉さまを騙した罪は重いだよ、斎鹿ちゃん。」

斎鹿がゆっくりと恐る恐る後ろを振り返ると、そこには顔は笑っているが目が鋭く光るシアンがいた。

恐るべき、お姉さま。

優しさで恐ろしさは紙一重。

第十四話 悪魔のちょっとした罰？（後書き）

ありがとうございました。

第十五話 背中引つかき傷

斎鹿は椅子から突然立ち上がるとバランスの取り難いストラップシューズで、サリルトの執務室へと続く扉に向けてヨタヨタと走る。突貫忍冬の扉を開け、執務室を抜けて、サリルトの入っていった笹百合の扉をノックもせず勢いよく開ける。

「ごめん、バレたっ！」

斎鹿が部屋に入ると、そこには上半身裸のサリルトとサリルトのシャツを持って着替えを手伝うセバスチャンが突然開いた扉を凝視していた。

「ぎゃっ!!」

サリルトが裸だということに気付いた斎鹿は奇声を上げ勢いよく扉を閉める。

「・・・やはり馬鹿だったか。」

扉が勢いよく閉まり、サリルトはセバスチャンが用意した新たなシャツに手を通しながら大きなため息を吐いた。

笹百合の扉から出てきたサリルトは、マオカラーが特徴的なシングルの5つボタン、着丈は長く裾は丸型の黒の上下揃いのマオカラ

「スーツとその上に昨日も羽織っていた黒いローブ姿で現れた。

サリルトが斎鹿へと視線を向けると、斎鹿は執務室の北側にある大型2人掛けソファに足を床につけて、上半身だけを横に倒して身体をくの字に曲げていた。近くの1人掛けのソファにはシアンがその長い脚を組み、右の肘掛けに体重を掛け身体を傾けて斎鹿に笑顔を向けながら話しかけている。

「私に嘘をつこうだなんて100年早くてよ、斎鹿ちゃん。」

「・・・すいません。」

「綿密な作戦も立てずに私に挑もうなんてさらに500年は早くてよ。」

「・・・すいません。」

サリルトは斎鹿のソファの近くまで歩いて行くとそのままシアンに頭を下げる。

「姉上。」

「サリルト、あなたにしては陳腐な作戦ね。こんな作戦、視なくとも幼児でも攻略出来てよ。それに、この作戦は元々私に作戦だということを気付かせるために仕組んだことでしょう?」

斎鹿は起き上がりサリルトの座る場所をつくるように横にずれ、そこにサリルトが腰を掛ける。

「申し訳ありません、姉上。」

おっしゃられるように、この作戦は姉上が作戦に乗って頂くため

に仕組んだものです。」

「本当の目的は何なの？」

シアンは鋭い視線をサリルトに向ける。

「姉上のことです。」

昨日、閉じ込めておいて今日何の確認もしないとは考えづらい。かといって、口頭では嘘か真は判断が付きにくい。

私が姉上なら姉上の力で記憶を視た方が確実だと考えます。けれど、弟である私にその力を使うのはリスクが高い。」

「今のところはその通りね。」

「それならば斎鹿の記憶を視た方が確実。」

案の定、姉上は斎鹿の記憶を視て嘘だということが明確なり、お気に入りには騙されお怒りにならないはずがない。そして、斎鹿を着替えと称して1人にすればそちらに必ず行くだろうと考えたのです。その間、私は姉上の監禁状態から解放され、自由に行動出来た。ということですよ。」

「セバスチャンはどうしたの？」

彼にはあなたを見張るように言っただけですよ。」

「確かに側にはいましたが、浴室にはさすがに入ってきてませんでしたよ。」

シアンは深いため息を吐くと、椅子の背もたれに深く身を預けた。

「ちょっと待って？」

それじゃあ、昨日私が聞いた作戦は嘘ってこと！？」

シアンとサリルトの話を聞いていた斎鹿はサリルトの言っていたことがまだ理解できていなかった。

確かなのは昨日サリルトが言っていた言葉が今の話によるとすべてが嘘だったということだ。

そう思うと斎鹿は心に炎が燃え上がり、サリルトを力の入った目で見詰める。

「斎鹿には嘘は言ってはいない。」

「・・・・・・・・・・は？」

「昨日何をしたらいいか問われ『姉上を惹きつけておいてほしい』と言っただろう。」

監禁状態を打破したいことも伝えた。父上に直接話すことも、明日になれば父上に話すつもりだった。」

サリルトのまったく悪怯れない様子に、ますます斎鹿の心に炎が大きくなり、右手の拳を胸元で握りしめ、感情の赴くがままサリルトの顔めがけてその拳を放つ。

「あんたって本当に腹立つっ！！」

「すぐに手が出るな。」

呆れてように斎鹿の拳をとめたサリルトがため息を吐く。

そして、斎鹿が左の拳をサリルトに向け、それをサリルトが簡単に止める。

それをみていたシアンは堪らないといったように大声で笑い出し

た。

「サリーちゃんの方が一枚上手だったようね。」

突然笑い出したシアンに斎鹿もサリルトも動きが止まる。

そこへサリルトの着替えを手伝っていたセバスチャンが笹百合の扉を開けて現れると、一礼して主人であるシアンの席の後ろに立つと屈んでその耳元にそっと耳打ちした。

最初は頬笑みながら聞いていたシアンだったが、一瞬大きく目を見開いた。

「どうかなさいましたか？」

シアンはサリルトと斎鹿の顔をまじまじと見詰め、先程とは一転天使のような笑みを浮かべている。しかし、その笑みは斎鹿にとつては天使というより玩具を見つけた悪魔のように見えた。

「サリーちゃん、背中傷はどうしたの？」

素敵な引つかき傷があるみたいね？」

シアンが何のことを言っているのか理解出来なかったサリルトだったが、昨夜のことを思い出し今度はサリルトが目を見開いた。

「斎鹿ちゃん、昨日は大変だったでしょう？」

「はあ？」

まあ、大変といえば大変でしたけど。」

「一緒のベットで寝たのよね？」

「まあ、離してくれなかったんで。」

「一晩中一緒に寝ていたのよね？」

「・・・まあ、そうですね。」

「寝たのよね？」

「・・・寝ましたね。」

だんだんと斎鹿に顔を近づけながら迫ってくるシアンに戸惑い上半身をそらしてしまう。

斎鹿の受け答えにサリルトは両手で口元を覆っている。

「セバスチャン、今のしつかり聞きました？」

「しつかりと聞かせて頂きました。」

満足そうに笑っているシアンとその隣で主人と同じように穏やかな笑みを浮かべているセバスチャンの2人は、なぜか斎鹿とサリルトに向かって拍手を始めた。

「何なんですか、お姉さんと羊？」

「恐いんですけど・・・。」

「聞かない方がいい。」

サリルトは目を閉じ口元に両手をあて顔を下に向け、なぜか打ちひしがれている。

その間も拍手は続く。

「斎鹿ちゃん、おめでとう。」

「は？」

「一夜を共にしたのね。」

「・・・はっ??」

「つまり、肉体関係があるってことね!」

「・・・はあっ??」

まだ拍手は続く。

第十五話 背中の引っかき傷（後書き）

ありがとうございました。

第十六話 弟の恋人？

拍手を止めることも出来ず、誤解されたまま斎鹿はもう自分の心の内に意識を引っ込めて、なぜ、こんなことになってしまったんだろうか、と考えていた。

（確かに、良い男には間違いないんだろうな……。思い出したくないけど、昨日、ときめいちゃったし。でも、元々こちらの世界に來たのは、この家柄、地位、財産、容姿、性格はかなり難あり、の弟と結婚するためじゃなかったっ！この性格がなあ……。かなり難ありだよ。これじゃあ、顔でモテても性格アウトでしょ？姉はどうしてもこの難あり弟と結婚させたいのかっ！？ってか、私、元々まだ結婚焦る歳じゃないし、弟好きでもないし、それに……。弟と結婚したら、もれなく迷惑な悪魔が付いてくるのが嫌だっ！いやっぱ無理っ！！！絶対無理っ！！！！！）

斎鹿が考えている間に、いつの間にか拍手は止んでいた。

黙り込んで壁の一点だけを見詰め固まってしまった斎鹿に最初に気付いたのはサリルトだった。

これまで最初の数十分以外は大きい声でひたすら怒声を上げている斎鹿をみていたサリルトは、急に黙り込んでしまった斎鹿に自分が打ちひしがれているのを忘れて慌てて声を掛けるが反応がない。

「斎鹿ちゃん？」

サリルトが声を掛けても反応しない斎鹿にシアンも不思議そうに声を掛けるが反応はなく、サリルトは斎鹿に向き合うように両肩を強引に掴み強く声を掛ける。

そんなサリルトの心配を他所に斎鹿はまだ自分の心の内でサリル

トに失礼なことを考えていた。

（つてか、やっぱ弟つて女ダメなんじゃないの？今思えば、あの「違うつ！」って必死な感じも怪しい。うわぁ、本物初めて見たっ！私、偏見とかそんなの持たないけど、相手が誰かは知りたいな。この性格難あり男の恋人がどんなのかみてみたいっ！きつと菩薩のような恋人に違いなйт！）

サリルト男が好き説、斎鹿の心の内に決定。

斎鹿は突然立ち上がると頭にゴツツという音が響いた。

不思議に思った斎鹿が頭頂部に手を当てると、下でサリルトが顎を両手で押さえていた。

「・・・何してんの？」

身体を震わせて下を向いているサリルトに恐る恐る聞いてみると、どうやら心配して顔を覗き込んだ途端に斎鹿が立ち上がり、斎鹿の頭で顎を強打したらしかった。

「何をしている？・・・よくそんなことを言えたものだっ！」

人が珍しく黙り込んだから心配してやったものを恩を仇で返すとはこのことだなっ！！」

「何怒つてんの？」

「怒っていないっ！」

「いや、明らか怒ってるでしょ？」

「怒ってないっ！！」

サリルトはその場を立ち上がるとそのまま大股で廊下へと続く扉に向かい、勢いよく扉を開けると大きな音をたててその扉を力任せに閉める。

「・・・怒ってんじゃん。」

そんな斎鹿の呟きもサリルトには届かない。

「斎鹿ちゃん、すごいわっ！」

あのサリーちゃんを本気で怒らせるなんてっ！やっぱり2人は結婚すべきなのよっ。」

「あのサリーちゃんも、このサリーちゃんも知りませんが、昨日から結構短気で怒ってますよ。」

短気は損気って言葉、知らないんじゃないですか？あと、あいつの背中への傷は腹が立ったから引っかいただけで、色気のある話はないです。結婚する気もないですから。」

シアンはその大きな瞳をパチパチと瞬きし驚いたような表情を浮かべた。

「斎鹿ちゃん、急に冷静になったわね？」

「いやあ、自問自答してたら結婚することはないだろうという結論に達しまして・・・。」

「どんな結論なの？」

シアンの問い掛けに、斎鹿は姉に弟の恋愛事情を言ってもいいの

かと思ったが、結婚話をなくすためにも弟のこれからの恋愛のためにも言つてあげた方がいい、とそつとシアンの耳元に口を寄せて小さな声で囁いた。

「・・・弟さん、男の恋人がいるんですよ。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

斎鹿が言つた言葉にシアンも聞こえていたセバスチャンも言葉を失つてしまう。

そんな2人をみて、これでよしつ、とその場を立ち上がるとサルトルの後を追うように扉に向かう。

そして、考え込んでいる2人の邪魔をしないようにゆっくりと開けると静かに閉めた。

「・・・・・・・・・・。」

斎鹿の言葉は2人に誤解を与えたまま、部屋は静まり返っていた。

1人部屋を出た斎鹿はマゼンタに何か食べるものを貰おうと1階へ向かうため階段を下りていた。

そこからマゼンタは昨日と同じように玄関の大きな扉に居るのが見えた。

空腹の斎鹿は速く行こうと焦るが、速く行こうにも靴はヒールが高く不安定で服はひらひらと動きにくい。どうしたものかと考えた

斎鹿は、自身が持っている手すりに気が付く。

「これなら速いっ！」

斎鹿は手すりを後ろ向きに跨ぎ、服で手すりの滑りをよくするよう服を両手で上から軽く押さえると、そのまま一気に下まで滑り降りる。

「よっ！」

さすが野性児。

斎鹿は下まで降りるとひょいと手すりから下り、拙い足取りでマゼンタの元へと急いだ。

「おはようございます、斎鹿様。」

マゼンタが斎鹿に気が付くと、斎鹿に向けて頭を深く下げ挨拶をする。

「おはようございます。」

何か食べ物下さい。」

「朝食は当家ではご用意しておりません。」

穏やかなマゼンタの言葉に斎鹿は目を見開いた。

「な、何で!？」

「当家ではサリルト様が朝食をお召し上がりにならないので、朝はお茶のみご用意させて頂いております。」

齋鹿の空腹を示す音が悲しげに聞こえる。

「何でもいいから下さい。」

このままでは背中とお腹がくっついて力が出ない……。」

「お客様に出せるようなものは生憎ございませんが、使用人の朝食の残りならあるかもしれません……。」

「それでいいですっ!!！」

顔の前で神に祈るように手を組んでいた齋鹿に、穏やかに告げるマゼンタの言葉はまさに天の助けのようだった。

齋鹿のあまりの必死な訴えに折れたマゼンタは、「お待ちください」と齋鹿に告げるとそのままどこかに歩いて行ってしまった。

しばらくして空腹の音の間隔短くなり悲鳴のように鳴き続ける齋鹿の元に、紙ナプキンを両手で包んだように持ってきたマゼンタが現れ、それを齋鹿に渡した。その紙ナプキンには美味しそうなジァが包まれていた。

「ありがとうっ!！」

マゼンタに満面の笑みを向ける齋鹿はジァを行儀悪く立ったまま一口食べると、とろけそうな顔をして食べ続ける。そんな齋鹿を優しく見詰めるマゼンタの目がまるで幼子を見るようだったことは気付かない齋鹿だった。

夢中で食べていた齋鹿だったが、ふと視線を上げて玄関の横の大きな窓を見ると外でサリルトが立っているのが見えた。そして、その隣にはサリルトよりも背が高くがっちりとした体形の男が居るの

が見え、斎鹿の脳内は答えをすぐに導き出す。

（密会っ！？）

第十六話 弟の恋人？（後書き）

ありがとうございました。

第十七話 間違いだらけの密会

「どうかなさいましたか？」

ジアを手に持って固まってしまった斎鹿を心配したマゼンタが声を掛けるが、サリルトの密会で頭が一杯の斎鹿はそのまま玄関から外へ飛び出して行ってしまった。突然の斎鹿の行動に焦ったマゼンタは斎鹿を引き留めようと手を伸ばすが間に合わず玄関の扉が音を立てて閉まった。

残ってしまったマゼンタは斎鹿が見ていた窓に視線を移す。そこには、2人の長身の男がいるのが見えた。1人は主人のサリルト、もう1人はサリルトの背が高くがっちりとした体形の男だ。

「あれは……。」

斎鹿はマゼンタを残した玄関から出ると留めてあったシアンの馬車の物陰に隠れ、まるで諜報員のように背を丸めて視線をサリルトと恋人に向けたまま、素早く庭園のオブジェや植木の陰に隠れながらサリルト達に近付いていく。

サリルトと恋人まであと20mというところまで来た斎鹿だったが、そこから先には隠れる場所がなく芝生が広がっていたため、それ以上は近付けなかった。

サリルト達の声は途切れ途切れにしか聞こえないが、恋人の姿ははっきりと覗き見ることが出来た。

恋人と思われる男は、額には青い布を巻いた鉢金、黒い丸襟の半

袖シャツの上に金の縁取りのされた襟の開いた尻を覆い隠す長さの青いベストを着て、さらに青い胸と肩にだけ鎧をつけている。

腰には剣が差されたベルトと下にはベージュの動きやすそうなズボンを履いて、足には脛ほどある枯茶色のブーツ。手には青い指を出した手袋に赤い裏地の青いマント。

服装は全体的に青でまとめられている。

そして、橙色の短髪に青い瞳、美形というわけではなく好青年といった普通の顔立ち。

「思ってたより地味な顔ね。」

物陰に隠れて盗み見ていた斎鹿はその場に座り込んでジアの続きを音をたてないように食べ始めた。

「・・・で・・・2人・・・逃げようと・・・。」

「ああ・・・無理・・・逃げ・・・。」

こつそりと話を聞いていた斎鹿は、「逃げる」と「無理」という2つの単語から脳内でまた勝手に答えを導き出す。

（もしやつ！まさかの逃避行計画っ！？あいつはいいとこのお坊ちゃん、恋人はどう見てもお坊ちゃんって感じじゃないし身分違いの恋なのね。）

斎鹿が勝手に2人の関係を盗み見ている間に、サリルトは男と話しながらも手で男を制してゆっくりと音を立てないように斎鹿が隠れている植え込みに歩みを進める。

斎鹿は、また、サリルトの恋人を探ることに夢中になっていた昨日言われたサリルトの特技のことを忘れていた。

「ここで何をしている。」

斎鹿は2人の関係に考えを巡らせシアを食べていると上から低い腰に響くような声が聞こえる。

ゆっくりと上を見ると、そこには眉を寄せたサリルトが斎鹿を見詰めていた。

「もう一度聞く。」

「ここで何をしている。」

「えっと、あー・・・っと、散歩かな？」

「それはそれは、座り込んでする散歩とは珍しい。」

「さ、斬新でしょ？」

しどろもどろにサリルトの問いに答える。

「まあまあ、そついじめないであげましようよ。」

サリルトが斎鹿を問い詰めていると、サリルトの後ろから明るい声が聞こえた。

「お嬢さん、お手をどうぞ？」

サリルトの後ろから歩いてきた男は、座り込んでいた斎鹿に声を掛けると手を伸ばした。

斎鹿はその手に自身の手を重ねると男が引っ張り上げる。

「申し遅れました、俺はアルファイオス家親衛隊隊長ツナギ・ジュードです。」

「何となくここに居候している斎……。」

「ここで何をしていたんだ。」

ツナギと自己紹介をしていた斎鹿はサリルトの言葉に邪魔をされ、憤慨したような顔をサリルトに向けた。

「あんたはそれしか言えんのかっ！」

窓からあんた等が話してるのが見えたから見に来たのよっ……！」

「なぜ、隠れて見る必要がある？」

「密会を邪魔しちゃ悪いでしょーがっ……！」

斎鹿の発言にサリルトは目を見開くと、斎鹿の頭にその大きな右手を乗せてぐつと下に力を込めて押す。

「痛い痛い痛いっ……！」

「誰と誰が密会だっ！」

本当に馬鹿な発言しかないな！密会の意味を知らないのではないのかっ……！？」

「まあまあ、サリルト様、女性には優しくですよ。」

サリルトがさらに頭を押すとツナギはその手を持って斎鹿の頭を開放する。

「これは、女性ではない。

チモシー以下の馬鹿だ。チモシーの方がまだ何倍も賢い。」

「失礼なやつつ!!」

「まあまあ、2人共落ち着いて下さいよ。」

サリルトと斎鹿の言い争いの間に入ったツナギは、2人を手で制して話をしようとするが、2人は睨み合って話をしようとしな

「斎鹿様？」

俺とサリルト様は、密会とやらをしていた訳ではなく、ただ報告をしていただけなんですよ。」

「報告？」

斎鹿はツナギの言葉に不思議に思う個所を見つけ首を傾けた。

「昨日落とされた剣についての報告ですよ。」

そして、しばしの沈黙。

「……………あぁっ!!」

斎鹿はポンっと手を叩いて思い出したかのように声を上げた。

「馬鹿だな。」

「誰が馬鹿よっ!」

「その馬鹿な発言、誰にも言っていないだろうな?」

「あんたの姉ちゃんには、男の恋人がいるって言っちゃった。」

サリルトの息をのむ音が聞こえた。

そして、再び斎鹿の頭に手を置くと力を込めて頭を思い切り押した。

「……っ!」

「痛い痛い痛い痛いっ!」

だって、あんた、男が好きじゃんっ!」

「馬鹿かつ!」

「えっ、違うの?」

「違うっ!」

ツナギはため息を吐くと、サリルトの手を再びどける。

「サリルト様は女性が好きですよ。」

シアン様のお連れになった女性には手を出されていないだけで、一晩の相手ならいくらでもいらっしやいますから。」

「……不潔。」

「結局どっちもだめではないかつ!!」

サリルトが叫ぶとアルファイオス家の玄関が開き、中からシアンとセバスチャンが出てくる。

シアンはセバスチャンにもたれ掛かり支えてもらっているようだ。

「姉上っ!!」

サリルトがその場で心配そうな顔を浮かべて大きな声を上げ、シアンを呼ぶ。

すると、シアンは声の主を探し立ち止まると、その視線をサリルトに向けた。

「サリーちゃんのばあかあっ!!」

そう大声で叫ぶとセバスチャンに支えられるようにして泣き崩れるながら馬車に乗ってアルファイオス家を後にした。

姉のその姿にサリルトは手を伸ばしたまま固まってしまった。

「あれは誤解してますね。」

ツナギがため息混じりに言うと、サリルトは伸ばしていた右手で目を覆った。

そんなサリルトを齋鹿は食べかけのジアを再び齧りながら見詰めた。

「あんたも大変だね。」

「誰のせいだっ！！」

第十七話 間違いだらけの密会（後書き）

ありがとうございました。

第十八話 冷静沈着な弟？

（そんなことはないと思っていたの。）

確かにサリーちゃんは、姉の私から見ても魅力的で、顔も整ってるし地位だって、お金だってたくさんもってる。それなのに、28歳になっても結婚どころかどこぞのお嬢さんとの噂も、使用人との噂も何にもないのはおかしいとは思っていたのよ。

でも、私は、大事な弟が・・・男性が好きだなんて思ってもいなかったの。

結婚しないのは、あの件でのことが原因でサリーちゃんが言うように「出来ない」のではなく「しない」んだって信じてたのよ。なのに今更女の子がダメだなんて。

知らなかったとは言え、あの子には辛い思いをさせてしまったわ。今まで偶然を装って女の子を紹介したり、同じ部屋に閉じ込めたり酷いことしてしまった。

姉としては早く結婚して甥か姪の姿を見たかったけど、サリーちゃんが幸せなら私はそれを応援しようと思うの。だって、私はあの子のたった1人の姉だもの。

今はまだ戸惑っているけれど、明日にはきっとまた笑顔で祝福してあげられると思うの。

だから、待っててね、サリーちゃん。）

アルファイオス家から走り出した2頭の馬に引かれた馬車の中、シアンは隣に座ったセバスチャンの肩にその身を預けてライトグリーンの瞳から零れた涙を右手に持った白いハンカチで拭った。

そんなシアンの左手を力強く握り、セバスチャンはいつもの穏やかな笑みを浮かべているその口元をへの字にしてシアンを心配そうに見詰めていた。

シアンは知らない。

今流している涙はまったくの無駄であることを。

シアンが涙を浮かべて懸命に考えている弟の幸せが斎鹿の勘違いによって伝えられた嘘であることを。

サリルトがシアンに隠れて実はかなりの女性と一夜だけの関係を持つていることを。

姉シアンはその事実をまだ知らない。

そして、その勘違いはアルファイオス家を出てから5時間後にサリルトからの手紙が届くまで続くのだった。

シアンが去った後の斎鹿の発言によってサリルトの機嫌は悪かった。

姉は勘違いをして涙を浮かべて去ってしまったし、その勘違いを引き起こした斎鹿はジアを頬張りながらまったく悪びれた様子もなくサリルトを憐れんだような眼差しで見詰めてくる。

サリルトにとって、感情を露わにするというのは自分の感情を制御出来ない者が短絡的に答えを導き出して起こる無益極まりないものであって、物事に対して常に冷静沈着に感情を露わにしなければ人からは『無愛想』『冷血漢』と罵られるが物事の善し悪しを有益に判断することが出来る。

だから、サリルトは決して今まで感情を必要以上に露わにしようとはしなかった。

それが今、隣でジアに齧りついている斎鹿が来てから、予想外のことばかり言い出し調子が狂わされてばかりだった。

「姉上には後で手紙を差し上げる。」

「お前も一筆書いて、姉上にお詫び申し上げます。」

「はいはい。」

「書きます書きます。」

斎鹿は食べ終わったジアを包んであった紙ナプキンを丸めながらサリルトに相づちを打つ。

その斎鹿の態度にサリルトが斎鹿の頭を軽く叩くと、斎鹿がすぐにサリルトの腹に右手の拳で一撃を入れる。

「まあまあ、2人共落ち着いて。」

今にも殴り合いを始めそうなサリルトと斎鹿にツナギは宥めるように両手を開いて制すると、サリルトの顔を見て嬉しそうに笑った。

「サリルト様がお怒りになるのを初めて見ましたよ。いつもは澄ました顔をして手であしらうのに。」

「・・・怒ってはいない。」

「いや、あんた昨日から結構短気に怒りっぱなしじゃんっ!」

「そうなんですか?」

「そうそう。」

「腹立つことばっか言ってくるしっ!」

サリルトは斎鹿の頭を掴むとその頭を握り潰しそんな勢いで力を

込める。

斎鹿は痛みに涙目になって自身の手でその手を退けようとするが、サリルトはまったく気にする様子もなく力を込め続ける。

「痛い痛い痛いっ！」

暴力反対っ！！」

「馬鹿のために頭に力を送ってやっているんだ。

その軽い頭を活性化してもっとと有益に使えっ！」

斎鹿の頭を放るように放すとそのまま青の苑の方がある方へと歩いていく。

斎鹿はその後を追って行くとサリルトのすぐ後ろに立つとタイミングを合わせてそのまま自身の膝を曲げた。すると、サリルトも斎鹿と同じように勝手に膝が曲がってしまいバランスを崩してその場に膝をついてしまう。

「ばーか。

こんな古典的なやつに引っ掛かってやんの。」

「馬鹿娘っ！！」

膝をついたサリルトの前に回り込んだ斎鹿は、右手の人差指でサリルトを指し左手を口にあてて馬鹿にしたように笑っている。

サリルトは立ち上がると斎鹿の右手を掴もうとするが、斎鹿は笑ったままその手を後ろに引いて逃げる。そして、そのままサリルトを馬鹿にしたように笑うと背を向けて走り出した。

その後を怒り心頭に発するサリルトが走って追うが、山で鍛えた斎鹿も負けじと逃げる。

「これは・・・すごい。」

あのサリルト様を本気で怒らせるなんて。」

呆氣にとられた様子で2人を見ていたツナギは遠ざかっていくサリルトと斎鹿を追う。

普段から鍛えているツナギが必死で追うが2人はそんなツナギを他所に言い争いをしながらスピードを上げてその先を走っていく。それを見たツナギは内心、鍛え直さないと、と焦ったことはこの際黙っておく。

サリルトが斎鹿の右手首を捕まえると、そこはもう森の入口だった。

そこからは城が全体的に見渡せ、森の入口から城まではそれなりに距離があることがわかった。

森の入口には白いレンガのアーチがあり、それを潜ると土の道が木漏れ日に照らされ、木々は青々とした葉をつけて風に揺らしている。

「ごめんって。」

「本当に反省しているのか怪しいところだな。」

「反省してますって。」

怪訝そうな瞳で斎鹿を見詰めていたサリルトがふと視線を自身の真上にあつた太い木の枝に移した。

それを追うように斎鹿もそこに視線を向ける。

するとそこには、体長50?程の艶のある黒い毛を生やしつづら

な黒い眼を斎鹿達に向け座っている動物の姿があった。

「あれ何??」

「チモシーだ。」

「……………えっ。」

謎のチモシー、ついに登場。

第十八話 冷静沈着な弟？（後書き）

ありがとうございました。

第十九話 家族になったチモシー

チモシーは、胴、手足、尾、肩、目の周りの部分は艶のある黒い毛が生えており、身体の割には小さな顔でしつかりとした長い身体に短い足。顔は目の周り以外は白く頭の天辺は茶色い。

鼻の近くには何本も黒いひげがあり、少し尖った鼻はピンクでひくひくと動いている。耳は丸い三角形の形をして身体の割には大きい。手足の爪は鋭く、欠伸をしたチモシーの口にはたくさん歯と他の歯よりも長い2本の鋭い犬歯が見えた。尾は長く体長50?程なのにもかかわらず30?は柔らかい毛に覆われた尾だった。つぶらな楕円形の黒い瞳が興味津々といった様子で斎鹿達を見詰めている。

「チモシーは家族で生活するのだが珍しいな。」

「チモシーってこれ？」

全然似てないんだけど・・・。」

「似ているだろう。」

目も身体も黒く、胴が長く足が短い。」

「似てないっ！」

「自分では気が付かないだけだ。」

斎鹿は右手の拳を胸元で握りしめ、サリルトの一瞬の間について鳩尾めがけてその拳を放つ。

「すぐに噛み付いてきたな。」

難なくその拳を受け止めたサリルトは嫌みのように斎鹿を見下ろした。

斎鹿は右足で素早くサリルトの左足を蹴るが、右手が掴まれて思うように蹴れず、サリルトの体勢も崩れることはなかった。

受け止められたことによつてサリルトに当たつてはいたが、右足が宙に浮いたままになってしまいバランスを崩し、斎鹿は左足だけで身体を支えきれず身体が後ろに傾いていく。

その様子を見ていたサリルトは、ため息を吐き掴んでいた右手を引いて自分の方へ斎鹿を引き寄せる。後ろに傾いていた斎鹿は今度は前に倒れ込み、サリルトの胸に勢いよく鼻をぶつけてしまった。

「な、何！？」

突然、斎鹿の頭の上に柔らかくあたたかいものが降ってきた。

その物体は多少体重があつて何の準備もしていなかった斎鹿はさらにサリルトの胸にその顔を押しつけてしまう。

斎鹿が両手を頭の上にあてると、温もりと柔らかい毛の感触がし、右手で物体を押さえようとすると右手中指に痛みが走る。

「いったーっ！」

斎鹿は痛みの走つた右手を勢いよく引つ張り、左手でその物体をぐつと掴むと頭から引きずり下ろす。その物体は下ろされたことに驚いたのか斎鹿の手の中で暴れている。

「こいつ、噛んだっ！」

サリルトの胸から急いで顔を上げ、物体を見るとそれは先程枝の上 にいたチモシーだった。

チモシーは前足の下を齋鹿の左手で持たれ、後足とぶら下がった長い胴を動かし逃げようと足掻いていた。齋鹿は暴れているチモシーを逃がさないように掴み、噛まれた右手中指を顔に近付けて見ると、第1関節と第2関節の間に2本の犬歯の後がありわずかに血が滲んでいた。

「痛い……。」

改めて傷を見るとますます痛くなってきた。

齋鹿が右手を縦や横に振って痛みを何とか和らげようとしていると、サリルトが齋鹿の右手首を掴んで振るのを無理矢理止める。

「振るな。」

血が飛ぶ。」

「だって、痛いんだもん！」

サリルトは掴んでいた齋鹿の手首をそのまま自分の顔に近付け、傷付いた右手中指を口の中に入れ傷口から菌を吸い出す。齋鹿はその温かく滑る口内に視線を唇に映すと、背中に鳥肌が立ったように震える。

そして、サリルトが右手中指を口内から解放し、吸い出したものを吐き捨てた。

サリルトは硬直してしまった齋鹿を見詰め、齋鹿も唇からサリルトの瞳へと視線を移す。

見詰め合う、2人。

「やっぱり変態かつ!？」

「違うっ！」

昨日と同じことを言いおって学習能力はないのか！」

「失礼なっ！」

「野性動物の口内にはたくさんの菌がいる。

そのままにしておいては感染症にかかるぞ。」

斎鹿はサリルトに掴まれていた手を振り解くと、外方を向いて暴れているチモシーを持ち直し、そのまま視線を地面へと落とした。髪からわずかに覗く、その耳はまるで朝の光を浴びているにもかかわらず夕陽のようだった。

「……………あ、ありがとう。」

「いや…………。」

サリルトは、そんな斎鹿の様子を驚いたように見詰めると、何故か自分も見詰めてはいけけない気分になり視線を横へと移した。

「そ、それにしてチモシーが1匹でいるとは珍しい。」

サリルトは気まずい沈黙を破るように斎鹿が捕まえているチモシーの頭を後ろから撫でた。

チモシーは相変わらず暴れていたが、サリルトが頭を撫でるとそのにおいを嗅ぐと鼻を上に向けると、身体を反らすように上を向いたのでそれまで隠れていた首も露わになった。

その首は白く、サリルトが露わになった首を撫でると気持ちよさそうに目を細める。

「あんたには噛まないのね。」

「おまえはいきなり正面から手を出したから、チモシーが驚いたのだ。」

チモシーは温厚で愛嬌もあり好奇心旺盛で人に寄っては来る。

だが、驚いたり恐がるとどんな動物でも身を守るために噛むぞ。それにしても・・・おまえは動物を恐がらないな。

掴もうとせずにそのままそれを落としてしまえばよかっただろう？」

斎鹿はチモシーを胸の下で、両手で落ちないように抱きかかえると、悲しいような懐かしむような視線をチモシーに向ける。チモシーも不安定な持ち方から、安定したあたたかな腕に変わったことでその身を預けている。

「こつちに来る前から同い年の子って村にはいなくて、山で毎日遊んでたんだ。」

動物は人間を見つけると警戒して攻撃してきたり逃げたりするけど、それはこつちも動物を警戒してるからそれが動物に伝わるからなんだって。こつちが何も考えずにいて、動物の方が慣れるまで手出ししなければ大丈夫ってわかってるし、そうやって動物と仲良くしてきたもん。

触った時に柔らかくてあったかかったし、重さからも小さいだろうなって思ったから落としたら怪我しちゃうでしょ？」

斎鹿がサリルトに向き直ると、サリルトはその瞳を見開いて斎鹿を見詰めていた。

思いもよらずサリルトと目が合ってしまった斎鹿は、そのままサリルトに向けて微笑む。

「そうだな。」

サリルトは一言そう言うと、その整った顔に穏やかな笑みを浮かべた。

それは、斎鹿が初めて見るサリルトの本当の笑顔だった。

一瞬、斎鹿は不覚にも口をぽかんと開けて、その笑顔に見惚れてしまい、慌てて視線を再びチモシーに移した。

「か、家族でチモシーって生活してるんでしょう？
なんで1匹であんな枝にいたんだろ？」

「その大きさから見て、それはまだ子どもだ。
親からはぐれて迷っていたのか、家族から追い出されたのかはわからないがな。」

「はぐれたならわかるけど、子どもなのに家族から追い出された？」

サリルトは斎鹿の抱えているチモシーの首筋の皮膚を右手でたっぷりと掴むと、そのまま上へと持ち上げた。チモシーは暴れることもなく手足とその長い胴が垂れ下げ、目を細め口を大きく開けている。

「母親である雌がこのチモシーの父親以外の別の雄と子どもをつくと、雄は自分の子どもとは違う雄の子どもを見分けて、自分の子

どもではない子どもを母親がいない間に巣から遠くに置いてくる。
母親の背に乗って移動する子どものチモシーは母親から離れてしまえば生きていけないからな。」

「この子どもの父親はっ！
自分の子どもを守ってあげないの！？」

「母親の雌が違う雄と子どもをつくっている時点でこのチモシーの父親はもういないのだろう。」

サリルトは掴んでいたチモシーをゆっくりと地面に下ろす。
チモシーは地面に降りるとその場で長い胴と頭をぺたっと地面につけて動かさずじまい。

「・・・どうするの？」

「このチモシーはもうどうすることも出来ない。
人間が手を出してしまえば野性には戻れない。
残酷なようだが自然の摂理に基づきこのまま置いていく。」

サリルトは一時チモシーに憐れんだ視線を向けると、チモシーを残しそのまま森の奥に進もうと歩み始めた。齋鹿はその場にただ立ちすくみ、地面に伏せているチモシーを見詰めていた。
すると、チモシーが弱弱しく口を開けた。母親を求めて鳴き声を出そうとしているのか、空腹で口を開けていたのか、齋鹿にはわからなかったがそれを見てしまうと、なんだか心がギュッと締め付けられたようだった。

「私が育てるっ！」

気付いた時には斎鹿は前を歩いていたサリルトに大きな声で叫んでいた。

それに気付いたサリルトは眉間に皺を寄せ振りかえると口を開ける。

「お世話になつて言うのもなんだけど、このまま身捨てたらきつと絶対後悔すると思うのっ！」

世話だつて私がするし、絶対迷惑かけないからっ！」

サリルトが何かを言おうとする前に斎鹿がそれを阻むように早口で捲し立てる。

サリルトは開いていた口をそのままに斎鹿の言葉を聞いていたが、開いていた口を閉じるとため息を吐き、鋭い視線で斎鹿を射抜くように見詰めた。

「追い出されたチモシーはそれ1匹だけではない。

そのチモシー以外の他の動物にも群から追い出されているものはたくさんいる。

そのチモシー1匹を育てたところで、他のものが救われる訳でもない。

1匹を救ってひとつの命を守った気になっているのなら、それはただのおまへの自己満足だ。」

サリルトの言っていることは正しい。

そのことに斎鹿は気付いていたが、どうしてもここで引きたくはなかった。

「・・・これはただの自己満足だよ。」

「だつたら、」

「でもっ！ここで置いて行ったら１人になっちゃうんだよ。」

誰にも心配されず、誰にも気付かれず、誰にも相手にされずに静かにいなくなっちゃうのは間違ってると思うっ！もし、育てるのがダメだったら私この子とここにいるっ！

最後まで見取ってやってお墓も作ってやるっ！

そしたら・・・そしたら、最後は１人じゃない・・・。」

斎鹿の目には涙が今にも溢れ出さんばかりに溜まっていた。

「たった１人だって誰かが自分を見てくれてるって思っていればそれは良い最後になると思う・・・。」

自分勝手な自己満足だけど・・・。」

サリルトはゆっくりと来た道を戻っていくと斎鹿の目元に右手を伸ばし、その目に溜まっている涙を指で拭った。斎鹿は、意固地になつて口を尖らせサリルトの手から逃げるように顔を背けた。

「馬鹿か。」

「馬鹿でいいもんっ！！」

斎鹿が思い切り睨みつけようと視線をサリルトに向けると、サリルトは目を細め穏やかな顔をしていた。呆氣にとられたように斎鹿は目を見開いた。言ってやりたいことはたくさんあるのにそれが言葉にならず、ただ口をぽかんと開けていることしか出来なかった。

「勝手にしろ。」

「・・・えっ？」

「ただし、育てるのならば責任を持って寿命を迎えるまで面倒みる
こと。」

「はいはいはいっ！
きちんと面倒見て責任持って育てますっ！」

斎鹿はサリルトの言葉に一瞬固まって理解できなかったが、すぐに地面に伏せていたチモシーを右手で脇の下を持って左手で尻を支えるように抱きかかえると満面の笑顔をサリルトに向ける。

サリルトも斎鹿に穏やかな笑みを向けると、そのまま2人は見詰め合う。

「それと、はい、は1回だ。」

「はいっ！！」

サリルトはしみじみと斎鹿を見詰める。

「それしにても・・・」

「何よ。」

「これは、類は友を呼ぶのだろうな。」

「・・・っ！！」

せつつかく感謝して涙まで見せたのに最後はやっぱりチモシーが
っ！！」

斎鹿は右足でサリルトの弁慶の泣き所を力強く蹴った。

今回は止められずに上手く決まったらしく、サリルトの呻き声が聞こえた。

こうしてチモシーは斎鹿の家族になった。

第十九話 家族になったチモシー（後書き）

ありがとうございました。

第二十話 親衛隊隊長の誤解？

「名前何がいいと思う？」

斎鹿はまるで子どもが産まれ母親のように嬉しそうにサリルトに尋ねた。

「勝手につける。」

サリルトはため息を吐くと、青の苑に向かいその目でしっかりと前を見据えていた。

斎鹿はチモシーを胸に抱きながらその顔を見詰め、サリルトの横を「ご機嫌で歩いていた。」

「じゃあ、チモ男とか？」

「チモ才？」

「チモシーのチモに、男の子だから男。」

「・・・馬鹿の上にセンスもないのか。」

サリルトは立ち止まると斎鹿に憐れみの視線を向け、大きくため息を吐いた。

「なんでよっ！

チモ男、可愛いじゃないっ。」

斎鹿はサリルトの前に躍り出ると、抱えていたチモシーの脇を両

手で持つてサリルトの顔の前に差し出す。サリルトとチモシーの距離はあと15?というところで止まり、チモシーは下半身を揺らしながら顔を傾けている。

確かにチモシーはサリルトの目から見ても可愛かったが、名前が『チモオ』ではその巷で評判の可愛さ地に落ちるというものだ。

「とにかくチモオはやめろ。」

「じゃあ、あんたなら何て名前にするのよっ!」

サリルトは目の前にあるチモシーの顔をじっと見詰めると、左手で右肘を持ち支えられた右手で顎を持つと黙り込んだ。どうやらふさわしい名前を考えているようだ。

「ローエングリンはどうだ。

意味は『白鳥の騎士』。」

「何それ?

そんな名前呼びにくいじゃん。」

サリルトは斎鹿の頭を右手でグツと掴むとそのまま力を込めて下に押す。

「痛い痛い!

何で押すのよっ!」

「おまえの『チモオ』よりはよっぽど良い名前であるっつ!」

「何でよっ!

ロー……もう覚えてないわっ!」

「馬鹿がつ！」

前はツナギが止めに入ってくれたが、今回はまだツナギが斎鹿達に追い付いていないので斎鹿はサリルトに押され続けた。斎鹿は両手をチモシーで塞がれて拳を放つことが出来ず歯痒い思いをしていたが、咄嗟にチモシーを背伸びをしてグツと上へと突き出す。

「っ！？」

斎鹿の思った通りにサリルトの顔にチモシーの腹が当たったらしく少し呻いたのが聞こえた。

それと共に頭を押さえつけていた力が緩まり、斎鹿は膝を曲げて身体をサリルトの手から逃れるように避けた。

「ばーかつ！」

私以下のチモシーにやられてやんのっ！」

斎鹿は鼻で笑うとチモシーをサリルトの顔から放した。

「このっ、馬鹿娘がつー！」

サリルトは素早く背後へ移動し、背後から斎鹿の脇の下に通した両手を、首の後ろで組み合わせて動けないようにする。

「ぐえっ。」

「馬鹿には力技しか通じんようだなっ！」

しばらくサリルトが締め続けていると、後ろからツナギが何か大

声を出しながら走ってくるのがわかった。

「サリルト様、無体はいけません！」

ツナギは斎鹿達に追い付くと、サリルトの手を斎鹿から引き離し斎鹿を自分の後ろに隠す。

サリルトが斎鹿に無体を働こうとしたと誤解をしているようだ。

「誰がそんな馬鹿に無体を働くか！

私にも選ぶ権利があるっ！」

「あ、そうなんですか？

後ろから見たら、サリルト様が斎鹿様を襲ってるのかと思いましたよ。」

ツナギは首を傾け気まずそうに怒っているサリルトから視線を逸らした。

斎鹿はツナギの後ろからサリルトに向かって舌を出して馬鹿にしている。

それに気付いたサリルトは、隠れている斎鹿を引っ張り出そうと手を伸ばすが斎鹿は身体を引いて逃げるようにツナギの横へと移動した。

「まあまあ、落ち着いて下さいよ。

なんであんなことになってたんです？」

まだ状況が掴めていないツナギは、まだ争っている2人に問いかける。

「この子の名前を考えてただけど、あいつってば変な名前つけよ

うとするんだもん。」

「それはこちらの言葉だ。」

おまえの方が変な名前だろう。」

「何でよっ！」

「私の方がまともな名前だ。」

ツナギは2人の話を聞いていると笑いが込み上げてきて、斎鹿の両手に抱かれているチモシーに視線を向けた。チモシーは上で言い争っている2人を首を傾けながら、斎鹿の腕を登ろうと上半身を伸ばしている。

「初めて産まれた子どもの名前を付ける新婚夫婦みたいですね。」

ツナギは2人に向けて悪気のない笑顔で言い放った。

その言葉を聞いた斎鹿とサリルトは言い争いをやめ、硬直した身体をゆっくりと首だけツナギに向ける。

「絶対嫌だっ！」

こんな性格最悪男と結婚なんてっ！」

「冗談でもやめろっ！」

これが女主人ならアルファイオス家は没落だぞっ！」

ツナギは、サリルトは領民からも騎士たちからも尊敬されていたが、感情を表に出さない無愛想な主人でこんなに激しく叫んでいるのは見たことがなかったし、斎鹿はマゼンタに聞いた話によると大人しく愛らしい少女ということだというので、すっかり打ち解けて

仲が良くなったと思っているようだ。

「わかってますから、大丈夫ですよ。」

「わかってないからっ！」

全然わかってないからっ！！」

何かを察したように含み笑いをして2人を交互に見たツナギに齋鹿は誤解されてなるものと必死に喰い付くが、その必死さがツナギには照れているようにしか見えていなかった。

「ツナギ、違う。」

「サリルト様、わかってますから。」

「……………」

サリルトにはわかっていた。

ツナギと長い付き合いをする中で一度自分が決めてしまったことを覆すことをツナギは絶対にしないということが。

「だから、違っつてっ！！」

「わかってますから、ふふふ。」

「わかってないからーっ！！」

ツナギは誤解をしていた。

そして、チモシーの名前はまだない。

第二十話 親衛隊隊長の誤解？（後書き）

ありがとうございました。

第二十一話 面倒くさい男達

（珍しいこともあるものだと思った。）

サリルト様は警戒心が強く簡単には他者を受け入れない。

なのに、何故あの少女は受け入れたんだろ。そうか・・・きっと、サリルト様は恋をしたんだ。

まだ幼いあどけない少女と女性を愛したことがないサリルト様、まだ始まったばかりの恋を2人で一生懸命育んでいるんだろ。

それならば、深くは聞かない。聞かぬも紳士の嗜み。それが、騎士の忠義だ。

斎鹿様の拾ったチモシーに名前を2人で仲良く考えている姿は、まさに子どもに名前を付ける夫婦のごとく仲睦まじかった。

もう少し斎鹿様が大人になれば、この静かな城に赤子の泣く声が響くだろう。

俺はその日を待ちわびて、これからの剣の鍛錬に一層力を入れよう。（）

ツナギは青の苑へと向かう道程で前を歩くサリルトと斎鹿の背中にそつと笑顔を向けると心の内に決意を固めた。斎鹿とサリルトは相も変わらずチモシーの名前をどうするか決めている最中のように、時折斎鹿がサリルトに殴りかかっている。当然、斎鹿の拳はサリルトに当たる前に止められるているが。

ツナギは2人の背に向け満面の笑みを向けた。

「何か笑ってんだけど・・・。」

「気にするな。」

さらなる誤解を生むぞ。」

「それは、よくわかってます・・・。」

サリルトと斎鹿は顔を寄せ合って首だけを動かし振り返ると、そこには満面の笑みのツナギが何故か頷いている。

「こわっ！」

「ツナギは優秀なんだが思い込みが激しいのだ。」

「激しいどころじゃ・・・すっごーい！」

視線を前に戻した斎鹿は、目の前に広がる湖に思わず走り出した。その湖は楕円型で対岸が見えることからそれほど大きくはなく、その中心が青く濃くなっていることから水深が深いことがわかった。透き通った水はきらきらと太陽の光を浴び輝いている。

周囲には青い苑に相応しく、外側に開いた水色のくっきりした5弁花は楕円型の葉を横へとたくさん伸ばし、内側に向けて咲いている青い6弁花は大きなハート型の葉を広げている。その他にも様々な種類の花が咲き乱れ、色は青い花が多いようだったが所々白い花も咲いていた。

地面を這うように長くのびた茎と三小葉の葉を持ったクローバーのような植物が青の苑一面に茂っている。

青の苑は湖を囲うように湖の周り10m程に形成し、その外側には高木の森が広がっている。

「何を言っている。」

昨日はここから城まで歩いて移動しただろう。」

「あん時は周りを見てる余裕はなかったのよ。」

斎鹿は青の苑に座り込むと手に抱えていたチモシーを地面に下ろした。

チモシーは周囲を窺うと一番近くにあった青い花に鼻を近付け香りを嗅いでいる。

「チモ男、良い匂いでしょ？」

「チモ才はやめろ。」

呼ぶと覚えてしまうだろう。

ローエングリン、こちらに來い。」

サリルトは、斎鹿とチモシーのすぐ側に腰を落とすとチモシーに向けて右手を差し伸べる。

斎鹿はサリルトの手を右手で思い切り叩く。すると、パチンと良い音が森に響いた。

「変な名前で呼ぶのやめてよ。」

ローなんちゃらは嫌だよねえ、チモ男。」

「馬鹿でセンスのない名前では可哀想だろう。」

拾う人間も選べればよかったな、ローエングリン。」

チモシーを真ん中に挟んで言い合う斎鹿とサリルトをまだ名前のないチモシーは上を見上げて2人の顔を交互に見ている。

ツナギは屈託ない笑顔を浮かべたまま2人の間に両手を入れチモシーの首と尻を持って抱き上げた。

「パパちゃんとママさんは仲良ちでちゅねえ。」

早く名前が欲ちいでちゅよねえ。」

「!!!!」

「・・・わお、まさかの赤ちゃん言葉。」

ツナギの赤ちゃん言葉に斎鹿は両手を開いて顔のあたりまで上げお手上げポーズ、サリルトはあまりの衝撃に石になったかのように動かない。

「何なの？」

「何がですか？」

「今の赤ちゃん言葉何な訳？
好青年の顔で赤ちゃんプレイ好きですか。」

「ははは、斎鹿様は面白いですね。
俺はそんな趣味無いですよ。」

「だったら何だっ！」

固まっていたサリルトは突然立ち上がり怒声にも似た声を上げた。
かなり興奮しているようだ。

あまりの剣幕にツナギは後ろに右足を1歩下げ目を見開き、斎鹿は立ち上がりサリルトを宥めるように背を軽く2回叩いた。

「まあまあ、落ち着いてよ。」

衝撃的だったけど、偉い立場の人ほど変な趣味があるもんでしょ。

「

斎鹿はサリルトを凝視しながら柔らかく言うが、サリルトは鋭い

目つきで斎鹿を睨む。

「なぜ私を見る！」

私は変な趣味はないっ！あるのはツナギだっ！」

「俺もないですよ。」

「だったらあのこ、言葉はなんだっ！」

「落ち着きなさいって。」

人には誰にも触れられない趣味の1つや2つあるもんなんだから。」

「私はないっ！」

「俺もないですよ。」

ねえ、何もなくてちゅよねえ、チモシーたん。」

「大ありだっ！！！」

ツナギは腕の中のチモシーを見詰め蕩けるような笑みを浮かべ再び赤ちゃん言葉を使う。

サリルトは右手の拳を握りしめ今にも解き放ちそうだ。

「あんた、兄弟多いの？」

「あ、ええ。」

俺が長男で下に弟が3人と妹が2人です。
俺は、平民出身なんで兄弟は多いですね。」

斎鹿の突然の問いにツナギはチモシーから顔を上げて考えるように視線を彷徨わせると答えた。

斎鹿は、サリルトに向き直り今にも解き放ちそうな右手に自身の右手を置くとグリーンの瞳をじっと力を込めて見詰める。

「あんたは知らないだろうけど、平民の一般家庭では兄弟が多くて1番上の長男が長女が面倒みるの。貴族様とは違って乳母とかいないから、普通の言葉を使わずに赤ちゃん言葉で優しく面倒見るものなのよ。だから、平民の赤ちゃん言葉は変じゃないのよ！文化なのよっ！貴族様は知らないと思うけど。」

（このままじゃずっと赤ちゃん言葉論争だわ。私に関係ないし、面倒くさいし、適当なことと言って流しちゃお。）

「そうなのか？」

「そうそう。（兄弟多くても友達にそんなやついなかったけどね。）

「？それで・・・っ！！」

斎鹿が平気で嘘を笑顔でつきサリルトがそれを信じようとした時、それに反論するように怪訝な顔をして口を開いたツナギの弁慶の泣き所を思いっきり斎鹿が蹴る。

ブーツ越しでもある程度効果はあったようでチモシーを落とさないようにしながらも蹴られた足を上げて片足で立っている。

「何か？」

笑顔でツナギの顔を見る斎鹿だったが、足元を見るとすでに右足はすでに上げられ蹴る準備をしている。ツナギは項垂れた。

「・・・斎鹿様の言う通りです。」

「そうなのか？」

兄弟の多い領民が皆そうならばおまえだけを責める訳にいかんな。

「

「そうそう。」

ところで、何しに來たのここに？」

「それは・・・。」

ツナギは斎鹿が何事もなかったかのように右足を地に下ろし話題を変えた姿に目を見張り、まだ幼いあどけない少女という言葉はすでに当てはまらないことに今更ながら気付いた。

しかし、自分の主人と仲が良いことに変わりはないようだ。

少女の印象はかなり変わったが2人のために力を奮おうという決意だけはかわらない。

（あれくらいの方がサリルト様には合ってるのかもな。）

ツナギは話し始めた少女と主人に笑顔を向けた。

斎鹿は1番面倒な勘違いがまだ解けていないことに気付いていない。
い。

第二十一話 面倒くさい男達（後書き）

ありがとうございました。

第二十二話 不思議な少女？

斎鹿は花が咲いていないところ捜し後ろを確認するとゆっくりとその場に胡坐をかいた。

斎鹿の服装は膝上のワンピースだったので胡坐をかけば自ずとワンピースは捲り上がり、その太腿まで露わになっているが斎鹿は気にする様子はない。

サリルトは斎鹿の座るまでの様子を見逃さないように見詰めていたが、露わになった太腿を見て斎鹿の後ろへと回り込むとその頭を右手で掴み思い切り押した。

「痛い痛い痛い！」

「何すんのよっ！」

「恥じらいという言葉はおまえの頭にないのか。」

サリルトは頭を掴んでいた手を離したため息を吐いた。

斎鹿は自身の脚が露出していることに気付いたが、サリルトへ首だけ振りかえり鼻で笑う。

「ごめんなさいねえ、坊ちゃんには刺激が強かったですわねえ。」

サリルトは馬鹿にしたような斎鹿の態度に軽く頭を叩いた。

「痛いっ。」

脳細胞が死滅したらどうすんのよ!？」

「元々死滅しているではないか。」

「なあんですつてえっ！」

ツナギは手に抱えていたチモシーを地に下ろすと、サリルトと齋鹿の間の両手を入れて2人を止める。

「まあまあ、話を本題に戻しますよ。」

ツナギは齋鹿の右側に移動し丁度湖が正面にくるように座り、サリルトは湖に背を向けるように齋鹿の左側に座る。2人共齋鹿とは違い正座だ。

チモシーは下ろされた場所から長い胴を引きずるように前足で齋鹿の近くまで行くと、においを嗅ぎ安心したのか丸くなって眠ってしまった。

「チモシーたん、かわいいでちゅねえ。

食べちゃいたいでちゅよお。」

サリルトはツナギの赤ちゃん言葉を聞いても齋鹿の説得がきいていいのか、なんとか我慢をしているようで眉間に皺を寄せている。齋鹿は胡坐をかいた脚の間にチモシーを抱き上げて置くと、撫でようと手を伸ばしたツナギの手を素早く叩く。

「本題に戻すんじゃないかったの？」

「そうでした……。」

ツナギは叩かれた手を引いて手を膝の上に重ねて置く。

「昨日、サリルト様よりご命令を受けてからすぐに青の苑に向かい確認にいきました。」

剣はすぐに見つかりましたが確保するにはいたりませんでした。」

「なんで？」

「持てなかったそうだ。」

「・・・は？」

斎鹿はぼかんと口を開けサリルトの顔を凝視する。

「重くて持てなかったんですよ。」

「何、あんた、もやしっ子？」

「違いますよ。」

俺と部下の2人がかりで持てなかったんですよ、普通じゃありません。

それに、あの剣、突然襲いかかってきて仕方なく逃げるしかなくつたんですよ。」

「それで、ツナギはそのことを昨夜伝えられず今朝報告したのだ。おまえが勘違いした言葉はこれだろう。」

斎鹿が先程庭園で聞いた「逃げる」「無理」という言葉は間違いなく愛の逃避行計画ではなく斎鹿の刀のことだったらしい。今の今まで疑っていた斎鹿もさすがに自分の刀を必死で捜してくれたツナギに失礼なことは言えずツナギに気まずそうな顔をしながら頭を下げた。

「あ、ありがとうね。」

で、今はどこにあんのよ？」

「リリアンに預かってもらってます。」

屈託のない穏やかな笑顔で目を細めたツナギは遠くを見詰めた。

齋鹿は首を傾け、サリルトのローブを引っ張るとサリルトが首だけを動かし齋鹿に注目した。

「リリアンって誰？」

「ツナギ。」

ツナギはサリルトの言葉に頷くとその場から立ち上がり湖の近くまで歩いて行くと、両手を横に広げてゆっくりと呼吸を整える。次に両手を真上に移動させ掌と掌を合わせるとそのまま胸の前まで下ろした。ツナギの瞳は閉じられると、水面に波紋が浮かび上がる。

すると、突然湖から天空へと伸びた螺旋形に巡る激しい水の流れは7色に輝いた。

水の流れの中に1等光る球体があつたが、激しい水の流れと輝きによってはつきりとした形は見えない。やがて激しい水の流れは湖へと徐々に下がり、空中に浮かぶ光る球体だけがその場に残された。光る球体は突如激しい光りと水を辺りに散らばらせる。

そのあまりの眩しさに齋鹿は顔を横に逸らしたが、湖に向かって立っているツナギは目を閉じ胸の前で掌を合わせたまま微動だにしない。

恐る恐る齋鹿が目を開け身体を傾けながらサリルトの前を見るとそこには頬笑みをツナギに向ける美しい少女の姿が宙に浮かんでいた。

その少女は人間の子どもの10歳程で、髪は薄い水色で全体に鎖骨位の長さで毛先は毛束感と動きを出したミディアムヘアで前髪は

目と眉の間に整えられ、大きな瞳は瑠璃色、肌はまるで雪のように白い。

伸ばせば5mはあるのではないかという光沢のある白いシルク布は腰に巻かれ、腰から爪先まですっぽりと覆い隠している。プリーツまで作られているその腰に巻かれた布は、宙を浮いている少女に合わせるように裾を遊ばせている。

下半身を覆い隠す布とは対照的に上半身は胸元を紺碧の布が巻かれ隠されている。

「な、なんじゃこりゃあーっ!」

斎鹿はチモシーが膝から落ちるのも気にせずに勢いよく立ち上がるとサリルトの肩を持って思い切り揺さぶった。サリルトは斎鹿にされるがままになり身体が左右に揺れてはいたが我関せずといった様子だ。チモシーは突然地面に落とされたので目を覚まし顔を動かしてあたりを探っていたが、何もないとわかるとまた地面で丸くなって眠ってしまう。

ツナギは宙に浮かんでいる少女リリアンに両手を伸ばすと、リリアンは嬉しそうにその胸に飛び込んだ。

「リリアンです。」

属性は水、俺の守護をしてくれてます。」

リリアンは声を発せずにツナギの胸から顔を上げると斎鹿に向かって頭を下げる。

それにつられるように斎鹿もリリアンに頭を下げた。

まだ混乱している斎鹿にサリルトは揺すられ続けていたが、突然立ち上がると丸まって寝るチモシーの首筋を掴み斎鹿の頭に乘せた。

「落ち着け、斎鹿。」

ツナギ、刀を。」

「リリアン。」

サリルトの言葉に頷いたツナギはリリアンの名を呼ぶ。

すると、リリアンはツナギから離れ湖へと飛び込むと、すぐに水の膜が張られた中に刀が入った水球と共にリリアンが湖から出てきた。リリアンが空を切るように右手を振ると水球は斎鹿の目の前に移動すると、パチンという音を立てて水球は弾けその場には斎鹿の刀だけが残った。

「ありがとう、リリアン。」

助かったよ。」

ツナギがリリアンに穏やかな笑みを向けると、リリアンはツナギの首に両手を回し抱き着いた。

「リ、リリアン、ありがとう。」

斎鹿はサリルトの後ろに隠れ顔だけを出してリリアンにお礼を言ったが、その顔にある笑みは引き攣っている。そんな斎鹿の頭にチモシーは張り付くように器用に乗っている。

リリアンはそんな斎鹿に微笑むとそのまま姿が薄くなり消えてしまった。

「き、消えた。」

「また詳しく教えてやる。
剣を持つてみる。」

斎鹿はサリルトの後ろから恐る恐る出ると刀の柄を握る。

柄は水球の中に入っていたにもかかわらずまったく濡れておらず、斎鹿は刀を軽々と持ち上げた。

「軽いんですけど・・・。」

「ははは、斎鹿様は怪力ですね。」

ツナギの悪気の欠片もない笑顔に斎鹿は殴ってはいけないと心では思っていたが、つい足が出てしまった。サリルトの後ろから飛び出るとそのまま助走をつけ振り向いていたツナギの腹に蹴りを入れた。構えていなかったツナギは両膝をつき両手で蹴られた腹を押さえている。

サリルトはツナギと斎鹿の様子に肩を落としたため息を吐く。

「その刀については後で調査する。それまで持っている。
今は城に戻って手紙を書くことが先決だ。」

「何で？」

すっかり忘れていた斎鹿の頭を叩くと、そのまま手を斎鹿の頭の上に置き下へと押す。

すでにサリルトにとってこの技は斎鹿用になってしまっているようだ。

「馬鹿がっ！」

姉上に手紙を差し上げるのだろうかっ！」

しばしの沈黙。

「あぁっ！」

でも、明後日までほっとけば？結婚させられないで済むじゃん。」

斎鹿は左手の掌に右手で拳をつくって打つと納得といったように頷いた。

「私の誤解を解く方が先決だっ！！」

「いいじゃん。」

ちよつと男が好きと思われてるだけで害ないんだし。」

「害は大いにあるっ！！」

サリルトは斎鹿の右手首を掴むとそのままズルズルと引きずるように出口へと歩いて行く。

斎鹿の左手には刀、頭には張り付いているチモシー、右手はサリルトに掴まれて斎鹿は諦めたようにサリルトの横をついて行く。

（仲が良いなあ）

後ろから見ていたツナギは2人を後ろから微笑ましそうに見ていた。

第二十二話 不思議な少女？（後書き）

ありがとうございました。

第二十三話 前略 姉上さま

《前略

姉上さま、先程はお越し頂いたにも関わらず碌なお持て成しもせず申し訳ありませんでした。

早速ですが本題に入らせて頂きたく存じます。

私は、斎鹿がいうような『男性の恋人がいる』ということは断じてありません。

なぜなら、私は女性が好きだからです。姉上さまには黙っておりましたが女性との関係も1度や2度ではなく、幾度となくあります。これは言い訳ではありません。

本当に私は女性が好きなのです。

姉上さまを悲しませた罰ならいくらでも受けますので、何卒本日中に我が邸にお越し頂きたくお願い申し上げます。

草々《

サリルトは執務室の机に羽ペンをインク壺に付いているペンホルダーへ置くと椅子の背にぐっともたれる。

その間、斎鹿は執務室の北側にある机に紙を置き白い2人掛けのソファに座りながら右手で羽ペンを持っている。その顔は天井を向き、文章を悩んでいるようで口を尖らせている。

サリルトはそんな斎鹿を見詰めると、青の苑から戻ってきたときのことを思い出していた。

青の苑から城までは時間にして20分程かかり、その間もチモシーはずっと斎鹿の頭が気にいったようであつたままだった。どうやら

母親の背にひついて生活する子どものチモシーは、毛のある齋鹿の頭が母親の背と同じように感じているらしい。

ツナギは1度部下の元へ行くと城に着く前に別れ、齋鹿とサリルトは城に戻った後、齋鹿がマゼンタにチモシーを見せ何か食べさせる物がないか尋ねると、マゼンタは目を大きく見開き主人の顔を見た。サリルトが無言のまま頷くと、マゼンタは大きく見開いていた目をそれ以上に見開き驚いた様子をみせた。

マゼンタはそつとチモシーを齋鹿の頭から抱き上げると食事をさせるというて奥へと下がってしまった。齋鹿は自分でチモシーに食事をさせたかったようで、マゼンタを引き留めようと手を伸ばしたが、サリルトがそれを許さず右手を掴んでずると2階にある執務室まで連れてきた。

それから齋鹿に数枚の紙と羽ペン、インクを渡したが、「使ったことがない。」と反抗されたがサリルトは何とかしりと強引に渡し北側のソファに座らせ、左手に持っていた刀は足元に置かせ、手紙に集中するように告げた。

それから30分。

サリルトは下書きを済ませ清書を済ませたというのに、齋鹿はソファに座らせてから羽ペンを持ったりインクに羽ペンを浸けたり天井を見て考え込んだりの繰り返しだ。

「書けたのか。」

サリルトが尋ねても齋鹿は唸るばかりで返事も碌にしない。

サリルトは椅子から立ち上がると齋鹿の後ろまで移動をし、そつと齋鹿の頭越しに手紙を盗み見る。

そこには未だ真つ白な紙が置かれていた。

「一体いつになったら書き終わるのだっ！」

「いやね、私、昨日ここに来たばかりじゃなか。」

「だから、どうしたっ！」

「字なんて書ける訳ないじゃん。」

「ってか、話せてるのも今考えると不思議だよな。」

「・・・・・・・・・・。」

不覚にも斎鹿の言葉を聞くまで考え至らなかったサリルトは黙り込み、1人掛けのソファに乱暴に座ると斎鹿の持っていた羽ペンを強引に奪った。

「代筆してやる。」

斎鹿は、最初からそうすればよかったのに、と思ったがそれを言葉にすればまた怒るだろうと先読みし何も言わずに深呼吸を小さくした。

サリルトはさつと書くときと羽ペンをホルダーに挿し、その紙を持ち上げて執務机まで持っていくとそれを半分に折りたたみサリルトが書いた手紙と共に洋形封筒へと入れ、封をすると再び羽ペンを持ちインクに浸けるとその上からサインをする。

サリルトが机の上の呼び鈴を立ったまま鳴らすと、5分程してから扉をノックする音が響きサリルトが入るように声を掛けると扉がゆっくりと開けられた。

「お待ちせ致しました。」

そこに現れたのはチモシーを抱いたマゼンタだった。

入る前に一礼をしたマゼンタは姿勢を正しゆつくりと執務机の近くに立っていたサリルトへと近付く。斎鹿はソファから立ち上がりサリルトの近くへ歩いて行きマゼンタの腕にいるチモシーへ手を伸ばすと、マゼンタは穏やかな笑みを浮かべその腕にチモシーを渡した。

「姉上に早馬を出し、この手紙を至急届けよ。」

サリルトが手紙を手渡すとマゼンタはその手紙を両手で受け取り頭を下げ退出した。

「それでは姉上が来るまで少し休むか。
おまえも部屋に戻って休んでいいぞ。」

「ねえ、その前にさっきのこと教えてよっ。」

「さっきの？」

「ああ、ツナギの守護精霊か。」

サリルトは白い1人掛けのソファに向かい腰かけると、まだ執務机の側に立っていた斎鹿に近くソファに腰かけるように声を掛ける。斎鹿はチモシーを腕に抱いて、サリルトの言葉に素直に従い先程までいたソファに腰かけた。サリルトは腕組みをしその長い左足を下に足を組んでいる。

「あれって何なの？」

斎鹿は興味津々といった様子でサリルトを見詰める。

「リリアンは湖の精霊だ。」

この世界には様々な精霊がいる。それぞれ精霊には属性があり、水、火、風、土、光、闇、大きく分けるとこの6つだ。宿主と精霊が互いに心通わせ契約をし初めて契約した精霊の属性精霊術が使えるようになる。」

「属性精霊術？」

「簡単に言えば・・・精霊の属性を使った魔法みたいなものだ。先程ツナギが使っていたのも精霊術で、その刀の周囲に水の膜を張り保護と力の抑制をしていた。」

「へえー、私も持てる？」

斎鹿は瞳を輝かせ子どものようにサリルトに問いかけるが、サリルトはため息を吐くと両手で目を覆った。

「おまえはもう契約している可能性がある。」

「・・・した覚えはないんですけど。」

「おまえの剣はおまえ以外持てなかった。つまり何かの力が働いているということだ。」

「ちょっと待って！」

契約って互いに心通わせてって言ってなかった？」

「たまに強引なものもある。」

一方的に精霊が見初めて勝手に契約を結んでしまうこともある。そのようなことが出来るのは力の強い1級精霊だけだな。」

斎鹿は話を理解できず首を左右に傾け何とかサリルトの言っていることを理解しようとしているが、斎鹿のいた世界では精霊は架空のもので山にもいるとは言われていたが見たことはなく現実味はない。

それなのに自分がもう契約を済ませてしまっているというのが呑み込めない。

それが何なのか、なぜ契約したのかが分からず、刀を見下ろしてもそれは動かずそのまま見下ろされるだけだ。

「何かよく分かんないから、まあいいわ。」

斎鹿が諦めたように言うとサリルトは大きなため息を吐いた。

「おまえに探究心はないのか。」

「探究心はあるけど、持続力がない。」

サリルトは斎鹿の自信満々の顔を見るとその場から立ち上がり歩いて行くと、笹百合の扉の前に立ち取っ手に手を掛けた。

「私は少し休むぞ。」

おまえの相手は疲れる。」

「それは、こっちのセリフっ!!」

サリルトは扉を開け中に入ろうとすると斎鹿もチモシーを抱えその後を追うように中に入ろうとする。

「おまえは来るなっ!」

「何だよ。」

あっ！やらしい本隠してんでしょお。」

斎鹿が不潔といった目でサリルトを見ると、サリルトは斎鹿の頭を強く叩いた。

「痛いっ！」

「そんな本隠していないっ！」

「ムキになるところがますます怪しいなあ。」

サリルトが再び斎鹿の頭を叩こうとするが、斎鹿は叩かれる瞬間に頭を横にずらし避けた。

「あたりませーん。」

「このっ！」

斎鹿はサリルトの横をすり抜け部屋の中へと入っていき、サリルトも急いで向きを変え斎鹿の後を追う。

笹百合の扉はゆっくりと静かに閉まった。

この笹百合の扉をくぐり、部屋の中に入ってしまっことでさらなる誤解を生むことを斎鹿とサリルトはまだ知らない。

第二十三話 前略 姉上さま（後書き）

ありがとうございました。

第二十四話 姉上さまの勘違い？

シアンとセバスチャンを乗せた2頭の馬が引く馬車は、公爵城を退出し城下を抜けて緑豊かな森の中をさらに走ると、水色の玄関とモールドイングが目を引きシンメトリーの白い外観の家が現れた。

その2階建ての家はまるで隠れ家のように森の高木の中に隠れるように建っていた。

120坪程の家はサリルトの城の3分の1にも満たない大きさだが、その森の家は安息の地ともいえる程穏やかで何もかもを包み込む優しい空気で溢れていた。

馬車が家の前に着くと、シアンはセバスチャンに支えられながら水色の玄関を潜り、白とピンクを基調とした調度品の脇を通り抜けた。支えられながらガラス張りの戸を開け、中庭のロッキングチェアへと辿り着いたシアンはロッキングチェアへとゆっくりと腰を下ろす。

セバスチャンはシアンを座らせると一礼しお茶の用意をするために室内へと下がった。

中庭には芝生が敷き詰められ鮮やかな花が花壇に植えられ、蝶や金属光沢のある美しい羽毛を持った体長5?程の鳥が花の蜜を味わっている。

シアンが腰かけているロッキングチェアは、支柱部分に施されたくりや、背もたれトップの彫り模様など、こだわりのディテールが溢れ、赤みのブラウン色が更に輪をかけて木のぬくもりと優しさを感じさせる椅子だった。ロッキングチェアの隣には、天板側面のエッジ部分にまでタイルを貼り込んで美しく仕上げたラウンドテーブルと曲線フレームが美しい真鍮製の椅子が2脚。

「悩ましいことだわ。」

シアンは頂垂れたまま小さくため息を吐き、腰かけていた椅子を軽く揺らす。

視線を花壇に移し楽しそうに飛び交う鳥や蝶を眺めた。

普段は愛らしく愛でる存在である彼等も今はただ何も感じないただの飛び交うものだ。

「まさか・・・男性の方が好きだなんて。」

シアンが空を見上げ呟くと、その空は雲ひとつなく澄み切っていた。

なんだかその空が今の自分の心とは対照的過ぎて見ていられなくなったシアンはそっと目を閉じた。

「よお、居るんじゃないか。」

後ろから聞こえた声にシアンは目を開け身体を起こして後ろを振り向くと、そこには焦げ茶色の毛先がランダムに動きを出した短髪で瞳は蜂蜜色で好奇心に溢れている20歳程の青年が立っていた。

青年はクレリックシャツのネイビーストラップを着て上から2つめまでの釦を外し、下には乗馬用の白キュロットを穿いている。膝革付きのそのキュロットの中にクレリックシャツを入れて、足には黒いライディングブーツを履いている。身長は180?程であろうか、体格はがっしりとしている。

どうやら青年は格好から推測すると馬に乗ってやってきたようだ。青年は、シアンのかけている椅子まで大股で歩いて行くと、シアンの足元に右膝をつき、そっとシアンの右手を自身の右手の掌に乗せるとその甲に唇を落とした。その姿はまるで騎士が女王に忠誠を誓っているようにも見えた。

「会いたかったぜ、シアン。」

「私もですわ、ロハス様。」

シアンは青年の瞳をじつと見詰め、先程まで曇っていた顔を無理矢理笑顔にした。

ロハスと呼ばれた青年はシアンの様子に眉を寄せるとそのままシアンの足元に胡坐をかいた。

「どうしたんだ？」

あの無愛想になんか言われたのか？」

ロハスはシアンに穏やかな笑みを浮かべて尋ねるが、シアンは無言で首を横に振った。

2人の右手は互いに繋がれたままになっていたが、シアンがぎゅっと力を込めてロハスの手を握る。

「・・・サリーちゃんに恋人がいるんですって。」

シアンは再び項垂れたが、ロハスにはそれが何故落ち込む原因なのかかわからない。

ロハスの知っているサリルトと言えば『無愛想で真面目。政務にそつがなく、冗談が通じない。特定の女は作らないし、結婚願望0』の男だ。その男が結婚しないことを憂いでいたシアンは婚約者候補を見つけては弟の世話をしていたはずだ。その弟に恋人が出来て、何が悲しいのか。

「いい話じゃねえか。」

何、落ち込んでんだよ？」

「相手が・・・。」

「相手が？」

ロハスはわからないと首を傾け、シアンはロハスの目を見詰めて思い切つて言う。「

「サリーちゃんの相手は男なんですのっ!!」

ロハスは呆氣にとられ声も出ない様子だったが、すぐに芝生に倒れ込むようにして腹を抱えて大声で笑い出した。今度はロハスのようにシアンが呆氣にとられる。

「笑ってる場合じゃありませんっ!」

「なっ、なっ、なんでっ、そんなことにいつ!」

シアンは口を尖らせ、ロハスを睨んだ。ロハスはそれを気にせず、に笑い転げている。

「昨日、サリーちゃんが女の子を連れてきたの。」

その子は、明るくて素直でサリーちゃんにもはつきりと言いたいことは言えて、それでいてとっても愛らしいの。私、もうその子しかサリーちゃんのお嫁さんはいないと思って半ば強引に結婚話を進めていたんだけど、今朝になってその子が「弟さんは男の恋人がいる」って・・・。」

「で、信じたのか?」

「だって、一晩も一緒の部屋に閉じ込めていたのに何もなかったの

っ！

それにサリーちゃんは女性にはあまり興味がないようだし・・・。

「

「閉じ込めてたって・・・。

シアンがそういうことするから無愛想は嫌がるんじゃないの？」

ロハスは勢いをつけて一気に起き上がると同じ場所で胡坐をかいた。

「それにサリルトはシアンには黙ってつけど、結構女に手を出してるぞ。

俺が知る限り・・・一夜だけの女なら数え切れないぞ。」

ロハスは両手について立ち上がり手の指を互い違いに組むと頭の上へと上げてぐっと伸びをした。

シアンはそんなロハスの言葉を信じられないといった視線で見詰めていた。

「疑うなら俺の記憶を視てもいいぞ。」

その視線に気付いたロハスは穏やかな笑みを浮かべシアンに言うが、シアンは首を横に振った。

「あなたの記憶は視ないわ。だってそう約束したもの。
あなたの言葉は真実だけを私に教えてくれる。そうでしょ？」

シアンは不安そうな顔をいつもの自信に満ち溢れた明るい笑顔に戻すとロッキングチェアから勢いよく立ち上がりロハスの胸に抱き着いた。

突然のシアンの行動に目を見開いたロハスだったが、上に上げていた手をそつとシアンの背に回した。

「だったら斎鹿ちゃんが私に言ったのは嘘だったってことかしら？」

「それはわかんねえな。」

その子がサリルトのことを本当にそう思って言っただって場合もあるし、強引に結婚を進めるのを止めようとしたのかもわかんねえ。」

「私、強引過ぎたのかしら？」

ロハスは黙ったままだったか、ここにサリルトと斎鹿がいれば力いっぱい頷いていただろう。

「ちなみに・・・どこまで進めた？」

ロハスは恐る恐るといった感じで胸元に顔を寄せているシアンに尋ねる。

「まだまだですわ。」

式場の予約と招待状は出しておりますの。だから、後は斎鹿ちゃんとサリーちゃんの衣装の打ち合わせと他です。」

「えっ！？

招待状出しちゃったのっ！会ったの昨日だろ？」

「善は急げですわっ！」

胸元から顔を上げて上目使いで嬉しそうに笑うシアンはそれはそれは可愛らしかったが、ロハスはここまで強引に進められた2人を

憐れんだ。

ここは憐れな2人のためにもシアンに釘を刺さねばとロハスは厳しい顔つきでシアンの名を呼んだ。

「シアン、男は大事な女にはなかなか手が出せねえもんだ。

結婚つてのは男にとつては将来を決める大事なもんなんだ。

それを会って明後日に結婚じゃあ愛も深められねえし、結婚しても上手いかなえぞ。」

ロハスの言葉に目を見開いたシアンは嬉しそうだった顔を曇らせ、ロハスの胸に再び顔をうずめた。

そのまましばらくシアンはそのまま顔を上げなかった。

心配したロハスはそつと顔を覗き見ようとするが、シアンはさらに胸に顔を押しつける。

「シアン、きつく言っちゃったけど・・・」

「サリーちゃんは斎鹿ちゃんのことを好きだったからあの夜何にも出来なかったのよっ!!」

ロハスの言葉を遮り、勢いよくロハスの胸から顔を上げたシアンは嬉しそうに大声を上げた。

どうやらシアンはロハスにきつく言われて落ち込んでいた訳ではなく、ロハスの言葉に疑問を感じ考え込んでいたらしい。

「あつ、えつ、いや、俺はそういう意味で言ったんじゃない・・・。」

「確かに焦りすぎたわ。

サリーちゃんはまだ斎鹿ちゃんへの想いを自覚してなかったのよっ!

そうと分かれば、今から大忙しだわっ！」

「おいっ、違っぞ！」

もはやロハスの言葉はシアンには届いていなかった。

シアンは背伸びをしてロハスの口に軽くキスするとそのままロハスの腕の中を離れてガラスの戸をくぐり大声でセバスチャンを呼んだ。

その場に残されたロハスは苦笑いを浮かべ、再び憐れな2人の中で謝るしかなかった。

第二十四話 姉上さまの勘違い？（後書き）

ありがとうございました。

第二十五話 ベット上での告白

笹百合の扉の向こうの部屋は寝るためだけの部屋といってもいいほどだった。

ダークブラウンのクラシックスタイルの天蓋付きのキングサイズ猫脚ベットは部屋の北側にあり、ベットの両端には優美な曲線と自然をモチーフにした精緻な装飾を施した白いナイトテーブルがそれぞれ置かれている。ナイトテーブルの上には何も置かれてはおらず塵一つない綺麗なままだ。

天井には蔦をイメージしたと思われる黒色の真鍮部分と9つの黄色い花型ガラスのシャンデリアが吊り下げられていた。シャンデリアの真下には6畳程の大きさの白い絨毯が敷かれている。

どうやら東の客間とこの部屋の調度品は同じものが使われているようだ。

斎鹿はサリルトの横をすり抜けて部屋に駆け込むとチモシーを床に下ろし、猫脚ベットのまで歩いて行くと両手をマットレスの下に突っ込んで動かしている。

どうやらやらしい本を隠していないか確かめているらしい。

「やめんかつ！」

後を追ってきたサリルトが斎鹿の頭を掴み、そのまま後ろへと引っ張ると斎鹿は声を上げてその場に尻もちをついてしまった。

「いったあ、何すんのよっ！」

尻もちをついたまま斎鹿がサリルトを上目使いで睨むと、サリルトはそんな斎鹿の様子を見ても嫌みの1つも言わない。斎鹿の悔し

そんな視線を背にサリルトはベットへと靴を脱いでドカツと豪快にうつ伏せに倒れこんだ。

斎鹿は立ち上がるとベット脇に立ち、脱力しベットに身を預けているサリルトの顔を見ようと顔を横に向け覗き込むが、その顔はシートに押しつけられ見る事が出来ない。

「おまえ・・・不安ではないのか？」

ここはお前の世界ではないし、お前を知っている者もない・・・」

サリルトは柔らかなベットに押しつけていた顔を斎鹿の方に向け気怠げな様子で焦点の定まらない視線を向ける。どうやらかなり眠いようだ。

斎鹿は目を瞬くとサリルトの背に飛び込むように仰向けで倒れこんだ。

「ぐあっ！」

サリルトは突如かかった重さに気を抜いていた事もあり、圧迫感を感じて思わず大きな低い声をもらした。斎鹿はサリルトの背の上で両手を広げると、その手がたまたまサリルトの頭に当たってしまうが、今のサリルトには怒る気力もないようだ。

いつもなら怒声が上がりがり起き上がって頭を押されるところだが、今はうつ伏せになったまま焦点の合っていない目で先程まで斎鹿がいたところを眺めている。

「だから、言ったでしょ、あんたの腹立つ態度でそれどころじゃなかったって。」

「そんな訳あるか。」

サリルトの低い声に少し考え込んだように黙った斎鹿だったが、目を閉じて元の世界を瞼の裏に思い出すようにゆっくり目を閉じる。斎鹿の瞼の裏には育ててくれた祖母、村の人達、いつも遊んだ山、まだ昨日の朝までは確実に自分と繋がっていたものが溢れ出てくる。

「確かにさあ・・・なんで私なんだろうって思うし、ばあちゃんを残してきたのは心配だけど、幸い言葉は通じてるんだし、よくわかんない私でも親切にしてくれるし、あんたの姉ちゃんかなり強引だけどいい人だしさ。」

泣いたって嘆いたってどうしようもないことですよ。」

「そうか。」

「そうそう。」

それに、あんたもいい人でしょ？」

サリルトは目を見張ったように斎鹿を見ようと首を動かすが、斎鹿が乗っているので見る事が出来ずベットへと伏せてしまう。

斎鹿はサリルトが首を動かして見ようとしているのに気付いていたが、顔が熱くなっているのを感じ少し赤くなっているだろうとそのまま背に体重を掛け続けて起き上がらせなかった。

「口が悪くて、態度が悪くて、性格悪くて、女を手玉に取って、何考えてるか分かんないし、女癖悪いし、まあ何かと口うるさいけど、いい人でしょ？」

「女が2回出てきたぞ。」

褒めているのか、それは。」

サリルトは方頬をベットに沈ませてため息を吐くと目を閉じ、昨

日会ったばかりの斎鹿を思い返していた。

会った当初は、婚約者候補が迷ったのかと思い丁寧に対応したが、その涙を見てしまったら逃れられないと思う程儚げで庇護しなくてはと思った。

それが今では、口や態度が悪いのはお互いさまだと思うし、斎鹿が言うように女を手玉に取ったりはしていない。ましてや女癖はそれほど悪くないとサリルト自身では思し、何考えているのか 分からないのこっちのセリフだとサリルトも思う。

何かと口うるさいには何かと気になることをするからだ。

「おまえは可愛くないな。」

「あんたは性格悪いわね。」

「おまえみたいな女と結婚すると大変だな。」

「あんたみたいな男と結婚すると苦労するわね。」

斎鹿はサリルトの背の上から起き上がり退くとそのままベットから降りようと尻を滑らして端へと向かう。

「どこへ行く。」

サリルトが斎鹿の手首を持って引き留めると、斎鹿はサリルトの顔を見詰めた。

掴んでいる手は力を込められているようで斎鹿には少し痛かった。

「寝るんないないほうがいいでしょ?」

斎鹿はその手を剥がそうとすると力が込められている手はさらに

力を込め骨が悲鳴を上げそうなほどだった。

「痛い痛い痛いっ！」

何なのあんたはっ！」

手を振って何とか振り解こうとするがしつかりと捕まえられた手首は放されず斎鹿が疲れただけだった。サリルトは何も言わずにその手を引っ張り再び斎鹿はサリルトの背の上に倒れこむこととなった。

「何なのよ、あんたは……。」

斎鹿はため息を吐くとそのままサリルトの背に体重をかけた。

サリルトと斎鹿は2人ベットの上。

唐突にサリルトが切り出した。

「おまえ、私と結婚するか？」

甘く低く言ったサリルトの声に今まで何人もの女が騙されてきた。サリルト自身もこの声の利用価値を見出していたし、何度もこの手で女を口説いてきた自信があった。だからこそ使ったのだが……。

「はぁ、何いってんの？」

頭おかしくなっちゃった？」

例外もいるのだとサリルトは悟った。

第二十五話 ベット上での告白（後書き）

ありがとうございました。

第二十六話 結婚は結構？

サリルトはベットに手をついて起き上がり膝立ちになると、背に乗っていた斎鹿はそのまま滑り落ちて柔らかなベットへその身を弾ませた。

掴んだままの手首を引っ張り枕の方へと斎鹿を引き上げると、軽い斎鹿の身体は力に逆らえずに白い枕へと頭を落とした。あつという間の出来事に斎鹿は文句も言えずがまだ。

サリルトは手首を離し、斎鹿の顔の左右に両手を片手ずつつく。斎鹿は仰向けに押し倒され、その上に足を広げて両足で斎鹿を挟むようにして乗るサリルト。

長いサリルトの銀髪が斎鹿の顔にかかる。

「・・・・・・・・前にもこんなことなかった？」

斎鹿の視線は目線は泳ぎサリルトの真剣な雰囲気にもまれてはいけないと必死に話題を変えようとするがサリルトは真っ直ぐ斎鹿を見詰めている。その視線は熱くまるで恋人をみるような目だった。

「何かさ、落ち着いて話すとお互い分かりあえるってかさ・・・・あつ、チモ男の名前だけでもにする？」

あんたの好きなやつでもいいし、あつ、他のとかも一緒にさがしてみたりしたりして・・・・」

サリルトは右手で斎鹿の頬をすつと撫でるように触れる。

この世界の女性ならサリルトの美しさと魅惑の視線で身も心も委ねてしまつたろうが、あいにく斎鹿はこの世界の出身でもないし色恋には経験がなかったのでぞつと背筋に鳥肌が立った。

「なんで結婚とか言いだした訳！？嫌だって言ってたじゃんっ！」

「わからんが唐突に思った。おまえなら気を遣わなくてもいい。何でも言えそうだ。」

「いやあ、他の人でも大丈夫だと思うよ！うん！」

斎鹿はくつつきそうなサリルトの身体を押し返そうと両手を胸にあてて力の限り押す。

しかし、サリルトは気に留める様子もなく斎鹿の耳元へ息がかかる程唇を近付けるとそつと囁いた。

「おまえみたいな気の強い女の方が合っているのかもな。」

心の中では色気のない叫び声を上げた斎鹿だったが、サリルトのセリフを呑み込むと顔がさつと青くなりある疑惑が斎鹿の中で浮上する。

「あ、あんた、もしかしてマゾっ!？」

「・・・・・・・・マゾ？」

「ひいっ！触らないでよっ！私はサドじゃないですからっ！」

「・・・・・・・・サド？」

斎鹿はサリルトの胸にあてていた手に一層力を込めて押すとサリルトの身体は少し離れ斎鹿は希望の光が見えた様だった。

だが、それは斎鹿の力ではなく斎鹿の言葉に疑問を感じたサリルトがその身をどかしたただけなのだが斎鹿はそんなことも知らずに力

を込めて押している。

「それは何だ？」

「・・・えっ」

少し離れたことによって再び熱のこもったサリルトの視線を直視することになり視線を逸らそうと顔を背けようとすると、サリルトが手で両頬を押さえて動けないようにする。

「素直に答えればよし、答えなければ・・・」

サリルトは顔を斎鹿の顔に近付け今にも口と口が触れ合いそうだが避けようもない斎鹿は我慢できなくなったように話し出す。

「マ、マゾはマゾヒズムっていつて精神的肉体的にいじめられるのが好きな人で、サドってのはサディストで精神的肉体的にいじめるのが好きな人。どっちもその・・・性的な意味で・・・。」

サリルトは考え込むように黙り、少しだけ手が緩んだ隙に逃げようと身体を捻り手を遣って起き上がるうとするが、サリルトはそれを許さず斎鹿の肩を掴み強引に引くと元の体勢戻されてしまった。

「・・・私はどちらかというとサドだ。」

「そんな情報いらんわっ！」

斎鹿は威嚇する子犬のように唸るがサリルトにとって子犬の威嚇など恐いはずもなく再び迫ってくる。

「わ、私、好きな人と結婚したいしっ！」

「私を好きになればいい。」

「愛し合って結婚したいしっ！」

「愛はそのうち見つかる。」

「相性が合う人が良いしっ」

「今から試せばいい。」

「それはだめっ！！ってか、服に手を掛けるのやめろっ！
そういう意味じゃなくて性格よ、性格っ！！」

サリルトは肩紐に手を掛けたが、それを止めようと斎鹿が身体を動かし暴れて、髪も乱れベツトと服との摩擦で衣服が余計に淫らに乱れていることに気付いていない。

「唐突に思って結婚は出来ないからっ！」

「おまえと結婚したら面白そうだと思った。

他のお嬢様ではこちらも気を遣わなければならない。」

「面白さと楽さで結婚されたらたまらんわっ！！」

「よいではないか。」

「お代官様かつ、おまえはっ！」

サリルトは齋鹿の唇に己の唇を近づけていく。

齋鹿は避けようと暴れたり、顔を背けようとするががちりと身体と手で押さえられているのでビクともしない。

齋鹿はこうなったら自棄だとやられる前にやってやろう精神で首で頭を持ち上げてサリルトの額に思いっきり自分の額をぶつけた。その時に唇に柔らかい感触と一瞬の痛みを感じたがとりあえず忘れることにしようと齋鹿は脳内で決定した。

「馬鹿娘っ！」

齋鹿に馬乗りになりながら上半身を起こして額を右手で押さええているサリルトはいつものように齋鹿に地の底から湧き上がったような声を出す。

「目が覚めたかった！この色ボケ公爵っ！！」

齋鹿がサリルトの顔を首を持ち上げて見ると、唇から血がわずかなが出しており先程忘れようとしていた感触は間違いなくサリルトの唇だったことが決定付けられた。

「おまえからしてくるとはいい度胸だが、本当の口付を教えてやろう。」

サリルトは額に血管を浮かべながら明らかに怒気のはらんだ顔をして再び齋鹿の顔に急接近してきた。さすがの齋鹿も2度目があるとは思わずこのままされたいと思い、誰でもいいから助けてっ心の中で叫んだ。

「じっきげんよー！！お姉さまよう。」

バンつと勢いよく笹百合の扉が開きにこやかに入ってきたのは、先程泣きながらアルファイオス家を後にしたシアンだった。

シアンは、ベットの上でサリルトが斎鹿の上に馬乗りになっているのを確認すると驚いたように目をぱちぱちと瞬いた。

「あら？

お楽しみでだったかしら？ふふつ。」

誰でもいいとは思いましたがこの人だけは勘弁して欲しかった・
・と思った斎鹿だった。

第二十六話 結婚は結構？（後書き）

ありがとうございました。

第二十七話 命名されたチモシー

サリルトは斎鹿の上で馬乗りになったまま首だけを動かして扉に目をやると、そこには数時間前にセバスチャンに支えられながらアルファイオス家を後にしたシアンが優雅に立っていた。

その顔を先程の悲しみに暮れた顔ではなく自信と希望に溢れた明るい顔だった。

シアンは自分がサリルトに斎鹿への気持ちを気付かせなければという信念をどんなに斎鹿に文句を言われても貫き通す覚悟だったが目の前に広がる光景を見るとすでに問題は解決したようだった。

男と女が1つのベットにいるのだ。何もないと誤解しない方がおかしい。

「あら、私すっかりお邪魔虫ね？」

屈託のない笑顔をベットに向けると、サリルトの下で斎鹿が抜けだそうと足掻いているが上にいるサリルトは気にも留めず元気になった姉に安堵のため息を吐いた。

「姉上。」

「サリーちゃん、お手紙ならこちらに来る途中で受け取ったわ。」

斎鹿ちゃんに言われて勘違いしたんだけど、斎鹿ちゃんも勘違いしてたのね。」

「斎鹿の方は私がきちんとしつけをしておきました。」

「まあ仲がいいのね。」

「勝手に和んでないで助けて下さいよっ、お姉さんっ！」

斎鹿は暴れて髪も服も乱れてはいたが頭ははつきりと働いていたので呑気に姉と弟で話している場合ではないとベットに沈みながら大声を上げた。

シアンはきよとした瞳をして左手で右肘を支えて右手の人差し指を立て悩んだように首を傾けた。

「あら？合意ではなくて？」

「全然合意じゃないんですけどっ！！」

「私としては既成事実は全然OKよ。」

「いやいやいや、ダメですからっ！」

サリルトはシアンと斎鹿の言い合いを聞きながらため息を吐くと斎鹿の上から退くとベットの端まで行き靴を履くとベットに腰かけた。シアンはヒールの音を響かせながらベットへと近付いてくる。

「・・・ありがとうございます。」

「あら？サリーちゃん、何のお礼かしら？」

サリルトはシアンの言葉に何も答えずそのまま頭を項垂れると指を互い違いに組んで親指の第1関節を曲げて眉間を細かく何度も叩いた。

シアンはそんなサリルトの様子に満足げに微笑むと、ベットの上で安堵したように肩を下ろしベットに身を沈ませている斎鹿へと視線を移した。

「さあて斎鹿ちゃん、お姉さまを騙すと酷いわよって言ったわよね？」

斎鹿はシアンの不気味なほどに優しい声に一気に身を起こすとシアンへと怯えた視線を向け、急いで先程まで逃げ惑っていたサリルトの大きな背中へと引っ付く。

「あ、あれは、騙したんじゃないくて、わ、私も、そう思ってたんですっ！」

シアンは肩口からこちらを覗き見る斎鹿をまるで小動物のようだと微笑む。

斎鹿はそれを何かよからぬことを考えているんだろつと一層サリルトへと身を寄せる。

「ふふ、今回は許してあげるわ。

私も大切な弟を疑ってしまったんだもの。」

斎鹿はふうつと小さなため息を漏らすと両手を後ろについて首を回したり左右に傾けて骨を鳴らしている。どうやら一気に気が抜けてしまったようだ。

「でも、次はなくなつてよ。」

「・・・はい。」

シアンは満足げに微笑むと足元に何かが蠢いていることに気が付いた。

それは先程まで丸くなって眠っていたチモシーで、どうやら突然

騒がしくなり前足だけで身体を引きずって移動してきたようだ。

「まあ、可愛らしいっ!」

足元のチモシーを両手で抱きあげたシアンは嬉しそうに頬擦りをしたが、チモシーは何が気にいらぬのか短い手足を暴れさせ身体を捻って何とか逃げ出そうともがいている。

あまりにも暴れるチモシーにシアンは身体を動かしたり手で支えながら落ちないようにしているが、そんなことはお構いなしにチモシーはさらに暴れる。

「どうしたのかしらっ?」

サリルトはため息を吐くと立ち上がりシアンの腕の中で暴れているチモシーの首筋を掴み持ち上げるとだらんと身体が垂れたチモシーはすっかり大人しくなった。

サリルトは手に持ったチモシーをベットへと向き直り斎鹿の頭の上に乗せる。

チモシーの顔は斎鹿の顔の丁度上にありひくひくと鼻を動かすと安心したようにそのまま大人しく引っ付いている。どうやらチモシーは斎鹿の頭を求めてここまで這ってきたようだ。

「お名前は決まっているの?」

シアンが斎鹿の頭に乗って安心しきっているチモシーを見て微笑みながら尋ねた。

「チモ男です。」

「ローエングリンです。」

斎鹿とサリルトは同時に答えた。

互いに言い終わると無言のまま睨み合いどちらも引く気配はない。

「斎鹿ちゃんもサリーちゃんも仲良しね。」

シアンが2人の様子に右手を口に当てて笑っていると、頭を伏せていたチモシーが顔を上げてきよろきよろと辺りを見たがすぐにまた斎鹿の頭にその頭を伏せた。

それに疑問を感じたシアンがじっと見てしていると閃いたように大声を出した。

「この子名前に反応してるんじゃないかしらっ！」

それを聞いたサリルトと斎鹿は自分がつけたい名前を呼びだした。

「チモ男っ！」

「馬鹿な名前で呼ぶな。」

ローエングリンだ。」

「誰が馬鹿じゃいつ。」

変な名前は嫌だよね、チモ男。」

「どこが変な名だ。」

センスのない名前よりはマシだな、ローエングリン。」

2人の名前付けは言い争いながらも続いて行くがチモシーは全く動く気配すらない。

それどころか欠伸をしすでに楕円の瞳は閉じそうなくらいだった。

「サリーちゃんたら楽しそうね、ふふ。」

その瞬間チモシーは閉じそうだった瞳をぱちつと開けてシアンをじつと見詰めている。

まさか・・・と思いシアンはもう一度読んでみることにした。

「・・・サリーちゃん？サリー？サリー？」

チモシーは首を傾けて「なに？」というようにすべての言葉に反応しシアンを見詰める。

どうやら名付けようとしている2人を差し置いてチモシー自身が名前を気に入ってしまったようだ。

「やだやだやだ、チモ男でしょ!？」

「ローエングリンっ!」

事態に気付いた2人は必死に名前を呼ぶがチモシーはそのままシアンを見詰めている。

名前を変える気はないらしい。

シアンは右腕を前に出して親指と人差し指を立てて銃のような形をつくり左手は腰に添えると自信満々に言った。

「命名、サリーよっ!」

「嫌だあっ!」

斎鹿は今日1番の大声を出して否定し、サリルトは今日1番の大きなため息を吐いた。

第二十七話 命名されたチモシー（後書き）

ありがとうございました。

第二十八話 女王じゃないです？

「似てる名前だと何かと不便じゃないですか。そもそもこの子は私が育てるつもりでここまで連れてきたんですから、この子の名付け権は私にあると思うんですよ。っていうか、サリイって名前が私的にはかなり無理なんで、半端なく無理なんでやめて下さい。まだローエングリンの方が100倍はマシです。それと、私のチモ男はかなり日本的には由緒正しいですよ。私の生まれた国では、長男は一郎、一男など『おとこ』という意味の名前をつけられることが多いのです。というか、絶対です！」

ベットの上で立ち上がり右手を握りしめて何とかチモシーの名前を変更しようと熱弁を奮っているが、サリルトは右の太腿に右肘をついて掌で自分の顎を支えるようにして如何にも馬鹿らしいといった雰囲気で斎鹿の話聞き流している。

シアンはにこにこ腕組みをして話を聞いているが、その笑みは確実に反対意見を受け付けない構えだ。

「しょうがないでしょう？」

サリイはもうその名前が良いって言ってるんですもの。」

「チモ男はしゃべってません！」

「人の揚げ足を取らないの。」

シアンはゆっくりとさらにベットへと近付き、斎鹿へとその白く肌理細やかな右手をすつと伸ばし人差し指を立て可愛らしく首を傾けた。

「齋鹿ちゃん、お姉さまの言うことは？」

なぜだろう、優しい声と柔らかな笑みを浮かべているのに齋鹿にはそれが悪魔にしか見えないのは。

「お姉さまの言うことは？」

「ぜ、絶対……。」

悪魔には庶民は勝てないのだ。

「良く出来ました。」

シアンは嬉しそうに笑みを深め、齋鹿は泣きそうな声でがっくりと頂垂れ、その時からチモシーは『サリー』となったのだった。

3人は笹百合の部屋を後にし執務室へと戻ると、執務室にある大型2人掛けソファに齋鹿は足を床につけて、上半身だけを左に倒して身体をくの字に曲げ頭を肘掛けに預け、サリルトはその横で長い脚を組み腕組みをして座っている。近くの人掛けのソファにはシアンがその長い脚を組み、右の肘掛けに体重を掛け身体を傾けている。チモシーは傾いた頭の上でも器用にバランスを保って齋鹿の頭にしがみ付いている。

「サリーちゃん、あの時口ハス様に連絡を取っていたのね。」

シアンはサリルトへと真っ直ぐな瞳を向け、それを受け止めたサ

リルトは微笑を浮かべた。

「お会いになれましたか。」

「予想外だったわ。」

てつきりお父様かお母様にご連絡を差し上げたのかと思っていたもの。」

「姉上をお止出来る方でなければなりませんので、あの方にお問い合わせ申し上げます。」

「ちょっとー、話がまったくわかんないんだけど。」

斎鹿は先程のことに不貞腐れたまま頭を預けていたが、話が自分の知らないまま勝手に進んでいくのが気に入らず割り込んだ。その声にはまるでやる気が感じられない。

「馬鹿か、朝のことだ。」

おまえと私は互いに別室に入り着替えただろう。その時にセバスチャンの目を掻い潜り浴室でロハス様に連絡を取っていたのだ。」

「ああ、そんなこと言ってた気がする。」

「適当だな。」

「適当なんで。」

「ってか、ロハス様って誰？」

サリルトは斎鹿の隠れていない耳を左手で握るとそのまま起き上

がらせるように引つ張ると、だらしなく身体を預けていた斎鹿は突然の痛みに身体を起こした。

斎鹿は耳にかかった手を払い除けるとサリルトを口を尖らせて睨む。

「痛いっ、何すんのよっ！」

「きちんとした体勢で聞け。」

「はいはい、口うるさいですこと。」

「はいはい、ではなく、はい。」

「はいはい、はいっ！」

シアンは両手の掌を胸の前で音を立てて合わせると嬉しそうに笑った。

斎鹿とサリルトはその音にシアンへと視線を向ける。

「明日には夫婦になるだけあつて息がぴったりねっ！」

これで何の問題もなく結婚式に向けて準備が出来るわ。」

「違うから！お姉さんが入ってくるとややこしいんですからっ！」

「結婚はするつもりですが、息が合っているかは疑問があります。」

「結婚しないからっ！」

「サリーちゃんも結婚する気になったし、社交界注目のお似合いカップル誕生だわ。」

「・・・話、聞いてくれます?」

「さあ、式に着る衣装の採寸はあと30分くらいで始めるわよっ！
大仕事はまだまだこれからよっ！」

張り切るシアンの耳にはもう斎鹿の言葉は聞こえていなかった。
斎鹿は肩を落として頂垂れるが、そんな斎鹿を横目にシアンは結婚式の用意についてや招待客についてサリルトに話し掛けている。
サリルトはシアンの話に頷きながらもあまり派手にはするなという釘をさしているが、もうすでにシアンが準備していることを考えるとそれは無理だろうと考えていた。

「もう、とりあえずロハス様から教えて下さい。」

斎鹿は頂垂れてサリルトの腕の服を掴んだ。

「現フルーレ国王ロハス・フルーレ陛下だ。
昨日から何度か名前が出ていただろう。」

「えっ、王様と知り合いなのっ!?!」

「我がアルファイオス家は公爵家として昔から補佐役として長年お仕えし王家との血縁関係も濃い。」

「ふーん、あんたって偉いんだ。
でも、お姉さんとどういう関係があんのよ?」

斎鹿は未だに覇気のない目でサリルトを見詰めている。

「何なのよ、女王様なんかですか？」

「違う。」

「性格はそうでもさすがに違うか。」

「まあ齋鹿ちゃんたら、私のことどう思ってるのかしら？」

シアンは笑ったまま鋭い視線を齋鹿へと向け、その視線を感じた齋鹿は身を震わせサリルトへと近付く。

「女王ではなく王妃だ。」

「・・・え？」

「女王ではなく王妃だ。」

「・・・・・・え？」

「しつこいぞ。」

予想外の正体に戸惑った齋鹿だったが、性格からして女王でも王妃でもあんまり大差ないなと内心思ったのだった。

第二十八話 女王じゃないです？（後書き）

ありがとうございました。

第二十九話 悪魔の頬笑み

女性であれば、素敵なドレスを着られるというのは心躍るものだ。特にウエディングドレスというのは女性の憧れである。

愛する人と一生を共にすることを誓う式で身に纏うドレスは、その日のためにだけに特別に選ばれた特別なドレスなのだ。そのドレスを身に纏う女性は誰もが幸せな表情を浮かべ、愛する人の元へと嫁いでいくのだ。

しかし、例外というものはどこにでもあるもので、アルファイオス家の突貫忍冬の部屋にてネックトップ、ビスチェライン、ウエストをメジャーで麗しい美女3人に下着のみの身体を測られている少女・斎鹿に至っては幸せというより不貞腐れた表情だった。それは、明日の昼には結婚式を迎えようとしている花嫁の表情ではなかった。斎鹿を採寸している美女たちは足首までの黒い長袖ロングワンピースでその肩の部分にはプリーツタイプのレースが2重でついており、胸元には広いピンクタックが横向きに縫われている。その上にVカットのエプロンを付けて、ちらりと見える足には黒のエナメル靴が履かれている。

クラシカルなメイド服を纏った美女3人は嬉しくて堪らないといった表情でテキパキと採寸を済ませていく。

「明日の結婚式が楽しみですね。」

バストを測りながら褐色の髪と同じ色の瞳の美女が嬉しそうに言った。

美女は褐色色の長い腰までの髪をポニーテールにして明るく笑っている。

「全然楽しみじゃないんで。」

冷静な斎鹿の返答に、ピップを測っていた浅緑色の毛先がふんわりとしたボブスタイルに紺碧の瞳の美女が控えめに笑う。

「まあ、サリルト様とご結婚される方は幸せですわ。」

「お優しいし、領民にも慕われ、何より一途な方ですわ。」

ポニーテール美女とボブスタイル美女は互いに示し合わせたように楽しそうに笑っている。

斎鹿はこの羞恥に満ちた時間を早く終わらせてほしいのだが、2人の美女は先程から『サリルト様はこんなに素敵よ攻撃』が続いている。もう1人の美女は紙に測ったサイズを黙々と書き続け採寸を続けている。

「あなた達、いい加減になさい。」

この後も斎鹿様はご予定が入っていらつしやるのよ。」

黙って作業を続けていたクールビューティーは厳しい視線を2人に向けて、しゅんとした2人は倍の速さで斎鹿の身体を測っている。

「いやあ、ご予定は私が何にもしなくても勝手に進んでいくんで。」

「ご冗談を。」

濃紺の髪を頭の上でまとめ同じ色の瞳、顔には黒縁眼鏡を掛けているクールビューティー美女は、表情をまったく変えずに頭を下げる。

その無表情さは誰かを思い出させる。斎鹿は誰だったかと思い返している。とすぐに思いついた。

先程まで一緒に部屋にいて何故か突然求婚してきた無愛想男だ。

「結婚したくない！！」

斎鹿が両手を上にあげて掌を力一杯握りしめて叫ぶと、ガチャッと扉の開く音が響き美女三人は扉の方に向き直り頭を下げた。

「誰と結婚したくないんだ？」

「そりゃ無愛想男の・・・って、なんで入ってきてんのよっ！！」

斎鹿は咄嗟に扉に背中を向けたまま身体を隠そうと両手を身体に這わす。が隠れるはずもなく、サリルトに斎鹿の下着を身につけて着る部分以外の素肌を見られてしまった。

サリルトは左手を軽く振ると3人の美女は廊下側の扉から退出していった。何だかんだと話している内にすべてのサイズを測り終えたようだ。

「ドレスは何色が良いか聞きに来た。」

「後でもいいでしょっ！！何で入ってくんのよ、変態っ！！」

「夫に向かって変態とはなんだ。」

「変態じゃないっ！！」

サリルトは扉から真っ直ぐに斎鹿の元へと向かう。

斎鹿はそれに気付いたが裸同然の姿ではどこにも逃げられず、大

声を上げてサリルトを威嚇することしか出来ない。

「近寄るなっ、変態、痴漢っ！！」

「夫に向かつて変態、痴漢とは何だ。」

「夫、夫って言うなっ！！」

サリルトは齋鹿の真後ろまで来ると、後ろから左手を腹に回し右手を胸の下に這わせるとそのまま齋鹿を引き寄せた。

齋鹿の身長とサリルトの身長は20？の差があるので上から齋鹿の顔を覗き込むようにサリルトが齋鹿の耳元へと口を近付けるとふつと一息吐いた。

「ぎゃっ！」

「・・・もつと色気のある声は出せんのか。」

サリルトが呆れたため息を吐く。

「気持ち悪いっ！耳に息吹きかけないでよ、変態っ！！」

齋鹿は何とか反撃しようと捲し立ててはいるが、その顔も耳も身体も恥ずかしさで赤くなっていた。

齋鹿は男性免疫がないのでサリルトのように積極的な行動を取られるとどうすればいいかわからず、ただ戸惑い相手を罵るしか出来ないのだった。

「おまえ、白と薄緑は好きか？」

「はあ？」

「答える。」

「まあ、嫌いじゃないけど。」

サリルトは無言のまま頷くと「わかった」とだけ言い黙り込んだ。齋鹿には何のことだかわからずに首を傾げて考えたが、今は自分の格好の方が重要だ。

齋鹿はサリルトの腕の中で逃げるように足掻いているが、サリルトには逃がす気がないように足掻く齋鹿を意地悪そうな瞳で見ている。その口元はわずかに緩んでいる。

齋鹿は諦めたように齋鹿の胸に体重を掛けてもたれると口を尖らせた。

「あんたさあ、本当に結婚する気なの？」

「する気がないのなら今頃このようなことはしていない。」

「何だよ。」

「楽で面白いからって普通結婚しないよ。」

「私が普通ではないような言い方をするな。」

「普通じゃないんだよっ！！」

齋鹿は右肘で思い切り後ろのサリルトの腹へと撃ちつけた。

「もし帰れるようになったらどうすんの？」

「結婚してても私は帰るよっ！！」

「その時はその時だ。」

「帰っていいんだ。」

斎鹿はサリルトの答えに意外と目を瞬たせると上を見上げた。

そこには天使のような頬笑みを浮かべたサリルトの顔があり、斎鹿はまた不覚にもときめいてしまった。呆けている斎鹿にサリルトは低く甘い声で斎鹿の耳元で囁いた。

「帰れるものならな。」

天使の頬笑みは悪魔の頬笑みに変わった。

第二十九話 悪魔の頬笑み（後書き）

ありがとうございました。

第三十話 用意周到な結婚計画？

斎鹿はサリルトの囁きに一時我を忘れていたがすぐに自分を取り戻すと、サリルトの腹に肘鉄砲を食らわせて部屋から出ていくように怒声を上げた。サリルトもこれ以上斎鹿を怒らせると準備に支障が出るかと判断したのか、斎鹿の脳天に軽く口付をするとそのまま執務室へと踵を返した。

斎鹿は口付されたことに怒り地団駄を踏んでいたが、西側の大きな近くにある優美な曲線と自然をモチーフにした精緻な装飾を施した白い楕円のテーブルと机と同じモチーフの椅子へと視線を移し、斎鹿はそこまで歩いていくと足を投げ出して乱暴に座った。

椅子の背もたれにぐつと体重を掛け天井を見上げて目を瞑ると、もしかして目を開けるとこれはすべて夢で家に戻っているのではないかという考えが一瞬脳裏を過った。

斎鹿は閉じていた目を睨み震えながらゆっくりと開いていく。

「やっぱりそう簡単にはいかないか・・・。」

目を開けてそこに映ったのは目を閉じる前と同じ光景だった。

斎鹿は次に床に置かれた茶色の長方形の深いバスケットの中に置かれた先程まで着ていた服に視線を移すとアメリカンスリーブを右手にとって持ち上げる。すると、斎鹿はその下に灰色のパーカーと濃紺のジーンズがきれいに畳まれていることに気が付いた。

持っていた服を放しパーカーを勢いよく手に取るとそのまま胸元へ掻き抱いた。

パーカーからはいつも嗅いでいる匂いではなく花の良い匂いがした。

斎鹿はパーカーに袖を通し濃紺のジーンズを履くと立ち上がり執務室へと繋がる扉へと歩き出した。その足には靴は履かれておら

ず裸足で、髪も留めるものがなく腰までの髪を歩くたびに揺らしている。

「よしっ！」

斎鹿は扉の前までくると気合を入れた声を出し何度か深呼吸をしてから一気に扉を開けた。

そこには長方形型ローテーブルの上には、クリーム色の陶器で皿の縁のレースの飾りがシックで豪華な雰囲気の3段ハイティースタンドにクッキーやケーキが乗せられ、その横には白い陶器のティーポットが置かれ、シアンとサリルトの前にはソーサーに乗せられたティーカップがそれぞれ置かれている。そして、1人掛けソファに座るシアンの後ろにはセバスチャンが控えていた。

「斎鹿ちゃん、お疲れさま。」

シアンは扉を開けたまま立っている斎鹿に気付くところらに来てとばかりに手で招いている。

斎鹿が扉を閉めソファへと向かいサリルトの隣へと腰かけると裸足の足に硬いものが当たり何かと視線を下げるとそれは斎鹿の中で忘れ去られていた刀だった。

「げっ。」

「おまえ、忘れていただろう。」

サリルトは斎鹿の心を読んだように斎鹿に疑いの目を向けた。斎鹿は当てられたのが悔しくそんなことはないと言いがサリルトにはそれがわかってるように鼻で笑うとティーカップへと手を掛けた。

「セバスチャン、今日の予定を斎鹿ちゃんとサリーちゃんに教えてあげてちょうだい。」

「かしこまりました。」

セバスチャンは左の胸元から黒革の手帳を取り出し、琴紐が挿入されているところを開いた。

「サリルト様、斎鹿様には14時より式のマナー等を学んで頂き、16時に出席者リストの確認と式の打ち合わせ、17時30分礼儀作法、ダンスを学んで頂きます。」

「・・・いや、結婚しないんで。」

「あら、結婚式は明日なのよ?」

「いや、まだ結婚する気ないんで。」

シアンは大きなため息を吐き口を尖らせる。

「斎鹿ちゃんて往生際が悪いのねえ。」

「私が悪いみたいに言わないでくださいよっ!」

セバスチャンはカートの上で斎鹿の分の紅茶を入れると斎鹿の隣までソファの後ろを歩いていき、そつとカップを斎鹿の前へと置いた。

「おまえは私が嫌いかな?」

サリルトは真剣な面持ちで斎鹿を見詰める。

斎鹿はその顔に戸惑いを感じ何故だか責められているような感覚さえ覚える。

「別に普通。」

斎鹿の冷静は返答にシアンは噴き出して笑ったがすぐに両手で口を押さえて耐えているが、その口からは零れた笑い声聞こえてくる。肩は小刻みに震え身体を擦って耐えている。

「姉上、笑いたければどうぞ。」

「そ、そんな、の、わ、悪い、わ。」

サリルトは斎鹿だけを見詰めてシアンに言うが、シアンは笑うことを押し堪えることに必死で言葉が上手く発せないようだ。

「では、とりあえず結婚してみるというのはどうだ？」

「そんなお手軽に出来るもんじゃないでしょうがっ！」

「では、結婚しろ。」

「無理っ！！」

勢いよく否定した斎鹿にサリルトはため息を吐くとシアンへと視線を移した。

シアンは椅子の肘掛けを手で叩いて何とか笑いを抑えようとしているが上手くいかずにいたが、サリルトに見られていることに気付

くと咳ばらいをし何とか平静を保とうとしている。

「サリーちゃん、振られたわね。」

斎鹿ちゃんは何が気にいらないのかしら?」

「結婚が嫌。」

「それは無理だわ。」

それとも教会の違約金諸々払ってくれるの?」

「・・・ちなみにいくらですか?」

「セバスチャン、教えてさし上げて。」

セバスチャンはソファの後ろを歩いていき斎鹿の耳元に手を添えてそつと答える。

斎鹿は変な叫びを上げると勢いよく立ちあがりシアンに右腕を伸ばし人差し指を立てる。

「そ、そんなん払える訳ないじゃんっ!

ってか、そつちが勝手に教会とか予約したんだからそつちが払ってくださいよっ!」

「名義はいざという時のために斎鹿ちゃんなの。」

「いざという時ってっ!」

「いついつ時?」

シアンは可愛いらしい頬笑みを浮かべ右手を口元に当て今にも女王

のように高笑いしそうだ。

悪魔・・・と改めてシアンを恐ろしく思った斎鹿だった。

第三十話 用意周到な結婚計画？（後書き）

ありがとうございました。

第三十一話 マナーは大切

その部屋は天井が高く、長方形の見晴らしの良い構造で、2面が大きな窓に囲まれていた。天井には色彩豊かな絵画が描かれ、蔦をイメージしたと思われる白い色の真鍮部分が中心から先端にいくつも枝分かれし内側に丸まり、その上に18の白い花型ガラスが枝分かれした真鍮の上に乗っているシャンデリアが吊り下げられている。床には光り輝く磨かれた20?四方の白い大理石が敷き詰められ、壁には緑と花をイメージしたような美しい装飾がされている。

長方形の部屋の周りには、床近くまである白いテーブルクロスがされた丸いテーブルが部屋の中心を大きく空けるように置かれている。机の上には薔薇の花が生けてあり、その横には火が灯されていない大型のキャンドルスタンド。

部屋のテーブルはテーブルセッティングがされていなかったが、間隔の開けられたいくつものテーブルがすべてセッティングされれば、これ以上の豪華絢爛さはないと言える程のものとなるだろうことは予想が出来た。

斎鹿は他のテーブルにはない豪華な装飾のされた椅子に腰掛けていた。

サリルトやシアンも同じテーブルを囲んでおり、そのテーブルだけは中央に金の幅広のプレゼンテーションプレート、その右側にナイフとスプーン、左側にフォークが置かれていた。左上にはデザート・ナイフとパン用の皿とバターナイフが置かれ、右上にはグラスが置かれていた。

堅苦しいセッティングに戸惑った斎鹿だったが、それでも空腹には耐えられず見様見真似でナプキンを膝に置き今か今かと料理を待っている。

扉の開く音が響くと斎鹿はそちらに視線を向ける。

扉が開くとマゼンタの後ろからセバスチャンがカートを押しこち

らへと向かってくるのが見えた。カートの上には料理が載せられているようだ。クロシュで隠され見る事が出来ない。

「お待たせ致しました。」

セバスチャンとマゼンタがテーブルの近くへとくると歩みを止めて深く頭を下げた。

斎鹿がいよいよご飯と張り切っているのはサリルトにもシアンにも言うまでもなくわかつてはいたが、斎鹿がフォークとナイフを取り握るようにして持っているのを見たシアンはすつと小さく右手を上げた。

すると、マゼンタがカートの横につき屈むと下から紐を取り出し、セバスチャンはカートからは離れ斎鹿の椅子の後ろに立つ。マゼンタが斎鹿の元へと紐を持っていくとセバスチャンは斎鹿の横に移動し両手で斎鹿の両肩を椅子に押さえつけると、マゼンタがタイミングを見計らったかのように斎鹿の鎖骨のすぐ下あたりから紐を何重にも巻き椅子に縛り付けた。

斎鹿は椅子に深く座ることになり強制的に正しい姿勢となった。

「えっと・・・こっちでは身体を縛り付けてごはん食べんの？」

斎鹿は戸惑いながらサリルトやシアンの顔を見る。

シアンは右手を軽く上げ人差し指を立てると屈託のない笑顔が浮かべた。

「レッスン1、正しいマナーを学びましょう。」

公爵夫人ともなればマナーの必要なお料理を頂くことになりますので、今からアルファイオス家の恥とならないようきちんとした教養を身につけましょう。」

「いやいやいや、何で縛られてんのって？」

「安心してちょうだい。さっそく嫁いびりしてないから、むしろ歓迎よ。」

縛っているのは正しい姿勢を保つためよ。

椅子には深く腰を下ろして顔を近付けずに手を近付けてお料理を頂くの。」

シアンは男性が見たら一瞬で恋に落ちてしまいそうな笑顔を浮かべ首を可愛く傾けて言うが、斎鹿にはちつとも可愛く見えなかった。むしろ小憎たらしいくらいだ。

「それでは始めてちょうだい。」

斎鹿を縛った後、カートの脇に控えていたマゼンタとセバスチャンに向かいシアンが言い放つと2人は一礼しクロシュを開けた。

最初の料理は、生温かい豆のスープで白身魚のタルタルが添えられ、円筒形のガラスの容器に二層に別れていたものだった。

マゼンタがそれを3人のプレートの上に置き、セバスチャンがシアンとサリルトのグラスに赤紫色の飲み物を注いでいく。斎鹿のグラスには赤紫ではなくオレンジ色の飲み物だった。どうやらアルコールが入っていない物を斎鹿に注いでくれたらしい。

「では、いただきますよう。」

「いただきますっ！」

斎鹿はシアンの手を伸ばしたスプーンと同じスプーンを手に取って食べようとしたが、身体が押さえつけられているためにいつものように料理に手が出せなかった。

「ちょ、ちよつと、食べれないんですけどっ！」

「お行儀が悪いからよ。」

シアンは斎鹿の文句を子どもの戯言のように流すと素早く料理を食べ、サリルトも我関せずといった面持ちで料理を食べる。2人が食べ終わりサリルトが右手を軽く上げると料理のはいつていた容器がマゼンタとセバスチャンによって下げられた。

斎鹿は手もつけていなかったのだが何故か下げられてしまい困惑した表情を浮かべている。

「まだ食べてないんだけどっ!!」

「遅い。」

私と姉上より遅ければ共に下げる。」

「あんた達が早いのよっ!!」

「あら？」

これで早かったら後々大変よ？これもお勉強のうちだと思って頑張っ張って。」

食事をするのに努力は必要なのかと斎鹿は考えながら下げられていく皿を眺めていた。

無駄な抵抗は疲れるだけだとわかってはいたが、食事のこととなると諦めも悪くなる。

次こそは食べてやるという決意を抱いた斎鹿はスプーンを置き、ナイフとフォークを持って臨戦態勢をとる。

「ぜったい全部食べてやるっ!!」

この決意も虚しくデザートを食べ終わった斎鹿の腹は満腹には程遠いことをまだ斎鹿は知らない。

第三十一話 マナーは大切（後書き）

ありがとうございました。

第三十二話 敏腕家庭教師？

斎鹿の決意も虚しくメインの牛肉スライスとじゃがいものピューレ添えも三口程しか食べられなかったし、白身魚のムニエルをフォークで刺して食べようとしたがサリルトにフォークを取り上げられて一口も食べないまま皿を下げられてしまった。

斎鹿はサリルトをキツと睨みつけるがサリルトはそんな斎鹿を素知らぬ顔で食べ続けている。

そして、すべての料理が出た後も斎鹿の空腹の腹は満たされることはなく、シアンの一言でマナー講座兼昼食会は静かに終わりを告げた。

縄を外され椅子から解放された斎鹿は立ち上がると両手を組み合わせて頭より上にぐつと伸ばして大きく伸びをした。それと同時に首をぐるぐると回すと骨がなる音が大きく聞こえた。

ゆっくりと両手を下ろした斎鹿は右手を伸ばし人差し指をサリルトへと向けると眉を寄せて睨んだ。

「ちょっとあんたっ、何でさっき私の魚盗ったのよっ！」

「飢えたチモシーは可愛げがない。」

「誰がチモシーじゃいつ！」

斎鹿はサリルトの腹を目指し拳を撃ちこもうとするが、サリルトに頭を力強く掴まれて思い切り空振ってしまった。斎鹿は顔も上げられず必死に前へと体重をかけるが踵が高く上がるばかりでまったく進まない。

サリルトはそんな斎鹿の様子を愉快そうな笑みを浮かべて見てい

る。

「斎鹿ちゃん、フォークを突き刺して食べるのもワイルドで素敵だけど、お魚はフォークとナイフで一口ずつ頂くのがマナーなのよ。」

シアンは紙ナプキンの端をめくって内側部分を使い口元を拭くと、それを軽くたたみテーブルの上に置いた。

「姉上のおっしゃる通りだ。」

「このシスコン大王がつ！」

斎鹿は身体が前に傾きながら両腕を回すように何度も動かして攻撃を加えようとするがサリルトは余裕の表情だ。

「仲が良いのもいいけれど、時間もないことだし次のレッスンを始めるわよ。」

シアンはセバスチャンに椅子を引いてもらって立ち上がり、右手を腰にあて左手の人差し指を立てて顔の横に上げ首を左手の方に傾けると不敵な笑みを浮かべた。

その笑みに顔が引き攣ったサリルトは斎鹿の頭から手を離すと、全体重を前にかけていた斎鹿はそのままサリルトの胸へと不本意ながら飛び込んだ。

最早サリルトの胸に飛び込んでときめきはない。

鼻を撃ちつけた斎鹿は顔を離すと手で鼻を押さえた。痛さに鼻血が出ていないか手を離して確認するが手には血はついていない。どうやら鼻血の心配はないようだ。

「姉上、私も参加しなくてはいいけないのですか？」

私は婚姻の誓い等の礼儀作法も身に付けていますし、ダンスも問題ありません。」

「あら？2人の問題でしょう？

サリーちゃんが悪くても斎鹿ちゃんはダメダメなのだから2人で乗り越えなきゃね。」

「ダメダメって……。」

斎鹿はシアンの言葉に脱力すると乾いた笑みを浮かべた。

シアンは出口である扉へと歩いて向かうと後ろを振り向き、顔の少し下あたりで右手の指だけを合わせて動かし斎鹿とサリルトを呼び寄せる。

「早くいらつしゃい。

すでに準備は整っていてよ。」

斎鹿とサリルトは互いに顔を見合わせると何か通じ合ったのか頷き合い大きいため息を吐いた。それから2人はシアンに続くように扉の方へと向かう。

サリルトは顔だけ後ろに向けマゼンタと視線が合うと小さく頷く。マゼンタは主の頷きに頬笑むと深く礼をした。

それは何かの合図のようだったが傍で見ていた斎鹿は特に気に留めなかった。

扉を出た3人はシアンの先導の元、アルファイオス家で初めて通された応接室へと向かっていた。

昼食をとった部屋から応接室まではそれほど距離はなくすぐに扉の前に着くとシアンは扉に手を掛け手前に引いた。

右手で扉を抑えながら左手で後ろにいた2人を部屋へと招き入れ

るように促す。

2人はその手のままに部屋へと入るとその部屋はすっかり様変わりしていることに気付いた。

扉の正面の暖炉はあったが、家具は茶色を基調とした落ち着いた色ですべて整えられ中央に机と机の両側に長椅子が置かれているはずの部屋にはすべてがなく、まるで学生が座るような木材でできた2人掛けの長机と同じく木でできた背凭れと肘掛のある椅子が置かれ、長机と椅子は飴色の木で釘等はなくすべて組み上げ式で造られているようだった。

その前には扉と向き合うようにして置かれた移動式のキャスターのついた四方が茶色の板で囲われた大きな黒板、そのすぐ右側にはサイドテーブルが置かれていた。

サイドテーブルの上には分厚い本が4冊程重ねられており、その横には正方形の掌ほどの白い箱があった。その箱の横には黒板消しもきちんと言われている。

「齋鹿ちゃん、サリーちゃん、座って待っていてね。」

シアンは様変わりした部屋を見ていた齋鹿達に微笑みながらそう告げると扉をゆっくりと閉めた。

閉められた扉の音が部屋に響くと先に動いたのはサリートだった。サリートは、姉に言われた通り左の椅子に座ると足を組んで目を閉じ黙っていた。

齋鹿も渋々ながらサリートの隣の椅子へと腰掛けると上半身を前に倒して右頬を机につけて顔を横向けると自然とため息が出た。

齋賀は視線を上げサリートの顔をみると改めて整った顔立ちであることを認識する。かといって惚れることはないが保養にはなる。

しばらく2人は動かずにそのままにしていると後ろの扉が突然開き、2人は姿勢を正し、座ったまま振り向くとそこには衣装替えしたシアンが立っていた。

シアンはスタンドカラー風の襟と金色の釦がポイントの黒いツイードジャケットにふくらはぎまである落ち着いた黒のスカート、足には7?程あるヒールのY字のストラップシューズが履かれている。髪型は高く結い上げたポニーテールに今までかけられていなかった黒縁眼鏡をかけている。

手には持ち手の部分は黒く、先に行くほど細くなった棒の先には赤いキャップがはめられた銀の指し棒が持たれていた。

呆気にとられた2人は声もなく見詰めていると、シアンはゆっくりとした足取りで黒板の前へと歩いていく。

その姿はまるで敏腕家庭教師のようだった。

第三十二話 敏腕家庭教師？（後書き）

ありがとうございました。

第三十三話 逃げるが勝ち

シアンは黒板の前に立ち、左手で指し棒を持つと右手の掌に軽く打ちつけた。

「レッスン２、式の流れを学びましょう。

結婚式には決まった流れと手順があります。それをここで学ぶことで公爵夫人としての初めての仕事を成功させましょう。」

斎鹿は乾いた笑みを漏らしたが隣のサリルトはさらに重症らしい。ちらりとサリルトを見ると、口を歪め大きく目を見開いている。

「お姉さん、自由奔放過ぎですよ。

何ですか、女王さまプレイの次は家庭教師プレイですか？」

「斎鹿さん、お姉さんではなく先生とお呼びなさい。」

斎鹿は頬杖を突いてシアンを見上げる。

シアンは持っていた指し棒の先端を斎鹿へと向けて反対の手で眼鏡を上へと押し上げた。

「姉上、格好までかえる必要はあるのですか？」

シアンは指し棒を胸ポケットへとさしこんだ。

「サリルトさん、姉上ではなく先生です。

何事にも形から入る主義ですのお気になさらず。では、私語はそこまでにして授業を始めます。」

シアンは困惑している2人を置き去りにしてサイドテーブルに置かれた正方形の箱へと手を伸ばした。箱をスライドさせて開けると中には赤、白、青、黄色のチョークが収められていた。シアンはそこから白いチョークを取り出した。

そして、黒板の右端に『結婚式の流れと手順』と書いた。

シアンは斎鹿達の方へ向き変わり右手で眼鏡のブリッジを軽く押し上げた。

「新郎サリルトさん、新婦斎鹿さんは当日教会内で衣装等の準備をして頂きます。」

その後、ご来賓の方々がご着席頂いた後、サリルトさんは祭壇の前で新婦の入場を待ち、斎鹿さんはお父様代理と共に入場して頂きます。」

「せんせー、話し方が硬くなったのはなんでですかー？」

斎鹿は頬杖を突いたままやる気なく質問をする。

シアンはその様子に厳しい視線を向けると腕組みをした。

「斎鹿さん、質問があるときは挙手して下さい。」

「んじゃあ、はい。」

斎鹿は顔を上げて右肘をついたまま掌をシアンに向けた。

それを見たシアンは素早く斎鹿の前へと躍り出ると上げていた手を思い切り叩いた。

「はい、ダメっ！！」

「痛っ！！いったあー！」

パチンといういい音がした。

斎鹿は何をするんだとばかりにシアンを睨みつけたが、シアンの顔が斎鹿の顔の10?程のところまで近づき、あまりのシアンの氣迫に思わず怯んでしまう。

「そのだらけた態度がダメっ！世間をなめきつた視線がダメっ！やる氣のない顔がダメっ！全部ダメっ！！」

シアンの言葉に思わず仰け反り声を上げる。

「ひどっ！」

「いいこと！」

この貴族社会ではなめられたら終わりなのよっ！やられる前にやれ精神が必要なの！」

シアンは目尻を下げ心配そうな顔をして斎鹿の叩いた右手を両手で力強く握りしめる。

「私はね、斎鹿ちゃん、2人の幸せのために心を鬼にして授業をしているの。」

獅子は我が子を千尋の谷に突き落とすというでしょう？」

「私、お姉さんの子どもじゃないんで厳し・・・いったっ！」

斎鹿が話している途中でシアンは綺麗な冷たい笑みを浮かべながら骨が軋むほど右手を握りしめた。斎鹿は思わず痛みに呻き顔を引き攣らせた。

「揚げ足を取らないの。」

「う、ごめんなさい。」

「よろしい。」

では、以後気をつけるように。授業を続けます。」

シアンは冷静な敏腕家庭教師の顔に戻ると眼鏡を押し上げ斎鹿の右手を放し黒板の前へと踵を返した。

斎鹿はため息を吐き、隣に座るサリルトへと視線を向けた。

サリルトは斎鹿と目が合うと目を伏せ俯き加減に左右に首を振る。シアンは黒板に式の流れを大雑把に書くと向き直りサイドテーブルに向かうとチョークを置き指し棒へと持ち替えた。

「2人が祭壇の前に行った後、讃美歌斉唱、神父による聖書朗読と祈祷、誓約、指輪交換、結婚宣言、誓約書署名、祈祷、新郎新婦退場の流れで式は行われます。」

正直なところ話さず姿勢を正して立っていたら勝手に進んでいきますから、斎賀さんはサリルトさんに任せていたら大丈夫です。」

斎鹿は腕の付け根が右耳につくように手を上げた。

「はい、先生、質問です。」

「はい、斎鹿さん。」

「ぶつちやけ勝手に進んでいくなら勉強する必要はないですか？」

「斎鹿さん、必要はあります。」

誓いの言葉を覚えて、流れを大まかに理解することで失敗をなく

します。」

「誓いの言葉？」

斎鹿は軽く首を傾げる。

サリルトは腕組みをしたため息を吐くと斎鹿の質問に答えるように口を開いた。

「誓いの言葉、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓います。」

これを共に宣言すれば後は立っているだけでいい。」

「・・・・・・・・。」

斎鹿はサリルトの顔を凝視すると勢いよく手を上げてシアンを見詰めた。

シアンが斎鹿の方を見ると、斎鹿は左手を開いて横にすると右手をその下に縦につけて「」の字をつくった。

「タイムっ！！」

「あら？」

まだ始めて1時間も経ってなくてよ。」

「トイレ休憩を要求しますっ！」

シアンは右手を頬に添えて首を傾けて悩むと意を決したように頷いた。

「我慢もよくないものね。」

では、私は少し席を外しますから15分後に授業再開よ。」

シアンは眼鏡を外しサイドテーブルの上に指し棒と共に置くと部屋を出て行った。

部屋の中は静まりシアンのヒールの音が遠ざかって聞こえるのを待って斎鹿は勢いよく口を開いた。

「やっぱ結婚無理だわ！」

私、逃げるから！じゃあね！！」

斎鹿が勢いよく立ち上がったため椅子は大きな音を立てて倒れたが、それを気にすることなく窓に向かおうとする。

しかし、突然左手首をサリルトに掴まれ動くことが出来ない。

「ちょっと、時間ないんだから放してよっ！？」

「私も行く。」

「いやいやいや、来なくていいですから。
私ひとりがいいんですよ。」

サリルトは斎鹿の手首を放し窓まで行くと観音開きの窓を開け、窓枠に右足を上げて後ろを振り返ると斎鹿へと視線を移した。

「早く来い。」

「……………はいはい。」

斎鹿は諦めたようにサリルトの後を追うように窓へと駆けていった。

第三十三話 逃げるが勝ち（後書き）

ありがとうございました。

第三十四話 電話ボックス？

窓から飛び出したサリルトと斎鹿は広い庭園の中の一角にある、白と赤のバラが辺りに咲いたアサガオの蔭が絡まる白亜のアーチの前にやってきた。

斎鹿としては早く遠くに逃げたかったが、サリルトに先導されてアーチの前に連れてこられたのだ。

斎鹿はサリルトへと誰にも見つからないよう後ろから密やかな声で急ぎ立てる。

しかし、サリルトはその声を無視するようにアーチの右側の柱部分に右手をついてボソボソと小さな声で言っているが斎鹿にはよく聞き取れない。

サリルトが柱から手を放すとアーチの丁度真下に移動し向き返ると斎鹿へと右手を伸ばした。

怪訝そうな顔でその手を取るか躊躇った斎鹿だったが、この世界の常識は斎鹿の常識の範囲を超えるということがわかっていたので怖ず怖ずとサリルトの手に自分の手を重ねた。

すると、サリルトはその手を握り思い切り自分の方へと引っ張った。その反動で斎鹿は何度目かのサリルトの腕の中に閉じ込められる。

サリルトのもう片方の手が斎鹿の背中に回り引き寄せられると、何の変哲もなかった周囲が目も開けていられない程の光で満ち溢れた。そして、それと共にまるで高い鉄棒からぶら下がっているかのような身体が引っ張られるを感じた。

斎鹿はサリルトにしがみついて離れなかったが、上からもう大丈夫だという声がして恐る恐る目を開けるとそこはもう城下町だった。緑の並木に沿って洒落た邸宅が建ち並ぶ美しい城下町だった。

クラシカルな雰囲気を感じた家々の前には、木組みの屋台が真っ直ぐな石畳の道の両側を連ねている。屋台の屋根には光を僅かに反

射する色とりどりの布がかけられていた。

屋台には果物や野菜を売っている店や装飾品を扱っている店などその種類も多種多様だ。

白亜のアーチの真下にいたはずだった斎鹿とサリルトだったが、今は緑の並木の隣にある透明な2m30?程の長方形箱型居住空間内だった。

その箱の1m50?程のところにはダイヤル式の赤電話が置かれていた。

斎鹿は不思議そうに電話を詳しく見るが受話器やダイヤルは使い慣れた電話に間違いなかった。

サリルトは斎鹿を胸から放すと透明な扉を開けて斎鹿と手を繋いだまま外に出た。

斎鹿は引つ張られるようにその後を追いながらサリルトに疑問を尋ねた。

「ねえ、どうして電話ボックスがあるの!??」

サリルトは斎鹿の問いに答えないうままどんどんと石畳の道を進んでいく。

斎鹿は口を尖らせると同じ質問を先程よりも大きな声でサリルトへとぶつける。

「あれは電話ボックスというものではない。
箱型亜空間移動居住空間転送機・改だ。」

「長っ!」

斎鹿は後ろを振り返り改めて見るがどうみても電話ボックスだ。
箱型亜空間移動居住空間転送機・改という難しそうな機械には見えない。

10円を入れるとどこでも電話がかけられて、無料で119に緊急電話が入られるあの便利な文明の利器だ。

「あれは空間移動のための装置だ。」

「空間移動って・・・瞬間移動？」

「まあ、そういうものだな。」

AとBという地点があり、その2つの地点は離れている。AからBへ一瞬で空間移動をするためには地点Cを必ず通らなければならぬ。そして、このCを捻じ曲げることによってAからBへと一瞬で移動できるのだ。」

斎鹿はサリルトの説明を黙って聞いていたが、気の抜けた返事をする。とまあいいかと再び歩き出した。

斎鹿は探究心はあるが持続力が壊滅的でないのだ。

「それより手、放してよ。」

斎鹿はいまだに繋がれた手を揺らした。

「嫌だ。」

「何で!？」

「治安はいい方だが安心は出来ない。」

「何、心配してくれてんの？」

サリルトの真剣な瞳に、斎鹿はからかうように見詰めかえす。

「妻を心配しない夫はいない。」

サリルトの真摯な言葉に斎鹿は頬が熱くなるのを感じた。きっと赤くなっているだろう。

街を歩く人々も公爵とも知らずに甘い言葉をはくサリルトに向かい口笛を吹いたり言葉を掛けて煽る。

「ば、馬鹿じゃない！」

まだ妻じゃありませんから、心配はいりません！！」

斎鹿はそんな周囲の視線や言葉にさらに顔を赤くすると手を繋いだままこの場を去ろうとサリルトを引っ張った。

サリルトもそんな斎鹿の様子に気付いているのかさらに強く手を握ると斎鹿に引っ張られるようにして後をついていく。

平静を取り戻した頃、石畳の道を頬を赤く染めた斎鹿は辺りを見廻しながらサリルトと共にゆっくりと歩いていた。

初めてみる城下町に興奮気味の斎鹿は物珍しい気になった物を見つけてはそちらに行こうと動き出すので、サリルトは左手で斎鹿の右手を強く握った。

斎鹿は周囲に関心が向いたようで感嘆の声を上げたり、あれは何かと質問をするのに気が向いていった。サリルトは質問する斎鹿に1つ1つ簡単に丁寧な答えていく。

知らない間にサリルトは自然と穏やかな笑みを浮かべていた。

「あ、これ可愛い。」

斎鹿は軒を連ねる屋台の中の装飾品を取り扱っている店をのぞくと、ネックレスやアンクレットなどが置いてあり、斎鹿はその中の銀の細いチェーンに小さなビーズがいくつかちりばめられ、銀の5

弁花が3つ青い宝石に付けられたブレスレットを手に取っていた。

「お嬢さん、お目が高いねえ。」

そりゃ、滅多に手に入らない品物で……」

「いやあ、お金持ってないんで。」

店主の言葉を遮るように言うと斎鹿は手に取っていたものを元の場所に戻した。

「店主、いくらだ？」

サリルトは店主に尋ねると店主は嬉しそうに答えた。

店主の言い値を渡すとブレスレットをサリルトは受け取り斎鹿へと渡した。

「いいよ！」

「もう買ってしまった。」

私がしていたらおかしいだろう。」

「………」

サリルトは斎鹿の右手をとると、ブレスレットを手首へとつけた。

第三十四話 電話ボックス？（後書き）

ありがとうございました。

第三十五話 泣き黒子の青年

斎鹿は再び繋がれた手に視線を落とした。

視線に入るのは手だけではなく、右手首に巻かれたブレスレットが穏やかな太陽の日差しに照らされ煌めいているのが見えた。

ブレスレットを買った店を去り、サリルトはそれから一度も斎鹿を振り返らずに前を見据え歩いている。斎鹿は不覚ながら心臓の鼓動が速まっているのに気付いていた。

それは、初めてみる城下町に興奮している訳でもなく、ましてや逃げ出したことを悔やみ見つかりはしないか心配している訳でもない。

この鼓動の速まりは、前を歩く手を引いている男のせいだと。

斎鹿はわずかに後ろを歩いていたので、斜めにサリルトの顔を覗き見た。

サリルトは見詰められていることに気付き、首だけを動かして斎鹿へと視線を移した。

しかし、斎鹿は目が合った瞬間になぜか急に恥ずかしくなり視線を石畳の道へと落とした。

（これって・・・なんだろう？）

斎鹿が石畳の道をひたすら見詰めながら考えているとサリルトの歩みが突然止まった。

斎鹿はそれに気付き視線を上げ横を見ると、そこはオープンカフェだった。

外には3つのシンプルな丸い白いテーブルとその周りに白い椅子が4脚ずつ置かれ、テーブルの中心には大きな青いパラソルが備え付けられ影をつくるように開かれている。

店は白い壁に焦げ茶の太い柱の店で扉は開けっ放しにされており、

その扉の上には大きく店の名前の看板が書いてあるようだったが齋鹿にはやはり読めなかった。

3つのうち2つのテーブルはすでに客があり、1つのテーブルにはカップルと思われる男女が、もう1つのテーブルには15、6歳の少女3人が座って楽しそうに談笑していた。

サリルトはそのまま齋鹿の手を引き空いている1番端のテーブルへと向かった。そこまで着くと、繋いでいた手を放し椅子を後ろにわずかに下げて齋鹿に座るように促した。

少女3人組の席からひそひそとサリルトの容姿への褒め言葉が聞こえ、その紳士な行動に小さく興奮した悲鳴が上がる。

齋鹿はそちらを気にしながらも椅子へと腰掛けた。

「何か飲み物を買ってくる。

ここから動くなよ。」

「はいはい。」

「はいはいではなく・・・」

「はい、でしょ?」

サリルトは齋鹿の自分の言葉を遮るように言った言葉に、齋鹿の頭に軽く手を乗せてひと撫ですると店の中へと入っていった。どうやらこの店の中で注文するようだ。

齋鹿はサリルトに言われた通り大人しく待っていたが、少女3人組は今度は聞こえるようにわざと齋鹿への意地悪い言葉を言っているのが聞こえた。

しかし、そんなことにいちいち傷ついたりする程子どもではなく、我慢できる程大人でもない齋鹿は周囲を興味深げに見廻しながら聞き流していた。

すると、斎鹿が後ろを向いている間に前の椅子に誰かが座る気配がした。

サリルトが戻ってきたのだと思った斎鹿はすぐに前を向いたが、そこに座っていたのは茶髪の幼い顔をした目元に泣き黒子のある青年だった。

「なあ、1人なん？」

しかも関西弁。

「なあって？」

「・・・1人じゃない。」

斎鹿は躊躇ったが青年の問いに答えた。

青年は白い浴衣のような上着に腰に太い黒い帯をし、浴衣の襟からは黒い丸襟のシャツが覗いている。浴衣が地面よりわずかに上で止められ、真ん中から広がっている裾からは黒いゆとりのあるズボンが穿かれているのが見えた。靴は白いスニーカーで斎鹿と同じ種類のものだった。それに気付いた斎鹿は目を見開く。

「あんた、この世界の人ちゃうやろ？」

「あんたもなのっ!？」

「まあ、そやな。

俺も長いことここで暮らしとるけど、パーカー見たんは久しぶりや。」

「長いことって・・・。」

斎鹿は青年を凝視し、青年は愉快そうに笑った。

青年は突然ズボンのポケットから何かを探し始め、見つけたとばかりにそれをテーブルの上に置いた。青年が置いたものは皺がたくさんついた名刺だった。

この世界の言語で書かれているため読めはしなかったが、大きさと形状からそれがおそらく名刺であろうことは斎鹿にはわかった。

「俺はこれでもここに20の時から6年暮らしとる。

まあ、今日はあんたも連れがおるんやろ？」

また暇があつたらここに来て。話してもしよや。」

青年は立ち上がると右手を軽く上げると人混みに紛れて去ってしまい、斎鹿は慌てて椅子から立ち上りテーブルの名刺を掴むと青年の後を追いかけて人混みに入ってしまった。

店の中には外よりも多くの席があり、予想外にたくさんの客が列をつくり注文を待っていた。

今は公爵という身分のサリルトだが、まだ10代前半のころにはツナギと共に城下町に来ては何かと遊んでいた。遊びといっても悪い遊びではなく、時には正義の味方を名乗り悪事を働く人間を懲らしめたり、カード遊びをしたり、町にもたくさん友がいた。それらは公爵になった時から疎遠になってしまっただけだった。

そのため、貴族の公爵という立場でありながら町の行列や歩き方にも慣れていた。

サリルトがトウイートティーを2つ頼み、それをトレーに乗せ斎鹿の元へと向かうと、そこに斎鹿の姿はなかった。

テーブルにトレーを置き、周囲を見回すがどこにも姿はない。

「あの馬鹿はっ！！」

サリルトは鬼の形相で隣に座っていた少女3人組に齋鹿を知らないか尋ねると、3人はあまりの恐さに震えた声で齋鹿が青年についていったことを伝えた。

「どんな男だ。」

「え・・・あ、あの、変な格好の・・・右の目元に・・・小さな泣き黒子がありました。」

「どっちへ行った。」

「あの・・・あつちに・・・」

サリルトは少女が指さした方へとトレ―をそのままにして走った。

第三十五話 泣き黒子の青年（後書き）

ありがとうございました。

第三十六話 入教しません？

鞍馬 総一郎は短期大学の保育学科に通う青年だった。

その日は学祭の2日目で、総一郎のAクラスでは男女共に浴衣を着て喫茶店をする予定があり、総一郎も朝から白地の浴衣に黒い帯をして下駄を履き肩に黒いリュックを担いで歩いて学校へと向かっていた。総一郎の家から大学までは歩いて20分程度で行き来出来る距離にあつたので通学には困ったことはなかった。

普段は自転車通学の総一郎だったが、今日は浴衣を着ているため自転車を諦めて少し家を早く出たのだった。

総一郎は人通りの少ない通学路を歩き、ふっと横を向くと玉砂利が敷かれた短い参道があり、その両端には低い若木が控え目に根を張っていた。

それは2匹の狛犬が守る小さな神社だった。

その前に着くと赤い鳥居をくぐり、すぐ目の前にある社に一礼し賽銭を投げた。ご縁があるように5円を投げるのが総一郎の決まりごとだ。

そして、もう一度礼をすると賽銭箱の後ろへとまわり、社の格子戸に手を掛けゆつくりと開ける。

社の中は166?の総一郎が1人入れる程度の大きさで、目の前の神棚には赤い敷物の上に軍扇型の白い扇が納められていた。

総一郎は下駄を脱いで揃えたと神棚に向かい板間の上に正座をし、片手ずつ円を描くように2回打ち鳴らし手を合わせる。

「今日もお願いします。」

言い終わると総一郎は扇へと手を伸ばし広げると、その扇は鉄扇で持つもずしりと重さを感じた。そして、それを再び敷物の上に置いた。

親骨は白い鉄で出来ており小骨は竹を白く塗ったものが使われていた。扇面も白い紙が貼られ、親骨の骨を止める金具だけが黒く光っていた。

「はぁ・・・あなたの傍は楽でええわ。」

総一郎は正座をしたまま両手を後ろにつくと首を回して息を吐いた。

鞍馬 総一郎は、一般的に言えば変わっている青年だった。

彼は幼い頃から俗にいう『霊』的なものが見えていることが自慢だった。それを怖いと思うこともあったが、周りが見えていないことを幼いうちに悟るとそれは劣等感から優越感へと変わった。

総一郎はそのことを聞かれれば話すし、全員という訳ではないが周りもそのことを受け入れて総一郎との交友関係を深めている。

けれど、それは良いものも悪いものも時間を関係なくやってくるので、彼は人にはわからない苦労も多かった。

自慢ではあったが毎日のように『霊』的なものと関わり合っていると、さすがに疲れも溜まる。時には1人になりたいと思うことは年頃なら当たり前の主張だろう。

この鉄扇に出会ったのはそんな時だった。

大学の通学路として1年前たまたま通りかかった社の近く、特に扇の傍では清められるように身体も心も安らかになった。それからというもの人が集まる体育祭や学祭などのイベントがある前にここに来ては清めていくことが決め事となった。

「ありがとうございました。」

またお供え持ってきます。」

いつものように再び姿勢を正して手を合わせて礼をして立ち去る

うと腰を上げた時、扇は眩しい光を放ち、総一郎は手で目を覆った。身体が光に吸い込まれるような感覚に襲われ、必死に踏ん張るが光はさらに増すばかりだ。ついに耐えきれずそのまま総一郎は光へと吸い込まれ、その場に残されたのは総一郎の下駄だけだった。

そして、神棚に置かれていたはずの白い鉄扇もまた消えていた。

冷たい床の上で目を覚ました総一郎は、仰向けに寝ていたが上半身だけを起き上がらせて周囲を見廻した。傍には黒いリュックと白い鉄扇が落ちており、総一郎はリュックを肩に担ぎ、鉄扇を右手で握りしめた。

調べるように部屋をみると、総一郎がいるが場所は部屋の中でも高い場所にあることがわかった。ゆつくりと立ち上がり左手で左側頭部を押さえ、端まで行くとすぐ下には30段程の階段があり、総一郎のいる檀上の天井からはいくつもの白い布が垂れて視界を狭めていた。白い布は端の柱に緩く纏められているようだ。

檀上も階段もその下の床もすべてが白い石で出来ており、どうやら飛ばされた際に硬い床で身体を打ったのか節々が痛かった。

総一郎が向き返ると後ろには大きな区切りのない窓があり、そこからは瞬く多くの星が見えた。

「何や、これ？ドッキリか？

それとも・・・あの世か？」

総一郎は普段から目に見えるものだけを見ている訳ではなかった。で色々なことに寛容な性格だったが、白い光の中に吸い込まれた経験はなく辺りを見回すが人の影も形もない。

意を決したように長い階段へと足を進め、そこから見える外へ続

いているだろう白い天井まで届く程大きな扉を目指した。

総一郎が階段の中腹まで来た時、目標としていた扉が大きな音を立てて開いた。

真ん中から左右に開かれた扉からは、上から下まで白い格好の間10数名が神妙な様子で列を成して部屋へと入ってきた。

先頭の2名は銀の真鍮リングがついた頭が鉤爪の形をした白い1m程の杖を持っていた。

「えっ！？何なん！

まさかの変な宗教なんっ！？」

総一郎が啞然としたように声を上げると、その声に気付いた白い格好をした数名が大声を上げたり両手で口元を覆ったりと突然騒がしくなった。

そして、1人が敬うように床に平伏すと2人、3人と涙を流しながら平伏していった。総一郎はその様子に驚き階段を一段抜かしで降りて彼等に駆け寄った。

「ちょ、ちよつと、何か変な登場したけど、俺、神様とちゃうで！ほんま悪いけど勘違いやでっ！！」

総一郎は手を左右に振り説得するが、彼等は額を床につけて誰も話そうとはしなかった。

「なあ、何か言うて。

俺、1人で必死になって阿呆みたいやん。」

総一郎がため息を吐くと、まだ年若い青年が意を決したように顔を上げた。

その目には溢れんばかりの涙が溜まっている。

「ようこそお越し下さいました。
我らはあなた様のお越しを一日千秋の思いでお待ち申し上げておりました。」

「せっかく待つてもらって悪いんやけど、帰ってもええかな？
入教する気あらへんのやわ。」

「あなた様のお越しを待っている者がたくさんおりますのでどうぞこちらへ。」

「・・・いや、入教する気あらへんのやわ。」

「おみ足が・・・すぐに新しい履物を用意させます。」

「話聞いてくださいっ!!」

「さ、皆の者、早く宴の用意を。」

「だから、話を聞いてくださいっ！
入教しませんからっ!!」

第三十六話 入教しません？（後書き）

ありがとうございました。

第三十七話 怒り心頭的美青年

斎鹿が総一郎の後を追っていった後、総一郎が一軒の店に入るのを見た斎鹿は窓際の席に座る総一郎を確認すると、その前の空いている席へと座り、先程渡された名刺をテーブルに叩きつけた。斎鹿は口を尖らせ責めくように事情の説明を総一郎に求めた。

総一郎は突然現れた斎鹿に目を丸くし口を開けて啞然としたが斎鹿の憤りの激しさに

落ち着くように手を左右に振り制し、ため息交じりでこの世界にきた経緯を話した。

そして、その話を全部聞き終えたのは斎鹿が追いかけしてから20分後のことだった。

「で、この世界に強制的に馴染まされてしもたんやわ。

こっちの人間は全然話聞かんからえらい目におうたなあ。」

総一郎は頬杖をつき目を細めて含み笑いをした。

先程まで憤っていた斎鹿だったが総一郎の話を聞くうちに自分と同じような境遇を味わった彼に親しみを感じていた。

「そう!!」

何であんなにこっちの話を聞かない訳？」

斎鹿は煉瓦の壁と青い屋根の店内の一角でテーブルに身を乗り出すように総一郎の話を相槌を打ち、総一郎は身振り手振りで斎鹿へと表情豊かに語った。

横の窓からは暖かな日差しが差し込み、テーブルに置かれた2つのグラスはカランと氷が音をたてた。

「そりゃ、災難やったなあ。」

あんた、えらい豪気な気性の子やで断ったらええやろ？」

総一郎は大きな声で周りを気にせずに笑う。

その顔を見た斎鹿は頬を膨らませ、口を尖らせると右肘を机につき頬杖をつくと窓の外の景色を見た。

外には整備された広い川と緑が敷き詰められた河岸、土手には花が間隔をあげながら植わっている。その周囲には散歩をしている老人や恋人同士等の多くの人が心地の良い日差しと豊かな風景に心を癒されているようだった。

「それがねえ……。」

言いたいことは言ってるんだけど聞き入れてもらえないのよ。

ってか、そういうあなたはどんなのよ？」

「俺はなあ、もう6年も反抗して聞き入れてもらえんだから諦めもあるわ。」

こっちからあっちへ戻る手段がわかってる訳やないし、こっちでも仕事があるしな。」

「仕事してんの？」

「一応……強制的やけどせん訳にはいかんやろ。」

総一郎はコップの取っ手へと右手を伸ばし、話し続けてすっかり乾いていた喉を冷たい水を飲み潤した。一息に飲み乾した後、総一郎は左手を軽く上げ接客をしていた店員に水のおかわりを求めた。

「どんな仕事してんの？」

戸籍とかは？元の世界に戻る方法とかないの？」

「おいおい、そんな矢継ぎ早に質問せんでも……。」

斎鹿は頬杖をついていた手をテーブルに置き前のめりで総一郎に尋ねたが、総一郎はその笑顔を崩さずに頭を掻いた。

「戸籍は知らん間に何とかなってたんや。

多分……あいつがどうにかしたんちゃうかと思ってんのやけどな。」

「あいつ？」

斎鹿は総一郎の言葉に首を傾けた。

そんな斎鹿の様子に総一郎は窓の外を遠い目で見つめた。

「あいつってのは、ほれ、さっき話した話を聞かんだ男や。

あいつは目的のためなら手段を選ばん男やでなあ。戸籍ぐらい簡単に作ってしまうで。」

総一郎は心底嫌そうな顔をする大きくため息を吐き両手で顔を覆った。

斎鹿はそんな様子に目を丸くするとコップの取っ手に右手を伸ばし左手をコップの底に添えた。

「ねえ、私もあなたの働いてる所で一緒に働かせてもらえない？今のところからは離れたいのよね。私、何だっけするし！」

斎鹿は思いついたように明るい声で言うと、総一郎は覆っていた手をゆっくりと下ろしてテーブルの上へとコップを挟むように置い

た。

「あんたもしんどいやろおけどあそこも相当しんどいで。

朝は早いし、礼拝あるし、やること制限されるし、休みは滅多にないし、教育係は最悪無慈悲や。明日も朝から仕事いれられとるしなあ。

それに、あんた、今日連れがおったんちゃうんか？その人ところで暮らしとんのやろ。

勝手に決めてええんか？」

持っていたカップをゆつくりと下に置き、斎鹿が総一郎の言葉に思い出したように目を見開くと、しばし沈黙し固まっていると総一郎は右手を斎鹿の目の前で左右に振った。

「おい、大丈夫か？」

「わ、忘れてたあっ！！」

あいつ、店に置いてきたあっ！！」

「そりゃ、相手怒ってるやろな。」

「で、ですよねえ……。」

斎鹿は両手で頭を抱え、首を左右に激しく振るとポニーテールにされた長い髪がさらさらと揺れた。総一郎は斎鹿の激しい動揺に頬杖について眺めていると、店員が近寄り総一郎と斎鹿へ礼をする。と両方のコップへと水を注いだ。それを見た総一郎は店員に笑顔で感謝の言葉をかけた。そして店員は再び礼をして席から離れていった。

総一郎が店員の後ろ姿を見ていると出入口の扉から長身の美青

年が入ってくるのが見えた。美青年は入り口で立ち止まり店内の客をすばやく見廻している。

「かつこええ兄ちゃんやなあ。」

総一郎が小さく呟き青年に見入っていると美青年が丁度総一郎の方へと向いた。

美青年と目が合い総一郎は思わず会釈をしてしまった。

美青年は会釈も返さずに隣で頭を抱えている斎鹿に視線をやると、突然眉を寄せて大股で総一郎達の元へと歩いてくる。

席までやって来た美青年は斎鹿の後ろに立つとその大きな右手で斎鹿の頭をがっちりと掴み下へと押した。青年の突然の攻撃に斎鹿はテーブルに思い切り顔をぶつけてしまった。

「この馬鹿娘がつ！」

私をどれだけ走らせれば気が済むのだっ！！」

「いったあ。」

何すんのよっ！」

顔を上げた斎鹿は右手で顔を撫でると勢いよく振り向き、押さえつけた相手を睨みつけてやろうと目に力を込める。

しかし、後ろを振り向くと怒り心頭の美青年サリルトの顔の方が何倍も怖かった。

第三十七話 怒り心頭的美青年（後書き）

ありがとうございました。

第三十八話　口づけは檸檬味？

「この度は連れが大変ご迷惑をおかけしましたことお詫び申し上げます。」

「あ・・・いや、こちらこそ。」

「何かあの馬鹿に不手際がありましたらここまでお越し下さい。お礼とお詫びをさせて頂きます。それでは、今日は失礼いたします。」

総一郎は無表情のサリルトの冷たく鋭い視線と低い声に、口元を引き攣らせたどたどしく言葉を返すことしか出来なかった。

サリルトは総一郎を一瞥し、テーブルに金貨を一枚置くと座っている斎鹿のパーカーの帽子を猫の子のように掴むとそのまま立たせるように引き上げた。

「げえつ。」

斎鹿は勢いよく首が服で締め付けられ蛙のような声を出し、手をばたつかせ抵抗をしたがサリルトは気にせず斎鹿を出口へと引っ張っていく。

サリルトが強引に引っ張るので後ろ向きになり千鳥足のようにふらふらと歩くしかない斎鹿は総一郎へと視線を移し、苦笑いを浮かべて右手を上げ小さく振った。

総一郎もそれに応えるように右手を軽く上げ笑顔を浮かべ頷くと、斎鹿は両手の掌を合わせて総一郎へと許しを請うた。

そして、その後すぐに店から斎鹿とサリルトの姿は見えなくなった。

総一郎は見えなくなるのを確認すると、斎鹿の水が残っているコップの取っ手へと手を伸ばすそのまま一気に口へと運んだ。

口元に笑みを浮かべると先程のサリルトの顔を思い出す。

「案外普通の男やったなあ、アルファイオス公爵。」

持っていたコップを自分のコップの隣へと置くと、窓の外を見るように頬杖をつき意味深な笑みを浮かべていた。

店内の客の話し声や料理の皿にナイフやフォークが当たる音が騒がしく響く中、ガタツと椅子をひく音が総一郎の背中から聞こえた。

「あなたがあのお嬢さんにちょっかいを出したからでは？」

結婚前に花嫁を誘惑しようだなんて、そんな子に育てた覚えはありませんよ。」

「お前に育てられた憶えないわ！」

そもそも何でお前がおんねんっ！」

総一郎は腰を捻り後ろを向くと、椅子の背もたれに手を置いて170? 前後の男が総一郎を見下ろして立っていた。男は色素の薄い茶色の髪を白い紐で顔の横で束ね、紺色の燕尾服とズボン、薄紅色のベストを着用し、白いウィングカラーのシャツと黒い赤紫色のネクタイをして足には黒い紐革靴を履き銀縁の眼鏡をかけた上品な紳士だった。

「あなたが勝手にいなくなったからですよ。」

いつもなら部屋で寝て終わりなのに、心配して後をつけても仕方がないでしょう。

どうなさったのです？」

「さらつと後をつけるとか言っなやつ！ ストーカーかつ、お前は！俺だって年頃なんやから色々あんねん、い・ろ・い・ろ！」

男は椅子をテーブルの下に戻すと右手で拳をつくり、扉をノックするように総一郎の数回頭を叩いた。

「何をしてもいいですが、軽い頭をもう少し重くしてからにして下さい。」

まあ、最悪無慈悲の教育係の言うことは聞かないと思いますが。」

男はそのまま出入り口の扉へと歩き出し途中で擦れ違った店員に代金とチップを渡した。

総一郎はそのまま男が出ていくのを眺めていたが、大きくため息を吐くと立ち上がり金貨を一瞥し大股で店を出ていった。

斎鹿の服を掴んで引つ張っていたサリルトは、出た店からすぐ近くの店と店の間の細い路地に入り込んだ。サリルトは斎鹿の顔の両脇に手を置き逃げられないようにすると、冷たい目で斎鹿を見下ろした。

「お、怒ってんの？」

「怒っていないと思ってるのか。」

何だ、あの男は？」

サリルトは斎鹿の顔に自分の顔を近付けて詰め寄るが、斎鹿はサリルトの整った顔に耐性も出来ているので動揺はしなかったが、やはりいい気はしない。

斎鹿は両手でサリルトの胸を思い切り押すとサリルトから逃れるように顔を背けた。

「総一郎は私と一緒にで向こうから来た人なんだって言うてから話したいと思うじゃない！」

「だ、だから・・・」

斎鹿は怒りを抑えられていないサリルトの顔にだんだんと声が小さくなっていくのを感じていた。サリルトは斎鹿の『ソウイチロウ』という言葉にさらに眉をしかめる。

「なぜだ。」

「何がっ!？」

サリルトは胸の奥に何かが引つ掛かっているように感じていた。それが何なのかはサリルトにはわからなかったが、その胸の引つ掛かりは斎鹿の言動が原因であることははっきりと理解していた。

「なぜ、あいつは名で呼ぶ。」

「私はまだ呼ばれたことがない。」

「なんであんたの名前を私が呼ばないといけないのよ!」

「私たちは夫婦だ。」

「名前で呼ばなければおかしいだろ。」

「認めてませんからっ!」

「名を呼べ。」

「いーやっ!」

サリルトは右手で斎鹿の顎を掴むと力任せに前を向かせ、横を向いていた斎鹿の目は強制的にサリルトと目を合わせる事になった。しばらく見つめ合っていた2人だったが、サリルトがだんだんと顔を斎鹿へと近付いてくる。斎鹿は嫌な予感を察知し、サリルトの腕の間から何とか逃げようとするが逃げられない。

「ちょっと！変態、馬鹿、馬鹿、変態！！」

斎鹿は悪態をつきながら両手でサリルトの両頬を挟んで押し退けようとするが、サリルトも負けずに顔を近付けようとする。

「名を呼べ。」

「呼んだらやめてくれんの！？」

サリルト、サリーちゃん、サリルトさーん！！」

サリルトは目を見開き近付けようとしていた動きを止めた。

斎鹿がサリルトと名前を呼ぶのを聞いた途端、胸の奥の引っ掛かりから解放されたような気がした。サリルトは気付かぬうちにその無愛想と呼ばれる顔に、まだぎこちない笑みではあったが笑顔を浮かべていた。

斎鹿が安堵のため息を吐いて文句のひとつでも言つてやろうと上を向いた時、口に柔らかな感触を感じた。思いがけないことに思考が停止した斎鹿がされるがままなっていると、サリルトは斎鹿の両肩に手を置き引き寄せると口の中を侵略した。サリルトはさらに貪るように深い口づけを続ける。

それが斎鹿にとってファーストキスだった。

第三十八話　ロづけは檸檬味？（後書き）

ありがとうございました。

第三十九話 自己満足の虫除け

サリルトは斎鹿の肩から頬へと両手で身体を撫でるように移動させると、逃れようとする斎鹿の顔を拒めないように固定した。

尚も逃れようと手でサリルトの胸を叩くが効果はないように思えたが、サリルトは目を細め斎鹿から顔をわずかに離れた。

斎鹿は鼻で息をすることが分からなかったのか、呼吸を荒くして背後にある冷たい壁にもたれかかった。そのまま膝は体重を支えられずに力が抜け崩れ落ちそうになるが、すんでのところでサリルトが斎鹿の手を掴み自身の胸へともたれかけさせ、腰と背中に手をまわし抱きしめる。

斎鹿はサリルトの胸に頬を押しつけ目を潤ませ、湿った唇からは甘く、荒い呼吸がとめどなく吐かれている。

「どうした？随分と辛そうだが？」

サリルトは不敵な笑みを浮かべ斎鹿を見下ろすと、腰にまわしていた片手を斎鹿のパーカーの裾から忍び入れ背中に楕円を描くように撫でた。

斎鹿はビクツと身体を震わせると胸から顔を上げ、上目使いでサリルトを睨みつけた。

その斎鹿の表情を見るなり胸の奥が痺れ、もつとその顔が見たいとサリルトは思った。

斎鹿はサリルトの手を追い出そうと手を掴むが、後ろ手にサリルトの手を掴んでいるため動きを止めようにも力が入らない。

「変態！触らないで！」

「口が減らないな。」

サリルトは腰を曲げて斎鹿の耳元へと口を近付け、ふっと息を吹きこむと囁いた。

「先程の顔は大層可愛らしかったが・・・。」

サリルトは背中に入れている手とは違う手で斎鹿の顎に手をかけるとそのまま斎鹿の口を再び塞いだ。わずかに開けられていた斎鹿の口から口内にサリルトの舌が入り込み、斎鹿はそのくすぐったいような何とも言えない感触に塞がれたまま胸を両手で叩き声を上げる。

「むう。やあ！」

サリルトは斎鹿の抵抗を無視し背中に入っている手をさらに動かしていたが、その手をパーカーから出し斎鹿の頬へと添えた。顎にかけていた手を離し、再び背中へとまわす。

サリルトは斎鹿を開放し息を荒げている斎鹿の首元へと顔を埋め、手で襟の部分を横に引っ張ると斎鹿の鎖骨が露わになった。

サリルトは埋めた首元を強く吸い、斎鹿はちくりとした痛みで声を上げた。

「うきやん！」

斎鹿は悲鳴のような声を短く上げると頬を赤く染めた。

「な、何すんのよっ！」

「虫除けだ。」

サリルトは斎鹿の首元から顔を上げ、斎鹿を再び胸に抱きしめた。斎鹿は逃げ出したい気持ちだったが、膝はいまだに力が入らずされるがままだ。

「虫なんていないわよ。」

斎鹿が不貞腐れたように言う。

「虫は気付かなくても寄り付く。

私の自己満足だ。気にすることはない。」

「気にするってのっ！

なんでキスすんの！？なんでっ・・・」

斎鹿は悔しいが敵の胸の中で涙を浮かべた。けれどサリルトには涙を見せたくなかった。

サリルトの胸に顔を押し付けて齒を食いしばった。

サリルトは斎鹿の頭を撫でると、斎鹿の髪に手を絡める。

「なぜ・・・か。

お前がいなくなった時、見知らぬ男と話をしていた時、名前を呼ばれた時、訳のわからない感情がお前を私の許に繋ぎ留めたいと思わせた。だから、キスした。」

斎鹿は驚きに涙も止まり赤くなった目でサリルトを見上げ、サリルトも斎鹿を真剣な目で見詰めている。

「なんじゃそらっ！！」

怒りを堪え切れない斎鹿はサリルトの胸に両手をつき自分の身体

を離す。

サリルトをひと睨みすると路地裏から抜け出すようにふらふらと歩き出した。サリルトの呼び止める声も無視し、人混みに紛れるように明るい方へと歩いていく。

サリルトは斎鹿の左手首を掴み強引に引き止める。

「何を怒っている。」

「何を怒っている？」

私のファ、ファーストキスだったのよ！それを欲求不満解消の道具にしやがって！」

「言葉が悪い。」

サリルトは斎鹿の横に並ぶと腰へと手をまわした。

「まだ不安定な足取りだ。気をつける。」

斎鹿は拒もうと腰にまわしたサリルトの手を叩いたが、サリルトは気にすることなくそのまま店が立ち並ぶ石畳の道を歩き出した。

「ちょっと！やめてよ！」

「やめない。」

それよりも何か土産を買って帰るか？」

それまで手を外させようとむくれていた斎鹿だったが、サリルトの発言に一気に意識が土産にいったようだ。

「えっ！いいの！？」

「ああ。」

「じゃあ、サリイにお土産買っていつてあげなきゃ。
でも、許した訳じゃないからね！」

斎鹿は上目使いで睨みつけると、サリルトは片方の口角を上げた。

第三十九話 自己満足の虫除け（後書き）

ありがとうございました。

第四十話 さあ、呼び名はどれがいい？

そこは8畳ほどのレトロな店だった。

サリイへの土産物を捜し石畳の道をしばらく歩いた斎鹿とサリルトだったが、斎鹿が店の前に出されたハンドルのついたシンプルなバックに興味を示しその店に入ることになったのだ。

その店はナチュラルで可愛いバック類や雑貨などを扱っているようだった。

「ねえ、このバックどう思う？」

斎鹿が手にとってサリルトへと見せたのは、肩掛け出来る濃茶のベルトのついた角の丸い四角い白いバックだった。バックはキャンバス地で外側には大きなポケットが1つ、底部分には型崩れがし難いように平らになっている。

斎鹿はそれを右掛けにかけると左の腰骨辺りにきたバックの止めてあったマグネットを外し中をこそこそと探索している。

「これ、結構いいかも。」

内側も小さなポケットついてるし、底は真っ直ぐになってるし、大きいし。」

サリルトにはわかっていた。

彼女は「どう思う？」とは聞いてはいるが自分の意見など求めていないことを。

ここで「それでいいんじゃないか」や「どうだろう」の言葉を言えばそれこそ斎鹿が反発することは間違いない。

女性遍歴を重ねるだけ重ねてきたサリルトだけに、今は斎鹿の斜め後ろでバックを探っている斎鹿を黙って見ていることしか出来ない。

いのだ。

「これにしようかな……。」

斎鹿は後ろにいるサリルトへ上目使いでそつと見上げる。

サリルトは黙って自身の胸元へと手を入れると金貨を1枚取り出した。

「これで足りるだろう。」

「絶対ぜったーいお金は返すからっ。」

両手を合わせ皿のようにして金貨を受け取った斎鹿は眉間に皺を寄せて唇を尖らせて不満そうな顔だ。斎鹿の顔を見たサリルトは片方の口角を上げると斎鹿の額を軽く押した。

「払ってこい。」

サリルトの言葉を素直に聞いた斎鹿は店内に入りカウンターにいる老婆へとバックと金貨を1枚渡した。老婆は笑顔で代金を受け取り、お釣りの銀貨5枚と銅貨を7枚を斎鹿に手渡した。

老婆が斎鹿に何かを言っていたようだが、斎鹿はバックに手を掛けそのまま右掛けにかけると軽く頭を下げてお礼をいった。

斎鹿は店外へと出るとサリルトに頭を下げた。

「ありがとう。」

サリルトは目を丸くする。

「……随分としおらしい。」

「あんたには色々世話になってるし、お金も借りてるからお礼しないね。」

サリルトは斎鹿の頭に片手を置き2度軽く弾ませると髪をぐしゃぐしゃに撫でまわした。なぜだかそうせずにはいらなかった。2人の間に甘い雰囲気の流れる。

「礼というならあんたではなく名前で呼んでくれ。」

「いや、それは無理。」

甘い雰囲気は一瞬にして終わった。

サリルトが吼える。

「なぜだ!?!」

「だって、サリイと名前かぶってるし。サリルトって言い難いもん。」

「ならば、私の呼び名を斎鹿が決めればいい。それならばいいだろう。」

「礼がしたいというならばそれがいい。」

斎鹿はサリルトの言葉に肩掛けのベルトを両手で擦りながら口を尖らせ考える。

別に害もないかと結論に至ったところでサリルトへと頷いた。

「じゃ、変態。」

斎鹿は邪気のない満面の笑顔だ。

「・・・それはだめだ。」

「えっ！

変態はあんたの代名詞じゃないっ！？」

「なぜだっ！」

「じゃ、ち」

「痴漢でもないっ！！」

「何なのよっ！

私が決めていいんじゃないの！？」

サリルトは斎鹿の頭に乗せていた手を下ろし、頭が痛む自身の額を押さえた。

斎鹿はそんな様子を不貞腐れた顔で見上げている。

「頼むから、もう少し考えてくれ。」

斎鹿はその言葉に空を見上げて考えた。

小声で何か呟いている。

「うーん。

サリイはいるから、残りはルト。」

斎鹿は突然手を打って思い付いたと顔を輝かせた。
しかし、サリルトは不安を隠せない。

「よしっ！！」

ルト、ルー、トオル、ルウト、さあ、どれがいい？」

「・・・まともだ。」

意外にもまともな案にサリルトは目を丸くした。

第四十話 さあ、呼び名はどれがいい？（後書き）

あけましておめでとうございます。

今年もよろしくお願い致します。

ありがとうございます。

第四十一話 日が暮れて

家庭教師が部屋に戻った時には教え子2人は消えていた。

いや、『消えていた』のではなく、『逃げていた』が正しい。

長年結婚をしたくないと言っていた弟がついに運命の女性と出会い、結婚したいと言い出したのはまだ昨日と記憶に新しい。そんな2人のために、姉として出来ることを考え異世界から来た彼女のために礼儀作法を教えようと家庭教師として厳しく接した。

しかし、弟夫婦（仮）には姉の愛は伝わらなかったようだ。

「困ったちゃんねえ。」

シアンは生徒用の椅子に腰掛け、右手の親指と中指を擦り合わせてパチンと音を立てた。

扉が開きセバスチャンが頭を下げた。

「御用でしょうか。」

「この部屋を元に戻してちょうだい。」

せっかくのお部屋だったけれど生徒が消えてしまっただけでは使えないわ。」

やれやれとシアンは立ち上がりため息を吐いた。

「かしこまりました。」

セバスチャンは深く頭を下げ、目を細めて穏やかな顔に笑顔を浮かべた。

シアンは自分も着替えようとその場から離れようとした時、何か

柔らかいものを足で蹴ってしまったことに気付き不思議そうに視線を下げる。

すると、そこには危ない足取りながらも懸命にここまで歩いてきたのだろっサリイが腹を上に向けて足をばたつかせている。

「ごめんなさいね、サリイ。」

シアンがサリイを抱き上げて腕に抱き、その小さな頭を撫でるとサリイは気持ち良さそうに目を細めた。

サリイは斎鹿と一緒に昼食を取ろうと頭の上に乗っていたが、昼食会が始まる前に斎鹿の採寸をしたポニーテールのメイドが餌を与えるために別室へと連れて行ったのだった。

それからメイドの報告によると籠の中で丸くなって寝ていたはずだが、どうやら斎鹿を捜して危ない足取りでここまでできてしまったようだ。

「サリイ、斎鹿ちゃんは今いないのよ。」

サリイはきょとんとして顔で首を傾げる。

その仕草は愛好家がいるのが頷ける程愛らしい。

「一緒に待っていきましょうね。」

シアンの言葉は何の鋭さも持っていないにも関わらず、その目は獲物を待ちわびるように楽しそうに鋭く光っていた。

買い物をし終えた斎鹿達は太陽の光がわずかに赤みを帯びた頃になつてやつとダイヤル式の赤電話こと箱型亜空間移動居住空間転送機・改のある場所へと向かつていた。

そんなに離れたつもりはなかった2人だったが存外にもかなりの距離を歩いていたらしい。辺りには帰り道を急ぐ大勢の人や片付けを始める店が多くなつてきていた。

右手首に巻かれたブレスレットが赤い太陽に照らされ煌めいている。

「日が落ちる前には戻れるだろう。」

「もう帰るの？」

「治安も完全にいいとはい切れなない。」

それに……。」

「それに？」

「姉上がこれ以上は黙っていないだろう。」

斎鹿は片手で持っていた肩掛けバックのベルトをぎゅと握った。

そして、背中に何かわからない冷やりとしたものがあてられたような感覚に襲われた。

「恐ろしいっ。」

「逃げただけでもご立腹だろう。帰ったらご機嫌取りが先決だ。」

サリルトは片手を顎にあてると考えたような顔をしてまだシアン

を想像して身ぶるいしている斎鹿を振り返った。しかし、その顔を見るなり諦めたようなため息を吐き再び前を向いた。

「何か手があるの？」

「・・・ないことはないが。」

サリルトは言い難そうに視線を彷徨わせ言い淀んだ。

「何よ？」

「嫌だとは思うが・・・。」

「はつきり言えいいじゃんつ。」

「では、はつきりと言うが・・・私たちが仲睦まじくしていればいい。」

「嫌っ!!！」

斎鹿は大声を上げはつきりとサリルトに反論した。

サリルトはその斎鹿の態度に思わず俯いてため息を吐く。

今まで無愛想と周囲に言われてきたが斎鹿の前では感情をつい表に出してしまう。

それはサリルトにとって考えられないことだった。

彼は側近として王に仕えているが周囲には悪意が満ちている。隙を見せればそれは国の危機へと繋がってしまうことをサリルトはわかっていた。だからこそ感情を抑え何事にも冷静に行動せねばと自分に言い聞かせてきたのだ。

サリルトは感情を表に出している自分を再び戒めて斎鹿へと言い

放った。

「おまえが私を名前で呼ぶだけでも違うと思うが。」

「さっき決めた呼び名？」

「そうだ。」

「それならまあ・・・。」

斎鹿は考えるように天を仰ぎシアンに笑顔で怒られるよりはマシと判断して頷いた。

「ルー？」

斎鹿の声は小さかったがサリルトには確かに聞こえた。

サリルトは先程戒めたにも関わらず顔にはわずかに笑みが浮かんでいた。

第四十一話 日が暮れて（後書き）

ありがとうございました。

第四十二話 後見人と教皇？

ダイヤル式の赤電話ボックスにサリルトが長い指でダイヤルを何度か回し斎鹿を抱き締めると、行きと同じような身体感覚を感じて目を思い切り閉じた。身体が弾んだように揺れ、閉じていた目をゆっくりと開くと白と赤のバラが辺りに咲いたアサガオの蔭が絡まる白亜のアーチの下へ一瞬のうちに到着していた。

サリルトは回していた手を外し、柱に手を当ててぼそぼそと何かを呟いている。

斎鹿はアーチから1歩前に出て大きく深呼吸をすると、花の香りと少し冷たい空気が身体へと入ってきた。首を右、左、右、とゆっくりと動かすと小さくゴキツという音が聞こえた。

「うああ。」

斎鹿の思わず出た声にサリルトは眉を顰めたが、斎鹿の横にぴたりと歩み寄るとその肩を抱いた。

「ちよつと、この手は何なのよ。」

突然肩を抱かれた斎鹿はサリルトの意図が分からず怪訝な顔で睨み上げた。

サリルトは斎鹿の様子を気にすることなく肩を抱いている手に力を入れ進め始めた。押されるような形で歩き出す羽目になった斎鹿だったが、すでにサリルトが合理的主義者であることはわかった。なのでこれにも何か理由はあるのだろうと考えていた。理由といっても、おそらく例の女王であるわけだが……。

が、勝手に肩に手を置くのを易々と許す斎鹿ではなくパチンと気持のいい音と共にサリルトの手を軽く叩いた。

「なぜだ？」

「何が。」

歩みを止めないままサリルトが問い掛ける

この男は全くわからない、と斎鹿が首を傾げて口元を引き攣らせた。

「明日には結婚が決まっているのだ。妻の肩を抱くくらい当然ではないのか。」

「まだ妻じゃないし、結婚も認めた訳じゃないわよ。」

あんたはそれでいい訳？勝手に決められた相手、しかも何者かもわからない相手と結婚って、それこそ常識極まりないわ。合理的主義に反するんじゃないの？」

「いや、合理的だ。」

私は結婚相手を求めていた。お前は衣食住を求めていた。互いに解決できる要素があるのだから結婚をして何がおかしい。前にも言ったと思うが、お前に好意をもってはいるが愛がある訳ではない。しかし、結婚してもいいと思っているのは間違いない。」

サリルトは悪びれる様子もなく感情を表に出さない能面のような顔で前だけを見据えている。斎鹿は呆れて開いた口が塞がらなかった。

「その顔はやめろ。頭がより軽く見える。」

「こう見えても結構中身詰まってますからっ！！」

サリルトは鼻で笑う。

斎鹿はその態度が腹立たしかったが不思議と肩を抱かれる手にはだんだんと違和感を覚えず、どうやら随分と絆されてしまったことに気付いた。

それに気付いてしまうと妙に気恥しく、城へと向かう道を誤魔化すように声を大きくして押し問答しながら歩いて行く。

城の大きな玄関の前まで来るとサリルトは扉をノックした。

きつとマゼンタが開けてくれるだろうと思った斎鹿は見られるのが嫌だったのだろう、肩に置かれたサリルトの手を片手で肩から落とした。

「おつかえりいー！」

扉が開いたかと思うと、そこにいたのは穏やかな笑みを浮かべるマゼンタではなく頭の軽そうな笑顔を浮かべた総一郎だった。

「さあさあ、お疲れやろ。」

中に入ってゆっくりお茶でも飲もか。」

総一郎は2人に向かって手招きをするが、サリルトの眉間には深い皺が刻まれ、斎鹿は口を引き攣らせている。2人にはまだ状況が掴み切れていないが顔を見合わせて扉を潜った。扉がパタンと閉まると総一郎は先導するように前を歩いていく。その後をサリルトと斎鹿は仕方なくついていく。

総一郎が止まったのは例の部屋だった。シアンが敏腕家庭教師として教鞭をふるった場所だ。ノックをすると中からシアンが入るようにとの声が聞こえた。

「入りまーす。」

何とも軽い言葉と共に部屋に入ると、落ち着いた色ですべて整えられ中央に机と机の両側に2人掛けの長椅子が置かれその間に1人掛けの椅子が置かれた立派な応接室へと戻っていた。

2人掛けの椅子にはシアンが焦げ茶色の毛先がランダムに動きを出した短髪で瞳は蜂蜜色で好奇心に溢れている20歳程の青年にもたれ掛かっている。青年はもたれ掛かっているシアンの肩に手を回して空いている方の手をサリルトに向けて軽く上げた。役目を終えたと思ったのか総一郎は1人掛けの椅子にドカツと音を立てて座ると両手をのばして伸びをする。

「2人も座ったら？」

「状況が掴めないんだけど・・・。
何で居るの？」

斎鹿が総一郎に向けて言葉を放つ。サリルトは2人掛けの椅子の前に立つと前に座るシアンと青年に向かって深く礼をして椅子に腰掛けた。

「斎鹿ちゃんも座ったらいかが？」

その言葉に従うように斎鹿はサリルトの横に座った。

シアンがもたれ掛かっていた姿勢を正してサリルトと斎鹿に視線をやった。

「紹介するわね、斎鹿ちゃん。

私の隣に座っているこの方は、私の旦那様の口ハス様。そちらの方は総一郎様。

明日の式には欠かせない御2人なの。」

「旦那様ってことは……。」

「陛下だ。」

「……へえー。」

サリルトが斎鹿の言葉を補うように告げると、斎鹿は口ハスの顔をまじまじと観察するように見詰めた。一般庶民だった斎鹿にとって王様というものは教科書かテレビでしか見たことはなかったし、どう接すればいいかもわからない存在なのだ。それ故に反応も薄くなってしまう。

「ぶはっ。」

それまで優雅な振る舞いをしていた口ハスだったが斎鹿と目が合った瞬間に吹き出して笑いだした。片手で口を抑えて何とか我慢しようとしているのだろうが我慢しきれていない。

斎鹿はなぜ笑われているのかもわからず口を尖らせた。

「改めてよろしくなあ。」

声を掛けてきたのは総一郎だった。

「何で居る訳？」

「だって、俺、明日あんたらの式せなあかんもん。」

「なんでっ!？」

「俺、教皇やし。」

ちなみに口ハッさんはあんたの後見人やで。」

「!？」

第四十二話 後見人と教皇？（後書き）

ありがとうございました。

第四十三話 なんでの応酬

「なんで!？」

斎鹿の訴えにロハスは斎鹿を指差して大口を開けて笑っているし、総一郎はまたもや頭の軽そうな笑いを浮かべている。斎鹿は、総一郎は本当に頭が軽い・・・空っぽなのでは、とさえ思えた。

「あんたはアルファイオス家に嫁ぐんやで、そんな中途半端に『異世界から来ました』、テヘツ（笑）』ではすまへんやろ？」

そこでや。あんたには力のある後見人をつけて、その辺の貴族様やら王族様から守るばかりか、王家と公爵家の絆をより深めようという賢い考えや。」

俺って偉くない?と言わんばかりの態度で鼻高々と告げた総一郎に斎鹿は冷たい視線でおくった。そんな視線にもめげずに総一郎はサリルトへ視線を移した。

「先程は・・・教皇様の御前とは知らず、失礼の数々お許し下さい。」

サリルトは座ったまま軽く頭を下げた。

本来なら不敬罪にも問われる態度だが、総一郎も片手を上げて許している。形式的にはこれで公爵家と教皇とは何の確執も生まれずすんだのだが、斎鹿にはそれよりも後見人の方が気になり笑っているロハスをちらりと盗み見た。

ロハスは未だにゲラゲラと笑っていたが、斎鹿が見ていることに気付くと咳払いをして何とか体裁を整えた。

「斎鹿の母の妹の結婚相手の伯父の結婚相手の姉のそのまた叔父の妹の子どもの結婚相手の弟の子どもが俺の母親っていう設定で、斎鹿は俺の遠い親戚っーことで吐き通すから。
よろしくな、斎鹿。」

ロハスはそう言うのと口元を右手で押さえた。何かと思った斎鹿だったが、押さえていた手から笑い声が漏れ聞こえるといよいよ斎鹿の怒りも頂点に達した。

斎鹿はロハスに右手の人差し指をピンと伸ばして、その指の名前の通りロハスを指差した。

「ちよつと、あんたっ！！人の顔見りゃ、ゲラゲラ笑って失礼って言葉を知らない訳！？

私はあんたに笑われるようなこと何にもしてないし・・・って、笑うんじゃないっ！！」

指を震わせながら訴えた斎鹿の言葉もロハスの笑いを増長させるだけだった。

「ぶはっ、わる、い、ハハっ。」

ロハスはそれだけ言うのと再び呼吸を整えた。まだ少しだけ発作のように口角がピクピクとしているが先程よりだいぶマシになった。

「斎鹿のことを笑ってたんじゃないぞ。お前、サリルトにとんでもない疑惑を抱いてたらしいじゃねえか。」

思い当たる節がない斎鹿はその言葉に首を傾けた。

「男色疑惑よ。覚えてらして？」

「・・・ああ！」

斎鹿はシアンの言葉に思い出したと声を上げた。そういえばそんなこともあったなあと斎鹿は感慨深げに腕を組んで首を振っているがまだ今日の出来事である。

ロハスはシアンを自身の胸に飛び込ませるように力強く引き寄せ、抱くと、斎鹿に威圧的な視線をぶつけた。

「まあ面白い話ではあったが、俺の女を泣かせたのは重罪だな。今回は結婚祝いに許してやるが・・・次はないぜ？」

「ああん、ロハス様あ？」

シアンはロハスの言葉に胸に凭れかかってその胸に手を置いた。そのシアンの手を握るようにロハスが上から手を重ねる。

斎鹿はそんな2人の様子に何も口にしていないのに何故か口の中が吐きそうなくらい甘ったるく顔が引き攣った。けれど、それを感じているのは斎鹿だけではないようで、隣を見るとサリルトも苦虫を潰したような顔をしている。

総一郎は2人の様子を見て、またか、とため息を吐いていた。そして、コホンッと咳払いをすると再び話し始めた。

「まあ、あつちの言葉に『長いものには巻かれる』っていう言葉があるやん。

あんたは抵抗しとるみたいやけど、ここで公爵夫人になつとけば異世界の研究もしたい放題、飲み放題食べ放題、何でも放題や。

俺は教皇として今でも戻る方法を探しとるし、ロハっさんはロハっさんで研究者を集めてくれとる。同じ目的があるもん同志、連絡が取り合える地位にいた方が連携が取り易い。

あんたが結婚するんが嫌なんはわかる。でも、今より将来や。
一時の我慢が未来の自由に繋がるんやって考えて、ここは結婚し
とかなか？」

「それは・・・。」

斎鹿はサリルトの顔を見た。横顔はやはり整っている。

今日の城下町でのサリルトは優しかったり変だったり変態だった
りと色々な一面を見ることが出来た。しかし、斎鹿にはこのまま流
れに流されてしまっているのかという不安もあった。

サリルトは斎鹿が見ていることに気付くと椅子に無造作に置かれ
た斎鹿の左手を力強く握った。その手はとても大きくあたたかかっ
た。

なぜだが、その手のあたたかさに斎鹿の不安はどこかに行つてし
まったように心が和いでいった。

「わかった！」

斎鹿は思い立ったように声を上げた。総一郎が手を打って斎鹿に
期待の眼差しを向け、サリルトも目を見開いて斎鹿を見詰めた。

「契約結婚しよう！！」

「なんでっ!？」

第四十三話 なんでの応酬（後書き）

ありがとうございました。

第四十四話　むつつりな男？

斎鹿の頭の中に重厚な辞書が現れ、薄い紙のページがペラペラと捲られる。

電子レンジのようなチンツという音と共に開かれたページには、斎鹿がまさに知りたい言葉が記されていた。

婚姻

1、結婚すること。夫婦となること。
2、男女の継続的な性的結合と経済的協力を伴う同棲関係で、社会的に承認されたもの。法律上、両性の合意と婚姻の届け出によって成立する。

大辞泉辞書より

（本当の意味では合意してないけどね・・・）

斎鹿は何故か再び腹に巻かれているサリルトの手を一瞥し、ベッ
トに入る前の出来事を思い返そうと目を閉じた。

「契約結婚の勧め　3カ条。

その1、性的な行為の禁止。

その2、元の世界へ戻る方法を自由に探すことを許可すること。

そのかわり、私もルーのお役に立つことは妻として出来るだけ協力
する

その3、ルーの不貞行為はOK。まあ、男だし・・・我慢も大変でしょ？

こんな感じでどおよ？」

仁王立ちで腰に手をあてる斎鹿にサリルトは言葉を失っていた。同じくぽかんと口を開けて斎鹿を凝視していた総一郎は口元を緩めにやりと悪戯を思いついた子どものように笑った。

「ええ条件やない？」

言いながらもちらりとサリルトに視線をやると総一郎を射殺さんばかりにサリルトが睨む。どうやら『契約結婚の勧め 3力条』はサリルトにはお気に召さないらしい。

「何よ、あんたには不利な条件じゃないじゃない。」

斎鹿は何が気に入らないのかとばかりに頬を膨らませる。

「そもそも契約結婚である必要がない。普通に婚姻関係を結べばいいだけだろう。」

「私がどんなに流されやすくても、昨日会った男と普通に明後日に結婚出来たらそれは大馬鹿者よ！

そもそも何で結婚することが決定事項なのか未だに疑問だから！式場をキャンセルするお金もない、戸籍もない、職もない、逆らう力もない！言ってて腹が立ってきた！きーっ！！」

斎鹿は早口にまくし立て、ヒステリーになったように奇声を上げながら自身の頭を思い切り掻き乱した。

「契約結婚なんてまるで物語のようだわ！」

私としては、ぜひ！その案で結婚生活を送って頂きたいわ。」

シアンは右手の人差し指を唇のすぐ下にあて、ロハスにもたれ掛かったまま笑みを浮かべた。先程まで斎鹿達を空気扱いしていたシアンが眼をきらきらとさせてサリルトを見詰めていた。

その顔は明らかに面白がっている。サリルトは、姉のこちらの気持ちを考えない反応に苛立った。

思わず舌打ちをしてしまったほどに・・・。

「面白がらないでよ！きいー！！」

しかし、その舌打ちは斎鹿のさらに大きくなった奇声のおかげシアンに届く前に掻き消されたようだ。

「俺は何でサリルトが納得しないかわかってるけどな。」

ロハスはそういうと指に巻きつけたシアンの髪に口づけを落としたりした。

その言葉に総一郎は興味津々という顔をロハスに向け、右手の指の間の間隔を大きく空けて口元にあてた。あまり隠れていない顔は笑顔満面だ。

「性的な行為の禁止が嫌なんだろ？」

「いやや、公爵ってばむつつりなんやから！」

サリルトはその言葉に顔を大きく歪めた。

総一郎はロハスの言葉に悪乗りするようにサリルトへとからかいの視線を向ける。

「それしかないだろ。」

今まで女の影が見えなかった男だぜ？そりゃ、結婚したら我慢し
たくねえだろ。」

「でも、ロハス様。斎鹿ちゃんは不貞行為はいいつて言っているの
よ？」

ロハスは静かに息を吐きながら、ゆっくりとシアンの言葉に首を
横に振った。

「浮気つてもんは、結婚生活があつてこそ楽しめるもんだ。
それを最初っから浮気をしてもいいなんて・・・全くハラハラ感
がねえじゃねえかつ！！」

「確かにそうですわね！」

シアンはさすがはロハス様つとロハスの胸に再び飛び込んだ。
サリルトはそんな姉の様子と齒を食いしばって笑いを耐えている
総一郎に思わずため息を吐いた。

「ってか、何の話してんの？ルーが怖いけど・・・。」

ヒステリーから回復した斎鹿は部屋の空気が変わって、サリルト
からの冷たい冷気が部屋を冷やしているように感じていた。

その問いに応えたのは、咳払いをして笑いを耐えた総一郎だった。

「あんな、今は何で公爵があんたと契約結婚を嫌がるかの話や。」

「んで、何でなの？」

「性的な行為の禁止が嫌やないかってロハっさんが・・・ぷっ！」

「それしか考えられないだろ！」

総一郎は話の途中で腹を抱えて笑いだし、椅子から落ち膝をついて大声を上げて涙まで浮かべ笑っている。その後をロハスがさらに意見を通そうとする。

齋鹿は1度大きく頷くとサリルトに向き直り肩に手をポンと置いた。

サリルトはその行動に顔を上げて齋鹿の顔を見るとその顔には邪気のない満面の笑みが浮かんでいる。その顔を見てサリルトはほんの少し幻想を抱いた。

齋鹿が『そんなことないでしょう。』と言ってくれることを。

「・・・。」

「そうなの？」

幻想は所詮幻想だと知ったサリルトだった。

第四十四話 むつつりな男？（後書き）

ありがとうございました。

第四十五話 新契約結婚の勧め 5 力条

侮蔑めいた斎鹿の視線がサリルトへと突き刺さる。

「あんたは変態だ、痴漢だ、と思ってたけど色魔も追加!？」

ああ・・・これは嫁が来ないわ・・・絶対来ないわ。そりゃ、お姉さんも心配するっての。

ああ、やだやだやだ!こんな変態色魔冷徹男は嫌だわ。やっぱり結婚したくない!」

両手を左右上下様々に動かして感情豊かに、まるで過剰に演技しているような素振りですりルトへと言葉を降らせる。その言葉を微動だにせずに聞いていたサリルトは、斎鹿の結婚したくない発言には黙っていられなかった様子で斎鹿へと鋭い視線を向けた。

残りの面々は面白くなってきたと顔を見合わせて笑っている。

「何よ!言いたいことがあればはっきり言えば!？」

サリルトの鋭い視線に僅かに怯んだ斎鹿だったが、それよりも反抗心が勝ち自身を奮い立たせるように握り拳をつくっていた。

サリルトは斎鹿の態度に目を細めて立ち上がり、斎鹿を威圧的に見下ろした。

「・・・確かにその1の内容は気に入らない。」

「やっぱりむつつり色魔か!？」

「最後まで話は聞け!」

サリルトの言葉に静かになった斎鹿は口を尖らせ睨みつける様にサリルトを見上げた。

しかし、その行動はサリルトにとっては可愛らしいものでしかなかった。

「性的な行為の禁止とあるが、私は妻以外抱く気はない。」

サリルトの言葉に総一郎が茶々を入れるようにヒューと口笛を吹いたが、サリルトは気にする様子はなく斎鹿の肩に両手を置き、斎鹿を見詰めた。サリルトのその言葉に斎鹿は顔を赤くするどころか苦虫を潰したような、迷惑とも言わんばかりの顔だ。

「それは無理。妻になるのはルーを愛してるからって訳じゃないし。」

「私は斎鹿に好意を持っている。」

斎鹿にとって良い夫になるようにも努力する。結婚してくれ。」

サリルトは真摯な眼差しで斎鹿を見詰め、甘くプロポーズの言葉を告げた。

シアン、ロハス、総一郎もサリルトのプロポーズにどよめいた。

彼等はサリルトが女性を信用していない事、関係を持っても深入りしない事を守って今までの人生を歩んできたことを知っていたからだ。固唾を飲むように3人はサリルトと斎鹿をじっと見守っていた。

斎鹿も簡単には真剣なサリルトの言葉に答えは出せないだろうと。

「ごめんなさい。」

斎鹿は肩を掴まれているので頭だけをぺこんと下げた。

答えは意外にも簡単に斎鹿の中で出たようだ。

「ちょ、そんな簡単に返事してええん!？」

「サリーちゃんのどこがいけないのかしら? 性格?」

「むつつりな所が嫌ってんなら、男はほとんどむつつりだぞ!」

外野で返事を聞いた3人はあつさりとした斎鹿の反応に前のめりになるように勢いよく話し出した。

サリルトは斎鹿の悩む様子すらない返事に肩に手を置いたまま固まっている。

斎鹿はうーんと悩むように首を傾けた。

「だって、好きじゃないし。」

性格はこんなだってわかってますけど……。むつつりとかむつつりじゃないとかじゃなくて好きじゃないんですって。恩は感じてるけど愛はない。

だから、契約結婚にしようって。」

「それは、これから好きになる可能性はないということなのか。」

ゆっくりとサリルトが視線を合わせるように屈み、斎鹿に問い掛けた。

「ない・・・かも?」

先のことはわかんないけど、今なら確実にないよ!」

斎鹿は笑顔と言葉という針を使いサリルトの心を残酷にも刺し続けていた

しかし、サリルトはその痛みに耐え、契約結婚の了承を斎鹿へと

伝えた。

「私も契約結婚を了承するにあたり新契約結婚の勧め　5力条を宣言する。」

その1、もし夫を契約結婚中に愛した場合、その時点より契約結婚は破棄され、通常の結婚生活となるものとする。

その2、不貞行為は互いにしない。

その3、契約結婚中の斎鹿の元の世界への帰還方法は探す。その見返りとして、公爵夫人としての仕事をこなすこと。

その4、就寝、食事は必ず共に過ごすこと。それ以外の城内行動は私に声をかけること。

その5、夫婦のスキンシップをはかること。」

「ちよつと！3まではまあわかるけど、4と5は何なのよ！」

「4、5は当然のことだろう。契約結婚したとはいえ、何もかもが別行動、口づけすらもしないとあつては不仲説が出て不思議ではない。そのような社交界に噂を提供するような真似は公爵家として許されない。斎鹿は私が斎鹿の就寝中に不道德な行為をするとも思っているのか？」

「思ってますけど！！」

斎鹿は間髪いれずにサリルトの問いに大声で答えた。

その声には今日の路地裏での出来事を忘れたのか！という斎鹿の怒りも感じられた。

サリルトは斎鹿の反応に左手の掌を斎鹿へと向けて指をピンと伸ばした。

「では、ここに誓う。」

決して就寝中はそのような行為はしない。

この誓いの証人は姉上方がなって下さる。破れば、死を選択しよう。」

「……………わかった。」

サリルトは齋鹿のまだ納得しきっていない尖った唇に軽い口づけを落とした。

「それはまだ許してないっ!!」

サリルトが齋鹿から腹に一発貰ったことは言うまでもない。

第四十五話 新契約結婚の勧め 5力条（後書き）

ありがとうございました。

第四十六話 よよっは古い？

斎鹿はベツトの中で嫌なことを思い出したと頭を振った。

ふと視線を落とし腹に巻かれている手を見ると存外にも強く巻きつかれ、なかなか外すことは出来なさそうだ。斎鹿はせめてもの抵抗に横向きの体勢で海老のように腰を曲げて勢いよくサリルトから離れるようと頑張るが離れようとすればするほどサリルトは金魚のフンのようにくっついてくる。

「な、なんなの・・・この男は。」

きつと起きていたら鼻で笑うであろう男を想像してさらに斎鹿は頭を振った。

そして、腹が立てば立つほどに先程の記憶が呼び起こされた。

足元にもぞもぞと動くものに斎鹿が視線をやると、そこには頭を懸命に擦りつけるサリイがいた。

どうやらずっとこの部屋にいたらしかったが、椅子の下に隠れていたようで発見できずにいたようだった。それとも、総一郎の出現に気をとられていたからだろうか。

どちらにせよ斎鹿にとって一番癒しを与える存在が現れたことはよかったと言えるだろう。

殺伐としていた斎鹿の雰囲気を少しでも和らげてくれたのだから。

「サリイ。サリイが一緒にどこでも行けるように鞆を買ってきたよ。」

斎鹿は鞆をサリイに見せるように床の上に置いた。サリイはそれに興味津々のようでおいを嗅いで鞆の周りを1周すると開けられていた鞆の内部へと探索行動を広げていった。

斎鹿はその行動をじつと微笑ましそうにしゃがんで見ながら鞆を上からサリイをからかうように触っていた。

「話を戻すが……。」

ロハスがその斎鹿の行動に口元をゆるめながら話を元に戻そうと口を開いた。

「お待ちになって。」

あなた達が決めていたのでは埒が明かないわ。私が決めてあげる。

「

どこから取り出したのか黒い扇子で口元を隠して目元を細めたシアンがその言葉を遮った。

「いや、ほんと、マジでいいですから。自分たちで決めますからねえ!？」

「そうです、姉上。」

お手を煩わさせずにすぐに迅速に瞬時に決めさせて頂きます。」

斎鹿は手を止めてシアンの発言でこれ以上ややこしくなるのは勘弁とばかりに必死にサリルトにも同意を求める視線を送る。サリルトもその視線を受けて結託した。2人は必死だったがそんな思いはシアンに届くはずもない。

「そうねえ。」

まず、新契約結婚の勧め5カ条は採用で決定よね。

お部屋はちよつと窮屈だけど今の執務室を使つて、斎鹿ちゃんの私室は昨日泊まったお部屋でいいでしょう？それから執事とメイドも何人か付けなくてはいけないわよね。それからそれから、明日は何とか気力で乗り切つて、次の日からはお茶会の予定やパーティーの予定を立てつつレッスンでしょ？

それからそれからそれから、跡継ぎは」

「ちよい待つた！！！」

「あら？何か問題あつて？」

「ありすぎでしょ！つてか、明日を気力で乗り切るとかアバウトでしょ！！！？」

斎鹿は立ち上がり右手の拳を握りしめた。

シアンはその斎鹿の懸命な訴えに扇子で目元を隠すようにすると、よよよつと泣き出す真似をした。

「だって、どうしようもないんですもの、よよつ。せつかく、せつかく！私が今日敏腕家庭教師になつて教えてさし上げようと思つていたのに、2人はデートでランデブーなんだもの、よよよつ。」

「ぐっ！」

斎鹿は痛む良心が崩れないように胸を押さえた。泣き真似とはわかつていてもシアンが自分のことを考えてしてくれたことを台無しにしてしまったという思いは斎鹿の心にグサツと突き刺さつた。

「よよよよよつ！ああ！悲しいわあー！」

「わ、わかりましたって！明日は何とか気力で乗り切りますから！」

斎鹿の言葉に瞬時に扇子を口元まで下ろしにこつと笑ったシアン。

「でも、誓いの言葉だけは何とかしてね。」

「・・・へ、へい。」

「あら、変わったお返事ね。よろしくてよ、面白くて。」

さあ、明日も早いんですもの。今日はもう解散にしましょう？」

シアンは立ち上がり満足げな笑みを浮かべた。

「ってか、よよよって古ない？」

総一郎の言葉にシアンから扇子が飛んできたことは仕方がないことだったと言っしかないだろう。

第四十六話 よよよっは古い？（後書き）

新しく再upしました。

申し訳ありません。

ありがとうございました。

第四十七話 義理の両親

話はシアンの独壇場で続き、主役であるはずの2人は顔を見合わせた。こういう時には息が合うのだから不思議なものだ。

ロハスはシアンの話を大口を開けて笑いながら聞き、総一郎はシアンの言葉の間違いに対して揚げ足を取ったりするものだからますますロハスの笑いは止まらない。ついには指をパチンと鳴らしセバスチャンに酒を頼む始末だ。

「ってか、解散するんじゃないの？」

斎鹿の呟きもはや聞いている者はおらず、このままここにいてもまた面倒に巻き込まれることをこれまでの経験から感知した斎鹿は鞆の内側を引っかいているサリイを片手で抱き上げた。鞆を肩から下げてその中に再びサリイを入れて頭をそっとひと撫でする。

それが心地よかったのか自ら手に擦りよってくるサリイに思わず口元が緩んでしまう。

「それでは、我々は明日のことがありますのでこれで失礼致します。

」

斎鹿が『んっ！？』と怪訝そうな顔でサリルトを見ると、3人に丁寧に頭を下げている姿が目映った。ロハスはすでに酒が入っているのか陽気に手を上げて返事をしている。

サリルトは斎鹿の手首を掴み強引に部屋を出て2階を目指して歩き出す。

「ちょ、ちょっと、私の部屋はあっちなんだけど！」

階段を上り、自分の部屋へと戻っていいものだと思っていた斎鹿だったがサリルトの手は放されない。それどころかますます力は増して引きずるようにサリルトの執務室へと連れてこられていた。

（それから・・・それから、何だかんだルーがしゃべってて、何故か一緒に寝ることになって、何故か抱き締められて寝て・・・。）

斎鹿はあたりが明るくなっていることに気付いた。どうやら昨日のことを思い出しながら寝てしまったようだ。目を開けなければと思う反面、まだ寝ていたいという思いから布団の中に潜り込もうと身体はしてしまう。

「ふふふ、かあわぁいい。」

この言い方は・・・と斎鹿はため息を吐きたくなった。どうやら未来のお姉さんは勝手に義妹の寝室に忍び込んで寝顔を観察趣味があるらしい。もし、昨日の夜に何かあったらどうするつもりなのかと思いながら、斎鹿の頭はすっかり起きてしまったようだ。

恐る恐る見たくない現実がないよう祈りながら瞼をゆつくりと開けていく。

「・・・・・・・・えっと・・・・・・・・だれ？」

思っていた人物とは違う人間がベット脇に置いた手に顎を乗せて斎鹿を満面の笑みで見詰めている。

斎鹿はその時に見た瞳の色に見覚えがあった。

「あの・・・もしかしておかあ、むがつ！」

「かわいいわあんっ！」

斎鹿の言葉を遮るように女性が寝ている斎鹿に飛び掛かった。

女性は斎鹿の上に半分乗りがかり斎鹿の顔に頬ずりをするが、斎鹿はそれをやめさせようと女性を引き離そうともがいている。

「かあわあいいい！」

もお、あの子ったら浮いた噂がないと思ってたらこおんな可愛い子がタイプだったなんて知らなかったわあん。でも、年齢的には問題ないのよね？ま、問題あっても何とか出来ちゃうから大丈夫よね。権力つてあっても面倒なだけだけど、こおいう時に使えるのよねえ。」

「うげえ！やめて下さい！」

「まあ、これから親子になるっていうのに敬語なんていらないわよ。あたくしのことはマミー？ママ？お母様？母上？母上はなしね。あの子みたいになったら困っちゃうわあ。せっかくかわいいんですもの！」

「話を聞いて下さいよ！」

斎鹿の声がまったくと言っていいほど耳に届いていないようで女性には気にせずに頬ずりを続けて話し続けている。

「母上、勝手に入ってくるのはやめてください。」

隣で寝ていたはずのサリルトはいつから起きていたのか執務室へ

と続く扉から男性を伴ってやってきた。男性の歳はマゼンタぐらいだろうか。その威厳溢れる風格はまさしく貴族といえる。

女性はサリルトの声に上半身を起こした。

「あら？我が愛息様はご機嫌斜めでいらつしやるのね？」

「当たり前です。」

女性は頬を膨らませて軽く弾むようにサリルトの側にいる男性の腕へと飛び付いた。

斎鹿は起き上がりベットから3人の様子を眺めていた。やはりどう見ても親子だ。どうやら母親の性格は姉と同じのようだが……。

「斎鹿ちゃん、あたくしはサリルトの母、マリーナよ。それから、こちらのサリルトそっくりさんがあたくしの旦那様、アーバインよ。これからはママ、パパって呼んでね。」

「いやいや、どこの馬の骨とも思えない女が大切な御子息と突然結婚したって、いや、私はしたくないんですけどね、ってか、いいんですか？」

斎鹿はタオルケットを胸元まで上げた。側で丸まって寝ていたサリイも騒ぎに起きてきたのかふかふかのベットの上をふらつきながら歩いている。

マリーナは斎鹿の問いに首を傾け、アーバインを見上げた。

アーバインはその視線を感じたからかその腰に来るような低い声ではっきりと答えた。

「構わない。」

「いや、構って下さい。」

最後の結婚阻止の砦だと思っていた両親のあまりにもあっさりした結婚承諾に斎鹿の方が断わってくれと切に願っていたがどうやら叶えられないらしい。

「さあ、斎鹿ちゃん、花嫁さんに変身する時間よ。」

斎鹿は諦めるようにため息を吐き、サリィを抱き上げてベットから下りた。

第四十七話 義理の両親（後書き）

ありがとうございました。

第四十八話 父親は色々考える？

サリルトの父・アーバインはアッシュブラウンの髪をサイド、バックは刈り上げたふんわりとした七三分けに黒縁の四角い眼鏡をかけた眉間の皺と歳から現れた若干の皺が似あうスマート強面紳士だ。身長はサリルトと並んでいるところを見るとあまり変わらないように見えるが若干サリルトの方が低いだろうか。上質の黒い上着に光沢のあるグレーのベスト、ウイングカラーには白いアスコット・タイを着用し、胸元には同じ色のハンカチーフ。黒とグレーの縞柄ズボンを着き、光沢のある黒い靴が光っている。その姿はまさしくモーニングコートを着た正しき貴族様だ。

そして、その妻・マリーナに対してまず思うことは子どもとそっくりだということだ。いや、2人が母であるマリーナに似ているのだろうが並んでいれば姉弟と思われるもおかしくないだろう。その若々しい風貌からは2人も子どもがいるとは思えない。

マリーナの髪は大きめの丸みと艶を出して自然で柔らかなカールのボブでシアンよりも幼く見える童顔からか、まるで小動物のように大きな瞳をきよきよと動かし頬をピンクに染めている。

スカートのふんわりタックと裾のチュールが可愛いネイビーワンピースの上に白い薄手のボレロ、白く細い首には真珠のネックレスがつけられ、足元はきらきらと光る宝石が散りばめられたT字ストラップサンダル。まるでパーティーにでも行くような格好だ。

「……先程はどうも。」

寝起きから突然襲われた斎鹿は身なりを整えて執務室への扉を開くと優雅に朝からティータイムが催されているようだ。扉を閉めソファのある方へと向かうと、父母と向きあうようにサリルトが2人掛けソファに座っていた。

「あらあら、これはまた変わったお洋服ね？」

斎鹿が着ていた服は昨日と同じパーカーに濃紺のジーンズ、スニーカーが履かれていた。ちなみに、どうやらこちらの世界の下着も斎鹿の世界の下着もあまり変わらないようでその点は斎鹿も安心したものだ。今日もまたメイドにヒラヒラでフリフリのワンピースが用意されていたがもちろん斎鹿が着るはずもなくいつもの格好で押し通したのだ。着替えを手伝いに来ていたメイドの不満げな顔は居心地が悪かったが見ないふりをしておいたのはサリルトには伝えまいとサリルトの隣へと座った。

「動きやすいんで・・・えっと。」

「ママって呼んで。」

「いや、無理です。」

幼子のように斎鹿の返事が気にいらないと頬を膨らませる様子はサリルトの年齢から考えて中年と言ってもいいというのに愛らしさが失われていない。

「マリーナ。」

斎鹿がマリーナの愛らしさに見惚れていると、アーバインが空になったカップをマリーナの顔の近くへと差し出した。マリーナは『はいはい』といった感じでカップを受け取りポットから紅茶を注ぎ、近くに置かれていた砂糖瓶の蓋を開けてスプーンに1杯、2杯、3杯・・・と溢れんばかりに入れていく。

その行動にサリルトの袖をくいつと引っ張って小声で尋ねた。

「・・・嫌がらせ？」

「いや、父上はあれが普通だ。」

サリルトは斎鹿に顔を寄せ小声で答えた。その間にもマリーナは砂糖を入れ続けている。

「ってか、砂糖じゃん。紅茶じゃないじゃん。砂糖だよねぇ？」

「もはや飲み物ではないだろうな。」

マリーナはティースプーンで回すとじやりじやりと音を立てていた。アーバインはそれを受け取るとそのままスプーンでひたひたになった砂糖をすくって口に入れた。その姿は強面の顔からは想像できないほどの甘い物好きなようだ。

「うつわぁ。」

斎鹿の小さな叫びが聞こえたのか、ティーカップに夢中だったアーバインは顔を上げ斎鹿を見詰めた。好物を食べているはずなのに何故か眉間の皺はいつまでたってもとれていない。

「斎鹿。」

「あ、はい・・・。」

「私は今までサリルトには息子としてではなく、アルファイオス家の正しき当主となるように接してきた。そして、私が願ったようにサリルトは立派な当主となり領民を護り、陛下を支えている。けれ

ど、歳をとったせいか最近ではそれが正しかったのかと疑問に思うのだ。」

アーバインはカップをテーブルの上に置き、立ち上がると窓の方へと手を後ろに組んで歩き出した。

サリルトは突然の父親の話に目を見開いたが、静かに語りかけるその声に黙って話を聞いた。

「父親としてこの子にしてやれることを精一杯してやっただろうか。マリーナは母親としても公爵夫人としても立派に務めを果たしたが、私は公爵として領民を守ること、陛下をお支えすることだけしか出来なかった。父親として2人と共に野を駆けたことも、食事も碌に一緒にとれなかった男だ。」

「今となつては後悔しかない。もしやサリルトが結婚をしないのは父親である私がふがないせいだったからかも知れんと思うと・・・。」

「父上！そのようなことは・・・。」

窓の外を眺めたままアーバインの言葉はだんだんと小さくなっていった。

その言葉にサリルトが思わず立ち上がり訂正しようとするが、どうやら父親にははつきりと言いたいことがまとめられないようだ。

「あの、お、お父さん。」

斎鹿は思い切って口を開いた。

「お父さんが思ってるほどこの人は何も考えてないですよ。ってか、今この人が変な犯罪とかしないで正しい公爵？をしてるのはあなた

を見てたからなんじゃないですか。子は親の背中を見て育つて言うし・・・なんというか・・・この人結婚しなかったとかは全然お父さん関係ないと思いますだ！（この独身貴族様は、知らないだらうけど一夜限りの女はいいいたらしいからそれが原因だと思います。）」

語尾が変になってしまったと頂垂れた斎鹿にサリルトは立ち上がり大きな掌を斎鹿の頭に置き優しく撫でた。そして、そのままアーバインの隣まで歩いていく。

「父上、私は父上のように立派な公爵になれたでしょうか？私はそれだけを目指してきました。そう嘆かれるのは間違いです。あなたは私の父上なのですから・・・。」

サリルトは父親の肩に手を置いた。そして、いつの間にやら父が小さくなったように感じていた。

「あーばあびいん、よがっだばね。」

その2人を見てハンカチを握りしめて涙を流すマリーナに斎鹿はこの空気は何なんだと戸惑っていた。

テレビで見た親子モノのドラマのような展開に正直どうしたらいいのかわからない斎鹿はとりあえず紅茶を飲むことにした。

「斎鹿。」

「ふ、へえい！」

紅茶に口をつけようとした時に低い美声で話しかけられ思わず変

な返事をしてしまったと紅茶を置いて頬を掻いた。アーバインは振り返り齋鹿の一挙一動も見逃さないような鋭い視線を向けていた。

「これは父としての願いだ。

どうか、サリルトを幸せにしてやってくれ。」

「・・・（はい、もちろんです！とドラマなら言わないといけないんだろうけどなあ。

ルーのお母さんの瞳からきらきらした光線がびしびし当たってくるし、ルーはハイって言え！って視線だし・・・。）」

「よろしく頼む。」

アーバインが頭を下げた。

やけになった齋鹿は思わず叫んだ。

「へい！」

花嫁らしからぬ返事で・・・。

第四十八話 父親は色々考える？（後書き）

ありがとうございました。

第四十九話 馬車に乗ってランデブー

馬車というものは見た目よりも優雅なものではない。

慣れというものもあるだろうが、車や電車など乗り心地の良い座席で移動してきた斎鹿にとって馬車とは想像と違いかなり揺れる。道が整備されていなくともあるのだろうが、椅子から尻が弾むたびにいたくなる。

アルファイオス家の馬車はさすがと斎鹿が目丸くする程豪華な箱形の馬車で、天蓋つきの車両に両側には窓とドアがついていた。その馬車を2頭の馬がひき、御者がそれを巧みに操ってどこかへ向かっていた。馬車の側面には可憐な白い花と蔦が描かれ家紋も控えめに描かれ、窓には白いカーテンがかけられていた。

斎鹿は弾む身体を何とか安定させてサリルトの顔を見詰めた。

「こ、こりはなきやな、か、にん、たいがいる。」

斎鹿の途切れ途切れの言葉に向き合うように座っていたサリルトは首をこてんと傾けた。

「変わった言葉遣いだな？」

「す、きで、してるんじゃ、なあい！」

「もうじき舗装された道になる。それまでの辛抱だ。」

「もう、じきつてえ、あとー、なん、びよ、びよう？」

斎鹿がサリルトを責めるように見詰めると、サリルトは片方の口角を上げてにやりと馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「今からだ。」

サリルトの言葉と共にガタンと馬車が大きく揺れ、斎鹿の身体が前に座っているサリルトへと飛び込むように大きく飛んだ。サリルトは両手を広げ飛び込んできた斎鹿を受け止めた。咄嗟のこととはサリルトの胸に飛び込むなど斎鹿にとっては『空腹のライオンの元に飛び込むヤマアラシ』のようなものだ。必死にその厚い胸板を両手で押して離れようとするがサリルトは斎鹿の脇に手を入れ抱き上げると自身の膝に座らせた。

「こら、変態！何、なに、してん、のよ！」

「痛い、顔を押すじゃない。」

「こ、の、へん、たい、がー！」

斎鹿は顔を赤くしながら片手でサリルトの頬を力一杯押した。サリルトは顔を無理矢理背ける形になったがそれでも背中に回した手をどけようとはしない。

サリルトは閉じられているカーテンの隙間から外を見るとまた不敵な笑みを浮かべた。

「尻が痛かったのだろう。」

「・・・べつ、に。」

サリルトの心が読めるのかとも思える発言に斎鹿は顔を押ししていた力を緩めた。

恥ずかしがっている斎鹿と顔を合わせないようにくると向きを

変えさせると後ろから腹のあたりに手を回し抱き締める。

「私の膝に乗っていれば辛くないだろう？」

「・・・（確かに、安定感がある。）」

「これからさらに揺れるぞ。」

このまま乗っていた方がいいのではないか？」

サリルトの顔は斎鹿からは窺い知ることとは出来なかったがその声はからかっているように聞こえた。

「何かしたらぶん殴るからね！」

斎鹿は尻がこのまま痛み続け尻の皮がずる剥けになるより多少の屈辱に耐えようと決意したが、やはり腹が立つことには変わりなく顔の見えないサリルトを睨みつけようと首を捻った。サリルトはその態度に目元を緩めて了解の返事をしながら腹に回した手に力を入れて斎鹿の身体をさらに引き上げ密着させた。サリルトの息がわずかに首にあたり背中がむずむずとしたが、斎鹿はそのぞわぞわが何か分からず、その密着に色気も感じずサリルトに対して『ただのてっかくてあったかい馬車の緩衝材椅子』と認識するだけだった。

「ってか！ってかさあ、あんたの家族ってかなり変わってるって言われない？」

斎鹿はわずかな無言の時間がなぜか気まずく感じサリルトに話しかけた。

「あんたのお姉さんとお母さんは、とりあえず人の話を聞かないし、

勝手に計画するし、勝手になんか嫁にされてるし。お父さんは甘い物好きっていうか糖尿病予備軍とかそんな言葉では済ませられないレベルだよな？その割に言ってる言葉がまともなのかまともじゃないのか掴めないし……。

「ってか！一番変なのはあんたよ！あんたっ！何で結婚すんの！？ってか、何で私！？これって嫌がらせ！？誰か助けて下さい！？アルファイオス家の人が集団でいじめてきますよーっ！これって犯罪じゃね？？訴えるわよ！！」

王様とか出てこられても困るよねー？何で王様？？ってか、王様って何？美味しいの？

「そんなわけあるかい！？王様っていうのは権力持ってるってとりあえず偉い人！ってか、そんな人と繋がり持ってるって何様？サリルト様？？このやるー、殴り飛ばすぞ！！」

「……そんなに話して疲れないのか？」

「……疲れた……。」

斎鹿は肩を落として息を乱していた。

「はぁ……何で馬車に乗ってるんだっけ？」

「『あら？もう、わたくし達ったら若い2人の大切な時間を邪魔したらいけないわね。もう、言ってくれたらよかったのに！わたくし達ったらお邪魔虫さん？？」

「わかってますよ、サリルト。母はわかってます。早く2人つきりになって結婚する前にランデブーしたいんですよ？？母は、きちんと準備しておきましたからね。外に馬車が準備してありますから」
「と馬車に無理矢理乗せられて行く場所もわからないまま走り続けている。」

「・・・ってか、お母さんの口調でもあんたが言つと可愛くない。」

サリルトは質問に答えたただけなのに全く違うことを批判され、女は難しいと改めて思ったのだった。

第四十九話 馬車に乗ってランデブー（後書き）

ありがとうございました。

第五十話 しりとりは難しい？

止まらない馬車に飽き、サリルトとの会話にも飽き飽きした斎鹿は両手の指先だけを合わせて親指から順番にぐるぐると回し始めた。もちろんサリルトの膝の上で。馬車の中は車輪が回る音と馬の蹄の音、たまに御者の声が聞こえるだけで中では2人共先程までのことが嘘のように静かだった。

サリルトは相変わらず斎鹿の腹に片手を回し、もう片手で斎鹿の下ろした髪を指に巻きつけては戻し、巻きつけては戻しを繰り返している。最初こそ文句のひとつでも言ってやろうと思っていた斎鹿だったが膝の上に乗ってしまった今、もうどうとにでもなれと顔色も変えずにサリルトの好きなようにさせていた。

「しりとりしない？」

斎鹿は突然サリルトに提案した。

余程退屈だったのか、指はぐるぐると猛烈な勢いで回され宙に浮いている足はバタバタと揺れていた。サリルトは斎鹿の言葉に動かしていた手を止めて眉間に皺を寄せ怪訝そうに返した。

「しりとりとは何だ？」

斎鹿はサリルトの問いに勢いよく首を振って驚きのあまり顔を見ようとしたが首がゴキツという嫌な音をたて、右手で首を押さえるとゆっくりと前を向いて口元を引き攣らせながら説明した。

「えっ・・・うんつと・・・言葉の語尾を繋げていくドキドキワクワクの痛快連想ゲームかな？例えば、『たぬき』だったら語尾は『き』だから次は『きのこ』、とかよ。」

斎鹿は幼い時には誰でもしたことがあるゲームをまさか大人になって説明させられるとは思わず、しどろもどろになりながらも最低のルールだけを簡単に伝えた。

「なるほど。幼児が好みそうな単純なゲームということだな。」

「・・・まあ、腹の立つ言い方だけど、怒るのも疲れるからいいわけじゃあ、私から、最初は、しりとりははじめのめで、め・だ・か！」

「メダカ、とは何だ。」

しりとりは最初から躓いた。サリルトが真剣にメダカを尋ねるので斎鹿は戸惑いながらも詳しくは伝えられないと思い戸惑ったように答えた。

「えっ！？めだかつていうのは・・・魚？」

「なるほど。では、カミノハラムスキー。」

斎鹿は耳を疑い、確認にもう一度訪ねた。

「何それっ！？か、かみの・・・」

「カミノハラムスキーだ。」

秋に野原で跳ねている昆虫だ。大きさは5？程だな。」

サリルトは斎鹿に見えるように片手を伸ばして親指と人差し指を広げて見せた。斎鹿はそれをちらつと見るまだ納得いかないような顔をしながらもしりとりを続けた。

「かみのはらむすきーのき、きのー。」

「ココソノ草。」

またわからない言葉が出たが斎鹿は流すように首を傾けたため息を吐きながら進める。

「ここそのそうのっ、うさぎ。」

「待て、うさぎとは何だ。」

「もこもこした草食動物で繁殖力が高い小動物。」

「なるほど。では、ギノシス。」

「・・・ぎのしすのす、すいか。」

「スイカとは何だ。」

斎鹿は我慢も限界に達し、サリルトの膝の上で飛び跳ねて声を荒げた。

「もう！そんな『何だ何だ』って聞いてたら進まないわよっ！！
ってか、ここそのそうって何？草？花？何なのよ！聞いたことないわよっ！？ぎのしすって何？美味しいの！？」

サリルトは斎鹿の怒る様子には慣れたのか冷静に顔色を変えることもなく質問に答えた。そして、腹にまわした手に力を入れて暴れる斎鹿が落ちないように引き寄せた。

「ココソノ草は葉が丸くこの国では一番良く見られる草だ。春には白い小さな花が咲く。」

それに、ギノシスは愛玩用動物だ。食べたことはないの味はわからん。」

「そんなこと聞いてんじやないわよっ！！もういい！しりとり終わり！！」

斎鹿は冷静に答えるサリルトに腹を立てて自分の尻の下にある太股を横から音がするほどスよく叩いた。サリルトはさらに深く眉間に皺が刻まれたが口元は緩んでいた。

「わからないやつだ。」

斎鹿はサリルトの言葉を聞きながらサリルトにさらにもたれかかり目を閉じて不貞寝の体勢だ。口を尖らせながら寝ようとする斎鹿の髪を再び遊び始め、しばらくすると斎鹿から規則正しい寝息が聞こえてきた。

「本当にわからないやつだ。」

サリルトは斎鹿を起こさないように横抱きにした。斎鹿の髪がサリルトの首をくすぐるがそれを気にせずにサリルトはその髪に頬を寄せた。

斎鹿が眼を覚ますとそこは一面の花畑だった。白いクッションに頭を埋め、横になったまま視線を巡らす。

「え……。」

目をすり、もう一度景色を見廻すが色とりどりの花が咲き乱れた花園に間違いはない。

「……これは、ないわ。夢ね。こんなメルヘン乙女な夢みるなんて疲れてんのね。」

とりあえず……寝とこ。」

斎鹿はもう一度眼を閉じた。

第五十話 しりとりは難しい？（後書き）

ありがとうございました。

第五十一話 妖精シェーク

両手をぐつと上へと伸ばし、大あくびをしながら斎鹿は気だるそうに眼を瞬かせた。顔には暖かな日差しがあたり風は緩やかに花の香りを運んでいる。何とも昼寝には相応しい場所だ。

空から降り注ぐ日差しに再び瞼を閉じ、頭を横に向け僅かばかり眼を開けた。そこには、先程と変わらない色とりどりの花が咲き乱れ、花弁を風に飛ばしている。

どうやら自分は余程疲れているらしい、と斎鹿は右手で眉間をぐりぐりと強く押した。確かにこの3日で起こったことは今までにいた世界で友人に話したならば信じてもらえない事だろう。異世界旅行しただけでなく、その世界の公爵と何故か結婚することになってしまった、灰汁の強い姉や周囲の人々との出会いを語ったら即刻『大丈夫か!』と言われること受け合いだ。

斎鹿はまだ気だるい身体を起こし、首をゆっくりと回した。1周、2周と回すとゴリゴリという音が辺りの景色とは不釣り合いにも斎鹿の耳に聞こえた。

「ってか、これって夢でいいのよね？」

斎鹿は両手をパチンと音をさせ胡坐をかいている両膝に置いた。どうやらこの世界では衣装も変わるらしく先程までのパーカー、ジーンズではなく、今の服装は白のキュロットパンツに丸首ロングカットソーに裸足と真っ白けだ。この状況に頭がついていかず思わず耳の後ろを掻いた斎鹿は、突然耳元に聞こえた羽音に逃げようと頭を動かしたが、蠅はしつこく耳元を五月蠅く騒がしている。

「蠅、五月蠅いっ！」

斎鹿が自分の頬を蠅ごと叩き落そうとしたパチンと叩いた。感触からしてどうやら仕損じたようだ。

斎鹿は怒りのままに立ち上がり手当たり次第両手を振って蠅を退治しようとするが、耳元にはブーンという羽音が絶えることはない。

「うお！」

微かに斎鹿の耳に人の声が聞こえ、思わず振り回していた手を止めて辺りを見回すが人の居そうな気配はない。しかし、声は微かにだが変わらずに聞こえてくる。

「うおい！」

「痛いっ！」

斎鹿がキョロキョロと見廻していると自分の額にチクリとした痛みが走った。手で額を押さえ、僅かに目線を上にやると体長3?程の背中に透き通るような空色の羽を持った妖精らしきものが浮いていた。いや、妖精にしては愛らしさの欠片もない。斎鹿がそう思うのも無理はなかった。

妖精というのは、可愛らしい顔立ちで勝気な瞳、桜色の唇、金糸のような髪、出るとこ出て引つ込むところは引つ込んでいる細い肢体、飛ぶ姿は煌めいてまさしく伝説といえる姿。

それが、どうだろう。目の前にいるのは青と白のチェックのベストに濃茶のズボンにウエスタンブーツ、手には柄の長いフォーク、背中には赤いマント、眼は青く鋭い。何よりその姿は白くて美しい毛艶のシルバーウルフ。

「ようやく気付いたな！俺様はかの有名な」

「これはないわ。」

「つて、聞けよ!!」

斎鹿が狼の妖精に背を向けてその場から立ち去ろうとすると、見かけが厳つい割には可愛い声で大声を上げ、その小さい身体を素早く移動させ斎鹿の前に躍り出して再び斎鹿の額をフォークでつついた。

「夢の分際でご主人様に楯突こあたあ、いい度胸じゃない。」

「誰がご主人様じゃい!」

「私の夢なんだから私がご主人様でしょうがっ!」

「ばっかじゃないんですかあ? 頭、軽いんじゃないですかあ? ?」

狼の妖精は両手を肩の位置まで上げて掌を空へと向けると、ハントと鼻で笑い斎鹿を馬鹿にした。斎鹿はその態度に狼のベストの首後ろを持って上、下、右、左、と乱暴に振り回した。

「ぐぐぐぐぐぐぐらあ、あたたたたたあたまがあああ!!」

「てめえ、こら。ご主人様に向かってその態度なんじゃい? ああん! ?」

「すすすすすいままませせせんん!! すすすすいいいいいいままませせんんん!」

「よし。」

斎鹿は狼から手を離すと、仕返しとばかりにフンッと鼻で笑ってやった。狼はふらふらと不思議な動きを空中でしながら毛深い顔からは分らないが顔が青ざめ両手で口を覆っている。どうやら大層気分が悪いらしい。

「て、てめえ、ウエツ、俺様が誰か、ウプツ、わかってんのがあ！」

「知らないわよ。」

「ウツ、ちょ、ちょっと待ってけっ！」

そういうと狼は頬を膨らませたままフラフラと離れたところに飛んでいくと、ゆっくりと降下し花の中に埋もれてしまった。どうやら我慢が出来なかったらしい。

斎鹿は埋もれたところまで見終わると、そのまままた首を左右に振りながら歩き出した。狼の言葉は受け入れられなかったようだ。辺りを改めて見廻してもやはり花しかない。遠くの方には木が何本かあるのはみれたが他には何もない。

「てめえ、待ってけっただろうが！」

「・・・何でついてくんのよ。」

耳元に五月蠅く羽音が響くと共に狼が現れ、斎鹿は思わずげんなりとした表情を浮かべた。

狼はその顔を見てフンッと笑うと腰に手をあてて偉そうに踏ん返り返った。

「聞いて驚け！俺様はかの有名な」

「で、誰？」

「今、言おうと思ってたんだよっ！」

「あ、そ。」

「これだから近頃のやつはだめだっていつてんだ！軽い奴ばっか！
」！」

「・・・生意気だから、もう一発いっところ。」

「すいませんすいませんすいません、すいませーん！」

目の前にいる狼の後ろをむんずつと掴むと斎鹿はニッと口を緩めて思いつきりシェークした。

第五十一話 妖精シェーク（後書き）

ありがとうございました。

お気に入り小説登録数1000件突破、ありがとうございます。
これからも稚拙な文章ですが読んで頂ければ幸いです。

第五十二話 偉大な俺様？

狼が片手でパチンと指を鳴らすと光と共に緑の溢れる地面に先程まで斎鹿が枕に使っていた大きな白いクッションが現れた。どうやら座れということらしい。立たせておくと危険と考えたのか、気を遣ったのかはわからないが若干及び腰なところを見ると先程のシェークがだいぶ効いたようだ。

「で？」

斎鹿は不遜な態度でどかっとクッションへと腰を下ろした。狼は斎鹿の顔の位置まで高度を下げると両手を腰に当てて胸を張って話し始めた。

「あー、あー、オッホン！俺様は、管理人ヘンリー卿。人間、まさか人間界に轟く俺様の名前を知らない訳じゃねえだろう？」

「知らない。」

「………え。」

「知らないって。」

斎鹿とヘンリー卿は見詰め合ったまま固まっていた。

ヘンリー卿には自分を人間界にいるものが知らない者はいない有名な人物だという自尊心があった。王立教育機関ではヘンリー卿に關することだけで教科があるほどだと人間好きの精霊に聞いたからだ。そう聞いてから1000年以上ここに来る人間はヘンリー卿を敬ってきたというのに、その自尊心を一気に斎鹿は傷つけた。

斎鹿にとってはヘンリー卿だろうが空飛ぶただの狼だろうが関係ない。元々生きる世界が違っていたのだから。それを知らずにヘンリー卿は戸惑ったように斎鹿に聞いた。

「王立学校ではヘンリー卿について学ばなくなったのか？」

「ってか、王立学校行ってないし。」

「なに？」

ヘンリー卿は片手で顎を押さえながら考え込んだ。もしやこの人間は親から愛されてなかったのではないかと。勝手な勘違いながらも脳内では物語が進んでいく。

（人間の少女は親に愛されることなく、幼い頃から毎日毎日マツチを売っては病弱な母親と飲んだくれのダメな父親の面倒をみてきたのだろう。川での洗濯で手は荒れ、きつい日差しの中での肉体労働に肌は小麦色に焼け、そうした季節をいくつも巡り少女は成長し、王立学校へと入学する歳となったが当然家には少女を学校に行かせる金などない。得られるべき当然の知識も得られず、そんな家庭環境では少女が自分にした数々の無礼も屈折した性格も仕方がないと言えるだろう。それは酷過ぎる！なんつー親だ！）

勘違いも甚だしいヘンリー卿が顎を押さえていた手をジャケットのポケットへとつつこむとそこから白いハンカチを取り出して目を押さえた。

「お、おばえ、ぐろっじだんだなあ。」（お、おまえ、苦労したんだなあ。）

「何言ってんだかわかんないわよ。」

斎鹿は目の前で泣いているヘンリー卿を呆れたように見詰めるとため息を吐いた。

「よしっ！わかった。俺様がすべて説明してやる！安心しろ！」

突然張り切り出したヘンリー卿はフォークを頭上で大きく2回振るとそれは大きな黒いペンへと姿を変えた。そして、ヘンリー卿は斎鹿に背を向けて空に文字を書くように自分の体格にはあつていないペンを必死に動かした。空に文字は書けるはずがないという常識はここでは通用しないらしい。空には立派に『偉大なヘンリー卿！その全てとこの世界における常識（初級者編）』との文字が書かれている。

文字を書き終わったヘンリー卿は斎鹿へと向き直った。

「この世界には人間界と精霊界がある。そのちょうど真ん中にホールロウっていういくつかの穴があつてそこが精霊界への入口って言われてる。人間界ではな。まあ、実際はそのホールロウは管理人が勝手に作ってただけだな。これ内緒な。

で、その管理人つてのが俺様。管理人は精霊と人間との契約の管理、精霊界への異物の出入りの管理とかまあ色々やってて、大変な仕事で偉大な俺様しか出来ねえ仕事だ！」

「へえ。で？」

「俺様、ヘンリー卿は元々この世界を創った。ってか、世界を創った精霊を創ったのが俺様であるわけよ！どおだ！？すごいだろ？」

「……微妙。」

「なんでだよ！俺様、かなり立場高いよ！この世界で3番目には確
実に入ってるよっ！！ってか、1番だつてーのっ！！」

「生意氣言つと振るよ？」

「……………すみませんっした。」

第五十二話 偉大な俺様？（後書き）

ありがとうございました。

文章についてコメントを頂きましたが、途中から文章を変えることは私の実力では難しく本編完了後にすべて編集していきたいと思えます。

ご了承ください。

第五十三話 私の守護精霊

ヘンリー卿は斎鹿に頭を下げて詫びると咳払いをして空に新しく文字を書き始めた。斎鹿は首をゆつくりと回すと何故自分はこの様な面倒な相手にばかり遭遇するのかと思わず舌打ちをした。それを聞いたヘンリー卿はビクツと身体を震わせた。

その様子にさすがに憐れになったのか斎鹿は出来るだけ優しく声で尋ねた。可愛い女の子の定番である小首を傾げて右手の人差指を唇につけるというおまけ付きだ。

「ねえ、少し聞きたいんだけど、どうして私はここに居るのかなあ？」

ヘンリー卿は斎鹿の態度の変わりように身体をビクつかせたが、斎鹿の下手での質問にまんざらでもないようにふんぞり返って答えた。

「そうまで言うならこの偉大な俺様が分かり易く教えてやる。人間がここに来る理由は1、俺様に呼ばれた選ばれた人間、2、精霊に呼ばれた人間、3、迷い込んだ人間、この3つだが……」

3だとおまえはもう生きてないしな。だから1か2？」

「ちょ、ちよつとごめん。何で3だと生きてない訳？」

「ああー、ここの空気は人間が生きられる純粹な空気じゃねえんだよ。色んな要素が溶け込んで、簡単に言えば人間の身体には毒なんだよ。5分もいれば肺が溶けて呼吸が出来ねえ。」

「こわっ！」

「だから、1か2だと言ってっけど、1じゃねえから多分2?」

「多分?」

「上位精霊以下の契約は俺様はノータッチだからわかんねえよ。お前、精霊と契約してんの?」

斎鹿はヘンリー卿の言葉に眉間に皺を寄せて考えた始めた。頭はフル回転しているのだろうがなかなか答えは出てこない。

「契約してねえのかしてるかぐらいわかんねえのかよ?」

考え込んだ斎鹿にヘンリー卿は馬鹿にするように言った。それを聞いた斎鹿が黙っているはずもなく、立ち上がった斎鹿の手に捕らわれたヘンリー卿は重力を関係なく振られ続ける。

「おばばばばあゝ!」

「あつ!なんか変な刀持ってる!ルーが言っには勝手に契約されたんじゃないかって・・・。」

「ぐおおおお!」

「ちょっと聞いたんの!?」

「聞けるかあ!」

ヘンリー卿は目を回しながらも必死に叫んだ。その言葉に手を止めた斎鹿はゆっくりと自分が腰かけていたクッションの上にそつと

置いた。目を回したままのヘンリー卿はクッションに身を預けて空を仰いでいる。今回は吐かずに済みそうだ。

「はあはあはあ……。」

斎鹿はさすがに悪いと思ったのか側で正座して手で静かに風をおくっている。しばらくしてヘンリー卿が落ち着くと斎鹿は先程と同じ言葉を伝えた。

「怪しいな。手っ取り早くそれを見た方が答えがでるだろ。ん？」

ヘンリー卿はクッションの上に胡坐をかくと空いている方の手を斎鹿へと差し出した。

「持っていない。」

「ちっ。」

斎鹿はヘンリー卿が横を向き小さく舌打ちしたことを見逃さなかった。

「……今舌打ちしたよね？」

「……してねえよ。本物がなくても見た方が早えな。」

そういうとヘンリー卿は持っていたペンをその場に置き空いた両手を一度しっかりと組んだ。目を閉じて少しずつ組んだ手の中に光が集まり手をゆっくりと離していく。すると、その両手の間には小さな球体がふわふわと宙に浮いていた。その球体は外に発していた光を少しずつ球体内へと取り込んでいく。取り込まれた光はまるで

モヤのように球体内で動き回り半透明な斎鹿の刀へと姿を変えていく。

ヘンリー卿はゆっくりと目を開けて指先を少し動かすと球体の中の刀は色々な角度に動き回り出した。

「こりや上位精霊が関わってること間違いなしだな。」

「わかんの？」

「誰に聞いてんだ、誰に。俺様が創ってやったんだぜ。」

ヘンリー卿はそう言うのと両手を球体にそわせて大きく動かした。球体の中は再び形が変わりサリルトになっていた。それからも順番にシアン、マゼンタ、アーバイン、マリーナ、ロハス、総一郎、と変わった。

「げえ、こいつの知り合いかよ……。」

「知り合い？」

「ああ……まあ、教皇は精霊界と人間界を繋ぐ唯一の人間だからな。」

ヘンリー卿は大きくため息を吐くと苦笑いを浮かべた。そうしている間にも球体の中は斎鹿が出会った人や物が映し出される。その1つを目にした時、ヘンリー卿は興奮したように声を上げた。

「おっ！ いたいたいたいた！！ こいつが上位精霊だなあ。上手く化けてやがる。」

「どれどれ？」

「これこれ。」

齋鹿が球体を覗きこむとそこに映っていたのはサリーだった。

「……………って、チモシーじゃん!？」

第五十三話 私の守護精霊（後書き）

ありがとうございました。

第五十四話 なんなのこれ？

サリイは白い柔らかな毛が生えた腹を上に向けて伸びをするように手足を伸ばすと大欠伸をした。球体に映しだされただらしない姿に斎鹿は、これが本当に精霊なのかとヘンリー卿に疑いの目を向けた。ヘンリー卿は斎鹿の視線にビクツと身体を震わせると、黄緑のクッションの上で丸くなり寝る体勢に入ったサリイが映る球体に添えていた手を混ぜるように動かした。すると、映っていたサリイは再び白いモヤに変わった。ヘンリー卿が球体を挟んで両手を合わせ、その両手を広げるように離すと球体はその形を小さな斎鹿の刀に変えた。その刀の柄をヘンリー卿が掴み鞘から抜くとその刃を見定めるように眺めた。

「こりやかなりの業物だな。」

「それって…」

「ん？ああ…思ってた通り上位精霊だった方がいいが、刀を見る限り力が大きすぎる。この刀いつから持ってたんだ？」

ヘンリー卿は先程までとは違う真剣な面持ちで斎鹿へと問い掛けた。斎鹿はその問いに左斜め上に視線を向けてしばらく考え、思い立ったように左手を受け皿に右手を拳にして打ちつけてあっけからんと答えた。

「その刀は元々私のじゃなくて神社に奉納されてて、んで、なんか黒い影に私が襲われて、逃げ込んだら刀があって、ピカツと光って異世界！って感じで手に入れた。」

「…なにそれ。」

「だーからー、その刀は元々私のじゃなくて神社に奉納されてて、なんか黒い影に私が襲われて、逃げ込んだら刀があって、ピカツと光って異世界！って感じで手に入れたんだって。」

「……なにそれ、なにそれ！」

ヘンリー卿は信じられないと眼を見開いて斎鹿を見ると大声を上げると立ち上がり、持っていた柄を離れた。刀はヘンリー卿が手を離しても下に落ちることもなく空中にふわふわと浮いている。

「異世界からやってきたなんて大事なことでなんで最初に言わねーんだよ！大事だよ、それ凄く大事！ってか、異世界から来てなんでそんなに普通にしたられんだよ！てめえ、おかしいんじゃない？ってか、異世界人がこの世界に来たことに気付かない創造主、ってか俺ってダメ野郎じゃん！？」

ヘンリー卿は両膝が汚れることも気にせずに崩れ落ちるように膝をつくと、頭を抱えて身体を激しく動かした。斎鹿はその様子に呆れたような視線を向けると頭を抱えているヘンリー卿の小さな背中を人差し指で出来るだけ優しく撫でた。

「はいはい、ごめんごめん。でも、いきなり『異世界人です』って言っちゃったらどうかおかしい人みたいでしょ？」

「だからって！だからって、俺様って何やってんだー！！」

「わかったから話を進めてくれないかな？ちよつとイラツとしてきた。」

斎鹿が撫でていた背中をぐっと押すとヘンリー卿の身体が地面へと沈んだ。ぐえっと蛙のような声を出したヘンリー卿が素早く起き上がると顔には茶色い土と花の花粉がついていた。その表情は先程までの沈んでいた顔とは違い眉間に皺を寄せて怒りにふるえている。

「何すんだ！俺様の素敵な顔に土がついちまったじゃねえか！」

「それはどうでもいいんだけど私、こんなところでゆっくりしてたくないんだって。もう起きないと奴になんかされてそうだし…。」

「だから、夢じゃねえよ！精神体、つまり魂だけでこっちに来てっから、身体はそのままそこにあるんだよ。と、いつでも時間の進みはこっちとそう変わんねえ。まあ、俺様は仕事が早いから、てめえの代わりに飯の精神体をてめえの身体に入れといたから時間は気にしないでいいぜ。」

親指で自分を指して斎鹿に『俺様は偉いんだぞ』と威張るように斎鹿を見るが、斎鹿は勝手に変な物を自分の身体に入れられたと聞いて冷静でいられるはずもなくヘンリー卿の首根っこを掴んで睨みつけた。

「なに変な物を人さまの身体に入れちゃってしてくれてる訳？」

「変な物じゃねえ！飯の精神体は持ち主の状況に合わせて周囲に気付かれないよう完璧にてめえを演じてるはずだ！」

「…もうわかったからさあ、とりあえず精霊の話から順番に話して！飯のなんちゃらはその後よ…！」

斎鹿はヘンリー卿の強気の態度にいちいち反応しては埒があかないため息を吐き自分が折れることにした。ヘンリー卿はその態度にますます苛立ったように口を尖らせて斎鹿に掴まれたまま話し始めた。

「まず異世界から来たって言っただろ？それは上位精霊が連れてきたと考えた方がいいだろうな。黒い影ってのは、多分その刀が元々持っていた力が溢れだして人間の感情や自然界の変化に長い時間触れていたことによって本来清浄であるものが異質な物に変わってしまったんだろうよ。で、てめえは襲われたと思ってんだろ？が、刀の持ち主のお前に危害をくわえようって訳じゃなく引き寄せられてんだろ？。精霊は自分の主のもとにいるのが喜びの1つだからな。つたく、いくら上位精霊で俺様の許可なく契約できるからって異世界人を勝手に連れてくんなんてーの。」

「で、契約を勝手に結ばれてるとどうなるの？」

「ああー…一般的には契約を結ぶと精霊の力が使える。てめえの場合は精霊をいちいち通さなくても刀が媒介になってるからある程度なら力が使える。まあ、精霊と人間の契約はどっちにも得があるからすんだけどな。」

「得？」

「まあ、それはおいおい。」

で、てめえが精霊界にきた理由だがな、俺様なりに考えたんだが…てめえは元々この世界の人間じゃねえ。いくらこつちの世界がてめえの世界と同じなように見えても精霊と関わってるこの世界じゃ魂の質が重要になってくる。魂のつくりがこつちとは違う世界の出身じゃ契約しても負担がかかるかもしれねえからこつちで綺麗にし

てしまおうってことじゃねえかと。まあ、ここに来た時点でクリーニングはされてんだけどな。」

「クリーニング？」

「簡単にいえば掃除だ。いくら魂が綺麗でも外気によって魂の周りが汚れてしまう。この世界ではそれが付く前に精霊と契約して魂に汚れがつかないようにしてくれんだが、てめえの場合は異世界人の上ある程度育ってっからこっちに放り込んで強制的に魂だけの姿にしてクリーニングしたんだよ。」

「汚れが付いたから綺麗につて…人を洗濯もの扱いしないでよ！」

斎鹿は掴んだままのヘンリー卿を空中へと放り出した。突然放り出されたヘンリー卿はバランスを取ろうと手足をバタバタと動かし、たがそのまま花の中へと落ちていった。

「いてえ！」

花と花の間から顔を出したヘンリー卿は後頭部を手で撫でながら斎鹿を睨みつけた。斎鹿はそんなヘンリー卿の睨みにも負けずに睨みかえす。

「…くそっ！」

ヘンリー卿は苦々しそうな顔をして顔を背けた。勝ち誇った顔の斎鹿が鼻で笑うと腕組みをした。

「はい、じゃあ次は仮のなんちゃらの話してよね！」

「飯のなんちゃらじゃねえ！飯の精神体・ひとだま君だ！」

ヘンリー卿は花の間から勢いよく飛び出すと空中で胡坐をかいて不機嫌そうに斎鹿を見ると咳払いをして飯の精神体・ひとだま君について話し始めた。

「ひとだま君は人間界と精霊界で人間が都合よく動けるようにつくった俺様の最高傑作だ。人間が精霊界に来ると人間界に置かれた器つまり身体の方は仮死状態になる。その状態が長く続くと離れていた魂が器に戻れずに彷徨うことになる。それを防ぐために器に飯の精神体・ひとだま君を入れる。そうすると問題なく本来の魂が元の器に戻るって訳だ。このひとだま君の凄いところは『入った器の状況に合わせて振る舞う』ってとこだな。説明じゃわかりにくいし実際に見てみつか！」

ヘンリー卿は子どものように嬉しそうに身振り手振りで説明すると、先程と同じように目を閉じて少しずつ組んだ手の中に光が集まり手をゆつくりと離していった。すると、その両手の間には小さな球体がふわふわと先程見た球体が宙に浮き、球体の中のモヤはぐるぐると回りはじめ斎鹿の姿が映し出されていく。

「ぶっ！！！」

斎鹿は映し出された映像を見て思わず嘔き出した。

なんせ自分がサリルトと熱烈なキスをしていたのだから。

「なんなのこれ！？」

第五十四話 なんなのこれ？（後書き）

ありがとうございました。

第五十五話 ひとだま君、大暴走

サリルトは、表情を変えずに内心、面喰っていた。

自分にもたれて安眠を貪っていた婚約者が、突然目覚めたと思ったら熱烈に口づけをしてきたのだ。しかも、その婚約者は散々「変態」や「結婚嫌っ」と、自分を拒否してきた相手なのだから、この反応も当然のものだろう。

斎鹿は、サリルトの唇から己の唇を離すと、ゆっくりと舌舐めずりした。その目は潤み、唇はぷっくりと色づき、サリルトは思わずごくりと唾を飲み込んだ。

「サー様、斎鹿、サー様が大好き。」

「……………」

「サー様と結婚するのが待ち遠しいです。」

「……………」

「サー様も斎鹿と一緒に気持ち？」

斎鹿は、サリルトを見上げると首を傾げて尋ねた。その態度に、サリルトは眉間に皺を寄せ、斎鹿の額に大きな手を当てた。

「……………熱はないようだが。」

サリルトの態度が不満だったのか、斎鹿は頬を膨らませ、サリルトと向かい合うように座り直すと、その胸をぽかぽかという音が似合うような叩き方で叩いた。

「もう！サー様、斎鹿は真剣に言ってるんですう！」

サリルトが口を再び開こうとすると、斎鹿はそれを制するようにサリルトの首に手を回し、深く口づけた。普段は表情を変えないサリルトも、舌を絡められ、口内を貪るように口づける斎鹿に目を見開いた。しかし、それも一瞬のことで他人には気付かれないほどだ。サリルトは斎鹿の背に手を回し、経験の差か、斎鹿の口内の敏感な部分を捜していく。立場は逆転し、斎鹿は口づけが終わるころには、息を乱しながらサリルトの胸にもたれかった。

「サー様とキスするの好き。もつとして？」

斎鹿は顔を上げると、潤んだ瞳でサリルトを見上げた。その瞳を見たサリルトは身体の中で何か黒いものが蠢くのを感じると、斎鹿の唇に引き寄せられるように吸い付いていた。サリルトの右手は斎鹿の服の中でなめらかな素肌を撫でる。

「…あつ。」

小さく声を上げた斎鹿に、サリルトは1度唇を離すと、下は顎を滑り落ち、首に吸い付いた。首には赤い印がつき、斎鹿も負けじとサリルトの白い首に吸い付く。

「つかない…。」

吸い付いていた唇を離して、サリルトの首をまじまじと見詰めるが、上手く赤い印はついていない。それに機嫌を損ねた斎鹿は、サリルトの首に再び顔を埋め、吸いついた。サリルトは斎鹿の様子にわずかに口元を緩めると、後頭部に左手をやり、斎鹿を揺れる馬車

で安定感を保てるように支えた。

「もったときつく吸えばつくぞ。」

サリルトの言葉に斎鹿は吸う力を強め、サリルトの首にチクリとした痛みが走る。わずかに息を漏らしたサリルトに、斎鹿は唇を首から離れた。

「サー様、これでサー様は斎鹿のって印が出来ました！」

嬉しそうに笑う斎鹿にサリルトは素肌を撫でていた手を止め、その顔に頭に添えていた手を滑り落とし、頬に当てると尋ねた。

「このように口づけをすることも以前は嫌がっていただろう。」

「…素直になれなかったの。サー様のこと、大好きだったのについて思ってることと違うことを言っちゃうの…。ほんとはサー様のこと大好きなのに。」

「……。」

「サー様、嫌いになったの？嫌いばかり言う斎鹿のこと、嫌いになった？」

斎鹿は涙を浮かべ、焦ったようにサリルトにすがりついた。そんな斎鹿の見たことのない弱気な姿にサリルトは言い得ない感情が溢れ出すのを感じ、斎鹿の唇を舐めた。斎鹿はその行動にぽかんとサリルトを見上げる。

「…嫌いになるかもな。」

「いやあっ！」

「だが、おまえが10回私のことを愛していると正確に言えれば考えてやる。」

「…10回？」

「そうだ。」

「言う！」

斎鹿は必死な様子で「サー様を愛してる」と言い始めた。しかし、順調なのも最初の3回までで、サリルトが服の中に忍ばせていた右手を動かし、斎鹿の唇に口づけを落とした。

「サーさま、を、うんっ、あ、あいし、てるっ！」

「やり直し。」

「ふえ。さーさまあ、を、あいし、てるう。」

「あと6回。」

サリルトは、斎鹿の様子を気にすることもなく、口づけをさらに深めたのだった。斎鹿はサリルトに嫌われまいと必死に言葉を紡ぐうとするが、なかなか上手く言えず、目に涙がたまっていく。それでも言葉を紡ごうとする斎鹿に、サリルトは妖しい笑みを浮かべた。

サリルトは知らない。

その官能的で素直な齋鹿が、実は仮の精神体・ひとだま君である
ことを。

第五十五話　ひとだま君、大暴走（後書き）

ありがとうございました。

第五十六話 絆されたのは間違いない？

「おかしいとは思わないのっ！明らかにいつもの様子とは違うじゃないの！」

斎鹿は球体を両手で掴み、苛立ちを押さえられない様子で映像を睨みつけた。一緒に映像を観ていたヘンリー卿は、ヒューとからかうように音をたてニヤニヤとしている。

球体の中ではサリルトと斎鹿（仮の精神体・ひとだま君）が口づけを交わし合い、サリルトの手が斎鹿の服の中にまで伸びている様子が映し出されていた。

「ほれみろ。お前の旦那は普段のお前だと完璧に思ってるぞ。」

ヘンリー卿は誇らしげな顔で斎鹿に視線を移し、再び空中に浮くと斎鹿の頬を指でつつんと突いた。

ヘンリー卿は満足そうではあるが、映像に映るサリルトは、決して普段通りの斎鹿だと思っている訳ではなく、おかしいと思いながらも斎鹿本人であることは確実であるし、弱弱しく可愛らしい斎鹿の行動について欲情して「やっちまえ」という湧きあがった感情に流されているだけだった。けして、ひとだま君の性能がいい訳ではなく……どちらかといえば、失敗作だ。

「旦那じゃない。」

バリッ！

球体を地面に叩きつけた斎鹿の地の底から聞こえてくるような低い声にヘンリー卿が斎鹿の顔をおずおずと見ると、目は血走り、鼻

の穴は荒い呼吸で膨らんだり閉じたりを繰り返し、口元は引き攣っている。短い時間しか付き合いのないヘンリー卿でもわかるほど、斎鹿は怒り心頭だった。

斎鹿は睨みつけながら頬をつついていたヘンリー卿の体を手で握るように掴んだ握力はもはや加減もされずに息をするのが辛いほどだった。

「今すぐ私を元に戻しなさい。今すぐっ！」

「まだ精霊の話しも途中なんだが…。」

「今すぐ戻しなさい!!」

「ぐええ！は、はいはい！戻します戻します!!」

ヘンリー卿を握りしめる手がきつくなり、これはいよいよ命の危機を感じるレベルである。これ以上、逆らわない方が身のためだと首を縦に振りながら必死に返事をした。斎鹿がようやく手からヘンリー卿を開放すると、ヘンリー卿は手を2回叩いて柄の長いフォークを出すと、それを頭上で2回大きく左右に振る。

「いいか？」

「急いでっ！」

「はいっ！じゃあ、目閉じて！」

斎鹿は言われるがまま目を閉じるが、その眉間には皺がたつぷりと刻まれている。

「じゃ、またな。」

パチン！と大きな音がすると、斎鹿は足元がいきなりなくなるような感覚に襲われた。まるで地面がなくなっただかのように自分の身体は急にガクンと落ちていき、また突然今度は重力がなくなっただかのようにフワフワと身体が漂う。かと思えば、重力がいきないかわり、ものすごいスピードで何かに吸い込まれるような感覚に襲われた。

斎鹿の気分は滅入る一方だ。行きは知らない間に向こうに行けたが、帰りはかなり大変だ。正直2度と体験はしたくないほどだった。

吸い込まれる感覚はなくなったが、今度は背中を這いまわる手の感触に斎鹿は急いで目を開けた。目の前にはサリルトの顔があり、その目はギラギラと光っていた。

「何してんのよー！！」

怒り心頭の斎鹿は大声で叫ぶとサリルトの頬を思い切り叩こうと手を上げた。

が、いとも簡単にその手はサリルトの手で止められてしまった。その行動がますます斎鹿の怒りに触れ、歯を食いしばり悔しさを滲ませていた。

「いつもと様子がおかしいとか思わない訳！？私があんなことする訳ないでしょー！」

「いつもと様子が違うことはわかつてはいたが、自分の欲望には忠実でいたいのだ。妻になるのだからこれくらいで騒いでどうする。」

「なにを偉そうに言ってるのよ!」

サリルトは悪いと思っている様子もなく、逆に呆れたようにため息を吐いた。未だに片手は暴れる斎鹿の手を押さえている。

「何がしたいのだ、お前は。」

「何がしたいって、私がしたくてしたんじゃないわよ!」

斎鹿は掴まれた手をサリルトの手から逃れるように無理矢理外した。唇を尖らせてサリルトの膝の上からも退こうとするが、サリルトが斎鹿の腰に両手を回して向き合ったまま逃がそうとしない。斎鹿はせめてもの反抗に顔をサリルトから背けた。

「斎鹿。」

「...」

サリルトの問い掛けを無視し、斎鹿は何とか抜けだそうと背中にまわせた手を解こうとしているがなかなか上手くいかない。サリルトは大きくため息をつき、背中に回していた手を離し、両手で斎鹿の両頬を挟み込むと視線が合うように無理矢理顔を向かせた。

「私にはお前がどうなってるのようになったのかはわからない。全てを話してくれないか？斎鹿の愛らしさに我を忘れてしまったのは謝罪しよう。私はお前のすべてが知りたい。」

「…。」

サリルトの真剣な瞳に斎鹿は胸が高鳴るのを感じた。なぜだか、斎鹿はだんだんとこの融通のきかない公爵に絆されていたのだ。

「それと…。」

「？」

「まだ、2回私を愛していると言っていないぞ。」

「…。」

絆されたのは間違いだったのかも知れない。

第五十六話 絆されたのは間違い？（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8822o/>

明後日の花嫁

2011年9月3日22時21分発行